

市内遺跡（旧大里町） II

箕輪遺跡 4次、5次

中廓遺跡 3次 西浦遺跡

市内遺跡（旧江南町） III

元境内遺跡 4次

宮脇遺跡 2次 諏訪脇遺跡

箕輪遺跡4次、5次・中廓遺跡3次・西浦遺跡・元境内遺跡4次・宮脇遺跡2次・諏訪脇遺跡

二〇〇九

埼玉県熊谷市教育委員会

2009

埼玉県熊谷市教育委員会

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第4集

市内遺跡（旧大里町） II

みのわ
箕輪遺跡 4次、5次

なかくるわ
中廓遺跡 3次

にしうら
西浦遺跡

市内遺跡（旧江南町） III

もとけいだい
元境内遺跡 4次

みやわき
宮脇遺跡 2次

すわわき
諏訪脇遺跡

2 0 0 9

埼玉県熊谷市教育委員会

序

新熊谷市は埼玉県北部の「中核都市」として、平成21年春に移行します。妻沼・大里・江南の旧3町と一緒に名実ともに県北最大の都市として新しい未来を歩んでいきます。

新市は関東随一の大河川である利根川と県土を貫流する荒川の2大河川に育まれた肥沃な大地と希少種「ムサシトミヨ」に代表される多様な生物が生きる豊かな自然が広がっています。

こうした自然環境のもと、新市には先人たちの残した多くの文化遺産が、土地に人に受け継がれています。すでにその多くは後世に伝えるべく、適切な保護の施策が図られているところですが、代表的な遺跡としては、国指定史跡「宮塚古墳」、埼玉県指定史跡「塩古墳群」・「とうかん山古墳」・「甲山古墳」などの一大古墳の姿があります。

さらに、地下に埋蔵されている多くの遺跡を発掘した際には、学術刊行物として埋蔵文化財調査報告書を作成し、その成果とともに出土資料を市立江南文化財センターなどで公開しています。

本書は旧町での発掘調査後、新市の文化財資料として刊行するものです。今後、郷土研究等の基礎資料として広く活用されることを願います。

刊行に際し、発掘調査及び報告書刊行までに、御協力をいただいた関係者の皆様には厚く御礼申し上げます。

平成21年3月

熊谷市教育委員会教育長 野原 晃

例　　言

- 1 本書は、市内遺跡（旧大里町）Ⅱ「箕輪・中廓・西浦遺跡」と市内遺跡（旧江南町）Ⅲ「元境内・宮脇・諫訪脇遺跡」の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、個人住宅造成・建築工事に伴う事前の記録保存目的の発掘調査である。市内遺跡Ⅱは旧大里町教育委員会が、市内遺跡Ⅲは旧江南町教育委員会が実施した。整理・報告書作成作業は、熊谷市教育委員会で実施した。
- 3 本事業の組織と経緯は、各「発掘調査の概要」に記載のとおりである。

市内遺跡Ⅱにかかる、

箕輪遺跡の発掘調査期間は、平成10年10月29日から平成10年11月13日及び、
平成12年2月28日から平成12年3月3日までである。

中廓遺跡の発掘調査期間は、平成13年3月16日から同年3月26日までである。

西浦遺跡の発掘調査期間は、平成10年7月16日から同年8月2日までである。

市内遺跡Ⅲにかかる、

元境内遺跡の発掘調査期間は、平成11年10月1日から同年10月29日までである。

宮脇遺跡の発掘調査期間は、平成12年7月1日から同年8月1日までである。

諫訪脇遺跡の発掘調査期間は、平成11年9月16日から同年9月30日までである。

市内遺跡Ⅱ・Ⅲにかかる整理・報告書作成期間は、平成20年4月1日から平成21年3月21日まで
である。

- 4 発掘調査の担当は

市内遺跡Ⅱを旧大里町教育委員会の出縄 康行が担当した。

市内遺跡Ⅲを旧江南町教育委員会の森田 安彦が担当した。

整理・報告書作成は熊谷市教育委員会の新井 端と寺社下博が行ない、本文執筆は新井が担当した。

- 5 発掘調査における写真撮影は、

市内遺跡Ⅱの現場写真は出縄が、市内遺跡Ⅲの現場写真は森田が撮影した。遺物の写真撮影は新井
が行なった。

- 6 本書に関わる資料は熊谷市教育委員会が保管している。

- 7 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関などから御教示、御協力を賜った。記して感謝申しあげます。

浅野 晴樹　　堀口 万吉　　海野 芳聖

凡　　例

本書における挿図指示は次のとおりである。

1 挿図縮尺は、各挿図中に示してある。

方位の無いものは、原図上下の表記とした。

遺構の略記号は次のとおりである。

S I 壁穴住居跡 S S 集石土壙 S K 土壙 S D 溝 S E 井戸

2 挿図中、断面図に添えてある数値は標高を示している。

3 挿図中の遺物の縮尺は、次のとおりである。

土器片・土器…1／3・1／4・1／6 石器・石製品…1／3・1／4

土製品・滑石製模造品・古錢…1／2 瓦・石製品…1／6

4 遺物実測図の表現方法は、以下のとおりである。

土師器・須恵器・土器・石器断面 白抜き

炭化物付着、釉薬等は網目懸

5 挿図中の遺物はすべて観察表にその内容を記した。計測数値中、()が付されるものは推定値を表す。

6 遺物拓影図は、原則として向って左側に外面を示した。なお、内外面両方を示す場合には左側に内面、右側に外面を示した。

7 写真図版の遺物縮尺はすべて任意である。

8 土層及び土器の色調は、『新版標準土色帖第14版』（小山正忠・竹原秀雄編著、農林省農林水産技術会議事務局監修、財団法人日本色彩研究所色標監修、日本色研事業株式会社発行1994）を参考にした。

石材の鑑定については、海野芳聖氏にご教示を得た。

目 次

序
例 言
凡 例
目 次

I 箕輪遺跡 4次5次の調査	3	VI 諏訪脇遺跡の調査	97
1 発掘調査の概要		1 発掘調査の概要	
2 遺跡の立地と環境		2 遺跡の立地と環境	
3 検出された遺構と遺物		3 検出された遺構と遺物	
II 中廓遺跡 3次の調査	23	VII 小 結	104
1 発掘調査の概要			
2 遺跡の立地と環境			
3 検出された遺構と遺物			
III 西浦遺跡の調査	27	図 版	
1 発掘調査の概要		箕輪遺跡 4次	
2 遺跡の立地と環境		箕輪遺跡 5次	
3 検出された遺構と遺物		中廓遺跡 3次	
IV 元境内遺跡 4次の調査	45	西浦遺跡	
1 発掘調査の概要		元境内遺跡 4次	
2 遺跡の立地と環境		宮脇遺跡 2次	
3 検出された遺構と遺物		諏訪脇遺跡	
V 宮脇遺跡 2次の調査	73	報告書抄録	
1 発掘調査の概要			
2 遺跡の立地と環境			
3 検出された遺構と遺物			

挿図目次

- 第1図 周辺遺跡と調査地点の位置
第2図 箕輪遺跡位置図・発掘調査地点図
第3図 箕輪遺跡第4次遺構配置図
第4図 箕輪遺跡第4次遺構断面図
第5図 箕輪遺跡第4次遺物分布図
第6図 箕輪遺跡第4次出土遺物(1)
第7図 箕輪遺跡第4次出土遺物(2)
第8図 箕輪遺跡第5次遺構配置図
第9図 箕輪遺跡第5次遺構実測図
第10図 箕輪遺跡第5次遺物分布図
第11図 箕輪遺跡第5次第10号住居出土遺物(1)
第12図 箕輪遺跡第5次第10号住居出土遺物(2)
第13図 箕輪遺跡第5次1号溝・2号溝・2号土壙・
遺構外遺物
第14図 中廓遺跡位置図・発掘調査地点図
第15図 中廓遺跡第3次遺構実測図
第16図 中廓遺跡第3次出土遺物
第17図 西浦遺跡位置図・発掘調査地点図
第18図 西浦遺跡遺構配置図
第19図 西浦遺跡第1号井戸実測図
第20図 西浦遺跡土壙実測図
第21図 西浦遺跡ピット全体図(1)
第22図 西浦遺跡ピット全体図(2)
第23図 西浦遺跡ピット全体図(3)
第24図 西浦遺跡溝・ピット実測図
第25図 西浦遺跡ピット断面図(1)
第26図 西浦遺跡ピット断面図(2)
第27図 西浦遺跡ピット断面図(3)
第28図 西浦遺跡ピット断面図(4)
第29図 西浦遺跡ピット土層別分布図(1)
第30図 西浦遺跡ピット土層別分布図(2)
第31図 西浦遺跡出土遺物
第32図 諏訪脇遺跡・元境内遺跡・宮脇遺跡の地形
と調査地点
第33図 元境内遺跡第4次遺構配置図
第34図 元境内遺跡第4次第25号住居実測図・カマ
ド実測図
第35図 元境内遺跡第4次第26・27号住居実測図
第36図 元境内遺跡第4次第28・29・30号住居実測
図
第37図 元境内遺跡第4次第28号住居・カマド実測
図
第38図 元境内遺跡第4次第29号住居・カマド実測
図
第39図 元境内遺跡第4次第31・32号住居実測図
第40図 元境内遺跡第4次第2号溝実測図・出土遺物

- 第41図 元境内遺跡第4次第1号土壙・第1号集石
実測図
第42図 元境内遺跡第4次検出地震痕跡土層断面図
第43図 元境内遺跡第4次第25号住居出土遺物
第44図 元境内遺跡第4次第26・27号住居出土遺物
第45図 元境内遺跡第4次第28号住居出土遺物(1)
第46図 元境内遺跡第4次第28号住居出土遺物(2)
第47図 元境内遺跡第4次第28号住居出土遺物(3)
第48図 元境内遺跡第4次第29号住居出土遺物(1)
第49図 元境内遺跡第4次第29号住居出土遺物(2)
第50図 元境内遺跡第4次第32号住居出土遺物
第51図 元境内遺跡第4次第25・29・31・33号住居、
土壙、集石、ピット一括出土遺物
第52図 宮脇遺跡第2次遺構配置図
第53図 宮脇遺跡第2次第1号住居実測図
第54図 宮脇遺跡第2次第1号住居遺物分布図・カ
マド実測図
第55図 宮脇遺跡第2次第1号住居出土遺物(1)
第56図 宮脇遺跡第2次第1号住居出土遺物(2)
第57図 宮脇遺跡第2次第1号住居出土遺物(3)
第58図 宮脇遺跡第2次第1号住居出土遺物(4)
第59図 宮脇遺跡第2次第1号住居出土遺物(5)
第60図 宮脇遺跡第2次第1号住居出土遺物(6)
第61図 宮脇遺跡第2次第2号住居カマド実測図
第62図 宮脇遺跡第2次第3号住居実測図
第63図 宮脇遺跡第2次第2・3号住居出土遺物(1)
第64図 宮脇遺跡第2次第3号住居出土遺物(2)
第65図 宮脇遺跡第2次第3号住居出土遺物(3)
第66図 宮脇遺跡第2次第1号溝、第1・8・10号
ピット実測図
第67図 宮脇遺跡第2次第1・2号土壙実測図
第68図 宮脇遺跡第2次土壙・ピット包含層出土遺
物
第69図 諏訪脇遺跡遺構配置図
第70図 諏訪脇遺跡第1・2号住居・カマド実測図
第71図 諏訪脇遺跡第1・2号住居、一括出土遺物
第72図 諏訪脇遺跡第1・2号土壙実測図

観察表

- 箕輪遺跡出土遺物観察表
中廓遺跡出土遺物観察表
元境内遺跡出土遺物観察表
宮脇遺跡出土遺物観察表
諏訪脇遺跡出土遺物観察表

市内遺跡（旧大里町） II

箕輪遺跡 4次、5次

中廓遺跡 3次 西浦遺跡

I 箕輪遺跡4次・5次の調査

1 発掘調査の概要

調査にいたる経過 箕輪遺跡は、過去5次の発掘調査が旧大里町教育委員会の手で行われた。1次から3次までの調査報告書刊行に続き、本書にて4次・5次の報告を行うものである。1次～5次の発掘調査は当時の町担当者が行っているが、数年時にわたり個別に実施していることもある。整理作業においては確認の困難な部分があった。今後の検証を担保することも必要と考えられるので公式的な履歴である埼玉県埋蔵文化財年報より箕輪遺跡の調査履歴を確認しておく。

年・次	年報No.	所在	調査通知 年月日・	原因・調査面積	調査主体	主な遺構・出土遺物・数量
H9 1次	7475 7474	箕輪34-1 ほか	大里教発第160号 平成10年4月16日	宅地造成 241m ²	大里町教育委員会	古墳時代住居3軒、方形周溝墓3基 中世土壙 コンテナ5箱
H10 2次	7699	箕輪 34-1	大里教発第130号 平成11年4月6日	(第2地点) 個人住宅 391m ²	大里町教育委員会	弥生時代住居2軒、方形周溝墓2基 中世堀1条 コンテナ5箱
H9 3次	記載 なし	箕輪 89-10	※平成10年2月2日	個人住宅 63m ²	大里町教育委員会	
H10 4次	7673	箕輪85-8 85-10	大里教発第576号 平成10年11月5日	(第3地点) 個人住宅 300m ²	大里町教育委員会	古墳1基、中世堀1条、溝1条 コンテナ1箱
H11 5次	8214	箕輪 85-11	大里教発第155号 平成12年3月9日	(第5地点) 個人住宅 232m ²	大里町教育委員会	古墳1基、中世堀1条、溝1条 中世土壙 コンテナ2箱

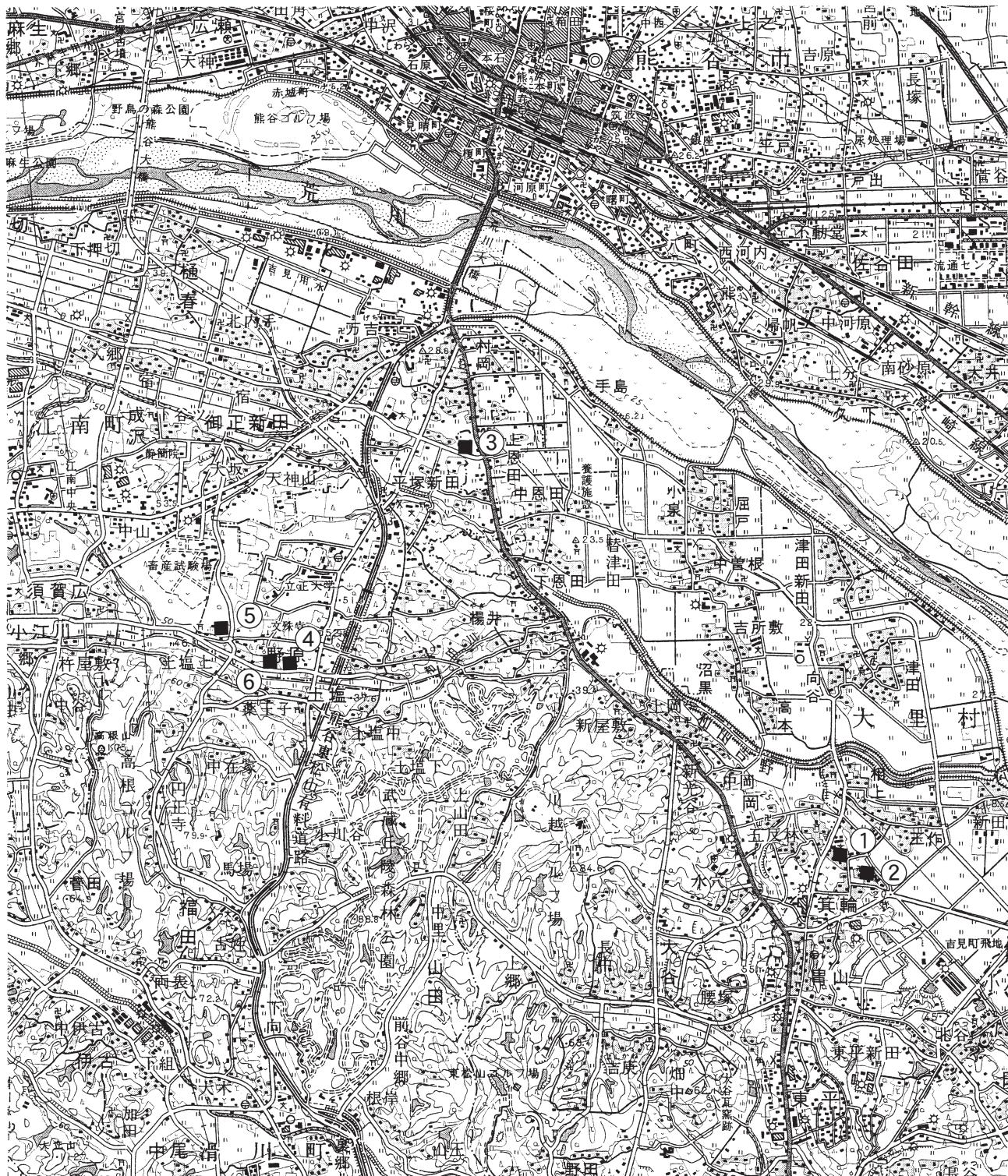
この表でみるように、平成9年度から11年度にかけて5地点5次の発掘調査が行われている。年報には第5地点までの表記があるが、4地点については記載がもれている。地点番号と届出年月日に整合性がないことから、取り扱いにやや混乱をきたしたらしい。箕輪遺跡では住宅の建替え新築が隨時発生し、平成10年1月14日から部分的に試掘トレーニングを設定して遺構の確認を行っており、第3次についてはこのトレーニング部分と一致しているようだ。結果的には、平成19年度の市文化財報告書第2集により既調査分の1次～3次を報告しているので、本報告で4次・5次として整理報告するものである。

発掘調査は、個人の住宅建築にかかるもので建築主の根津氏（4次）・岡田氏（5次）との調整を経て、現状の保存が困難との確認がなされたことから、次のようにおこなわれたものである。

箕輪85-8、85-10地内では、建築主から文化財保護法にかかる「埋蔵文化財発掘届」提出を受け、大里町教育委員会教育長の副申（平成10年11月5日）を付して埼玉県教育委員会へ通知された。発掘調査は第3地点として、平成10年10月29日から同年11月13日まで実施された。本報告書では第4次調査として報告する。

箕輪85-11地内では、建築主から文化財保護法にかかる「埋蔵文化財発掘届」提出を受け、大里町教育委員会教育長の副申（平成12年3月9日）を付して埼玉県教育委員会へ通知された。発掘調査は第5地点として、平成12年2月28日から同年3月3日まで実施された。本報告書では第5次調査として報告する。

なお、6地点・7地点（6次・7次）の発掘調査写真があるが詳細など記録書類からは確認できない。



- ① 箕輪遺跡 ② 中廓遺跡 ③ 西浦遺跡
 ④ 元境内遺跡 ⑤ 宮脇遺跡 ⑥ 諏訪脇遺跡

1:50,000 熊谷

1000 m 0 1000 2000 3000

第1図 周辺遺跡と調査地点の位置

発掘調査・整理報告作業の経過 第4次発掘調査は、平成10年10月29日より平成10年11月13日まで行われた。現場には作業員を投入し遺構の確認を進め、遺物包含層を掘り進めて行った。遺構としては古墳周溝と考えられる落込、溝、規模の大きい堀状の遺構を順次掘り上げていった。堀は同規模と推定されるものが1次調査でも検出されており、館を巡る南北の堀とも想定される。第5次発掘調査は、平成12年2月28日から同年3月3日まで行なわれた。第4次地点の南側にやや離れて接しているが。連続する同一遺構は確認できない。古墳時代住居跡2軒を検出し、住居番号は継続番号で10・11号とした。なお、両地点での基準点測量は任意で行なわれており、位置は確認できないものであった。今後の調査報告に大きな課題を残している。この発掘調査は、大里町が平成10年度と11年度の文化財関係国庫補助事業を受けており、国1/2、埼玉県1/4、大里町1/4の費用負担を行っている。

整理報告書作成作業は大里町が熊谷市に合併したことから、これを熊谷市教育委員会に引き継ぎ熊谷市埋蔵文化財保護事業として実施した。事務組織等は下記のとおりである。

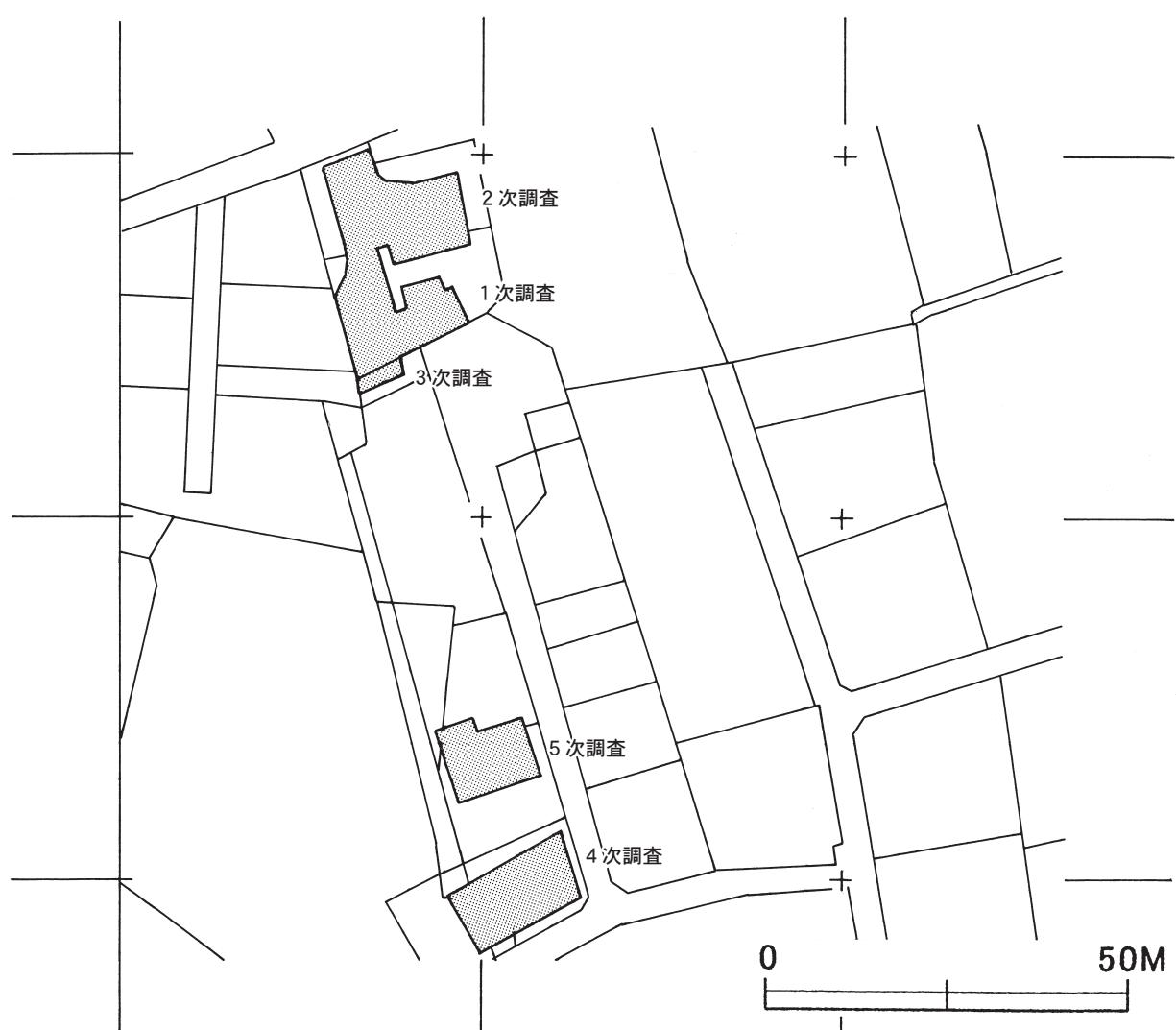
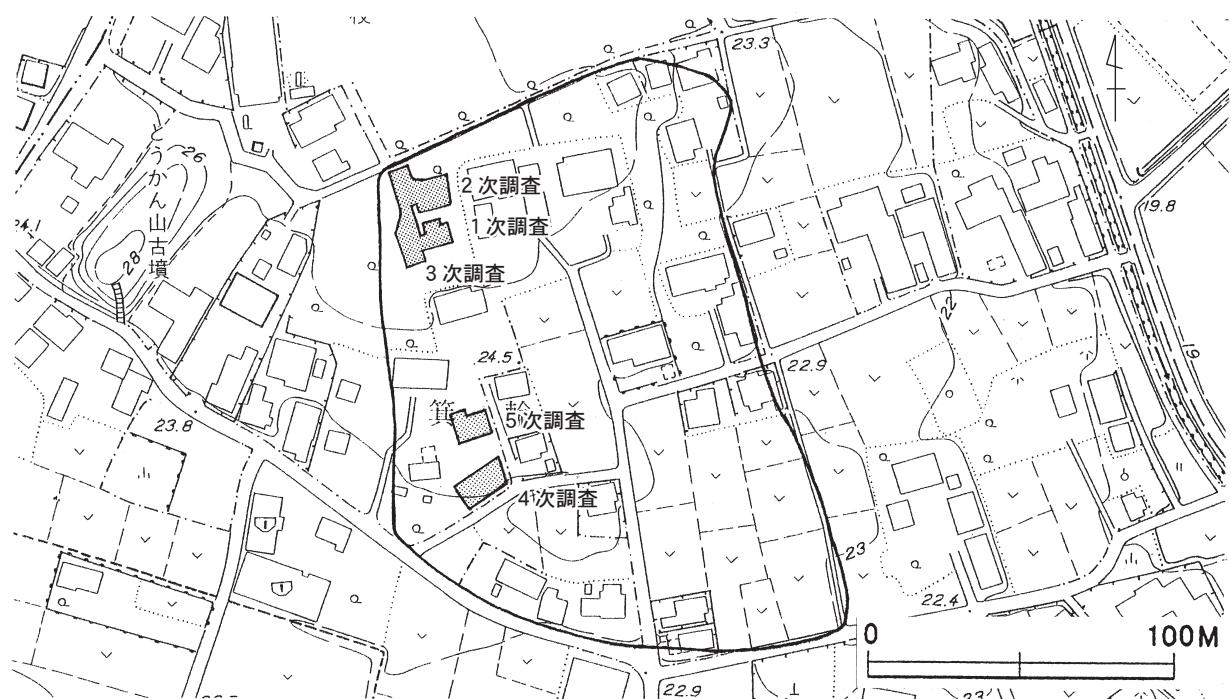
発掘調査の組織 箕輪遺跡の発掘調査は旧大里町教育委員会が下記の組織で実施し、整理報告書作成は合併後の熊谷市教育委員会でこれを実施した。当該年度の組織・人員配置は次のとおりであった。

箕輪遺跡発掘調査の組織（平成10・11年度） 発掘調査

主体者	大里町教育委員会
事務局	教 育 長 金井 岩雄
	教育次長 金子 富夫
	社会教育係長 宮崎 哲
	文化財担当 出縄 康行
	発掘作業員 8名

箕輪遺跡発掘調査の組織（平成20年度） 整理・報告書作成

主体者	熊谷市教育委員会
事務局	教 育 長 野原 晃
	教育次長 大山 誠二
	社会教育課長 関口 和佳
	社会教育課文化財保護担当副参事 吉田 高一
	社会教育課副課長 新井 端
	社会教育課文化財保護係主幹兼係長 金子 正之
	主査 寺社下 博
	主査 吉野 健
	主任 蔵持 俊輔
	主任 鯨井 敬浩
	主事 山下 祐樹
整理報告作業補助者	12名



第2図 箕輪遺跡位置図・発掘調査地点図 (1/2500) (1/1000)

2 箕輪遺跡の立地と環境

立地と環境 箕輪遺跡の立地と環境については、第1次～3次の調査報告書（2008）に詳述してあることから、ここでは概要を述べるにとどめる。遺跡は比企丘陵の東端部に接した江南台地の東縁部に立地し、標高は25～27mの平坦面に展開する。現水田面との比高は2～3mほどである。この台地面は荒川の沖積地に望む日照と眺望に恵まれた地域であり、箕輪遺跡のほか、この台地上には縄文時代晩期の住居跡が確認されている中廓遺跡や方形周溝墓群の確認されている北廓遺跡など縄文時代から弥生時代の集落とその墓域がほぼ全面に広がっており、多種の遺物が確認されている。また、箕輪遺跡内には、後期古墳としては市域最大の墳丘規模を持つ「とうかん山古墳」が築造されており、比企丘陵東端部には県内第2位の規模を持つ円墳である「甲山古墳」が所在する。また、古式須恵器や玉造生産が想定される舟木遺跡や自然堤防上の下田町遺跡などから古墳時代遺跡のあり方がとくに注目される地域である。

箕輪遺跡での調査では、1次調査で弥生時代末の方形周溝墓と竪穴住居が検出されているが、北側の北廓遺跡でも、学校改築時に方形周溝墓が発掘されており、弥生時代後期以降の集落と墓域が広がっていた。続く古墳時代も、1次～5次調査で古墳跡が確認されており、これらの古墳を築造した人々の住まいも近隣に埋もれているものと推定され、南側に位置する中廓遺跡へも拡大しているだろう。

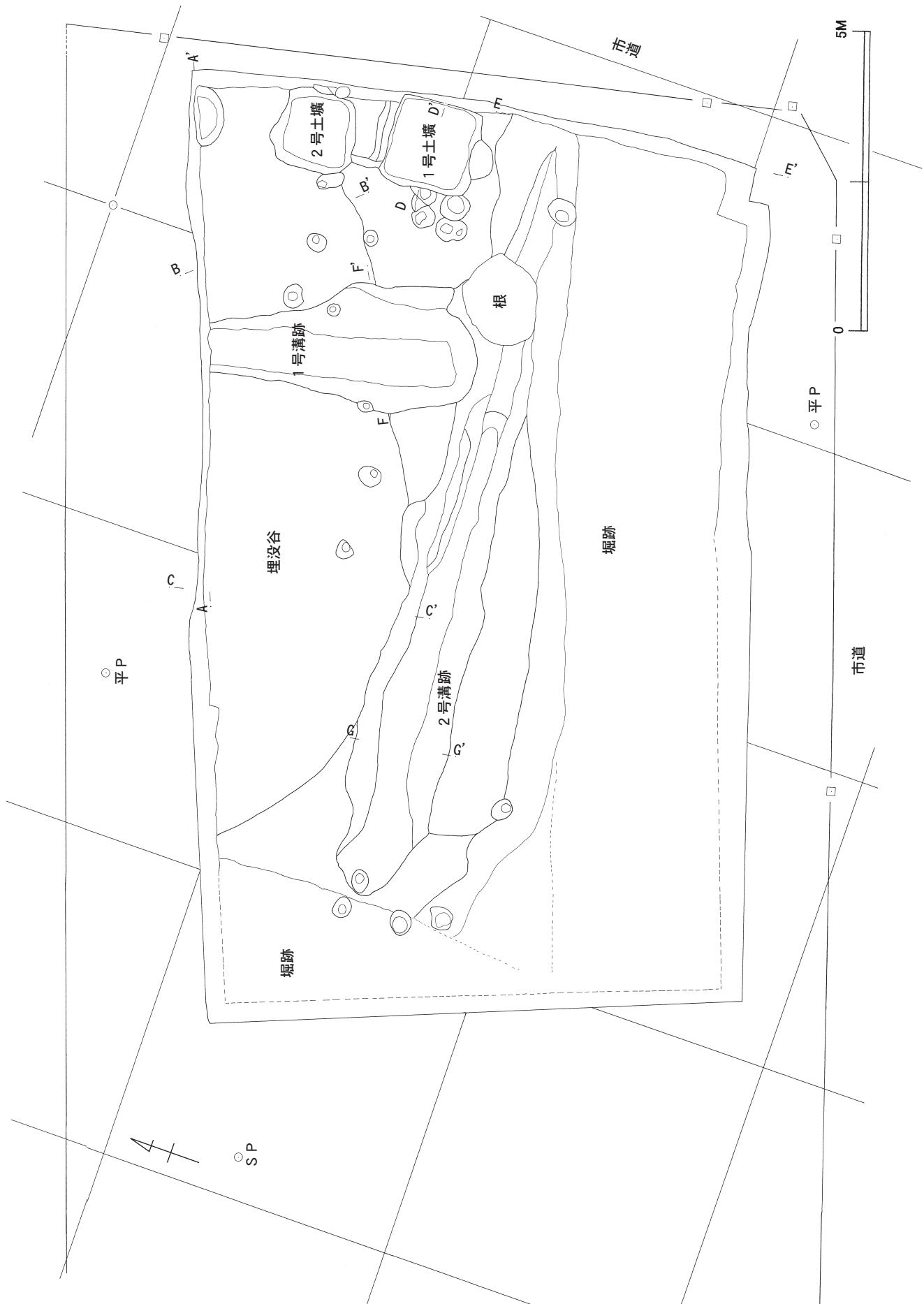
当地点の発掘でも各時期の遺物・遺構が確認されており、比較的土地利用の頻度が高いことが窺われる。調査地点から50mほどしか離れていない「とうかん山古墳」はよく原形をとどめているものの、石室などの調査は行なわれていない。箕輪遺跡で検出された古墳跡を見ると、北廓遺跡の方形周溝墓群から継続する墳墓地であったと想定される。ほとんどの小古墳は後世の開墾で削平されたものと考えられるが、1次・4次地点で確認された箕輪館跡の土壘などに古墳墳丘が取り込まれていることも予想される。

中世の居館と推定される土壘が調査前から確認されており、1次調査でも堀跡が検出されている。かつての居館に巡らされたものと推定されるが、館跡の規模等は不明である。「とうかん山古墳」自体も高い墳丘が残されたことを考えると物見台など館の一部を構成していたのだろう。

箕輪遺跡を取り巻く環境は、遺跡の北側に接し北廓遺跡内とされる市立吉見小学校地が広がり、西側に主要道路が走り、道路整備や住宅地の開発・既存宅地の改築が静かに進行している状況がうかがえる。

調査の方法 当地の標準的な土質は、高燥な関東ローム層を基本とする土壤で、上層は黒色の腐植土の薄層で覆われるが、発掘調査前の現況は畑地であることから、ローム土混じり黒褐色土の耕作土となり軟質のローム面まで掘り下げた状態で通常遺構の確認がなされる。

箕輪遺跡では、平成20年現在までに、調査地点近辺での連続的な住宅建設が実施され、結果的に5次の発掘調査がなされた。1次調査の発掘に先立つ平成10年1月に、1次から5次調査地点に試掘トレンチ調査が実施されており、早い時期に遺跡の性格把握がなされていたようだ。このトレンチは1から7まで設定され、延長は約150mである。このトレンチの中で7トレンチが本報告に当たっている。確認された遺構は、古墳周溝1（SS1）・溝2条（SD1、SD2）・堀1・土壙2（SK1、SK2）とされる。市が引き継いだ箕輪遺跡の発掘調査資料は、発掘時作成の遺構実測図・記録写真・出土資料（水洗註記済）であったが、現地での基準点測量は道路境界杭・民家建物を基準点、見返点として任意の測量を行なったものであった。また、この実測図中に方位や水準高の記載がなく現地公図等から推測して補完したが、遺憾ながら記載のないデータは復元し得なかった。



第3図 算輪遺跡第4次遺構配置図 (1/100)

3 検出された遺構と遺物

調査地点の概要を第2図箕輪遺跡位置図・発掘調査地点図で整理し説明する。第2図上部は箕輪遺跡の範囲を地形図に記載したもので5箇所の調査地点を記載したものである。北から2次調査・1次調査・3次調査が連続し、やや離れて4次調査・5次調査となる。試掘トレンチは各調査地点を通る南北方向に設定され、一部は平行して設定されていた。下図は公図に調査地点を記載した図である。

北からの説明になるが、2次調査地点では住居跡6軒・方形周溝墓2基・溝5条・土壙2基・堀1・小ピット多数が検出された。8世紀後半代の住居1軒のほかは弥生時代後期吉ヶ谷期の住居である。方形周溝墓も吉ヶ谷期であり、埋葬主体部が検出されている。

1次調査地点では、住居跡3軒・溝2条・堀・土壙が検出されている。3次調査地点は南側の拡張部分に当たる。この1次～3次調査部分の基準点測量は行われていないので、任意方眼を設定している。水準高は、標高で25m前後を使用している。

4次調査地点では、古墳跡1・溝2条・土壙2基・堀が検出された。

5次調査地点は、住居跡2軒・井戸1基・溝2条が検出された。4次・5次の調査地点は先の調査地点との連続性が不明のため溝は1～付しているが住居跡は連続番号とした。なお、水準高記載がなく復元し得ない。

以上が5次調査までの概要だが、溝・堀等の以降の連続性は想定されるものの、発掘時の所見などが不明であり、相互の関係を検討することは難しい。

(1) 4次調査地点の遺構と遺物

第4次調査地点は面積約400m²で、ほぼ東西に長軸を持つ長方形をしている。この調査区には、北辺に伸びる埋没谷（古墳周溝とも推定される長楕円形の落込）、これを切って造られる南北方向の溝（SD1）、調査区東辺に南北に並ぶ土壙（SK1・2）、調査の中央に東西に走る溝（SD2）、調査の西辺と南辺に幅広く確認された堀が確認された。遺構の前後関係もほぼこの順序である。次に各遺構を説明する。

埋没谷（第3図） 現地形から想定することは難しいが、北から東へ開口すると予想される。調査区では、長さ約14m・幅約3.5mの範囲で、なだらかに傾斜する。最深部で1.6mの埋没土があった。なお、本跡を古墳跡と考えると直径約28mを測る円墳などの周溝で外縁がなだらかに立ち上がると推定される。

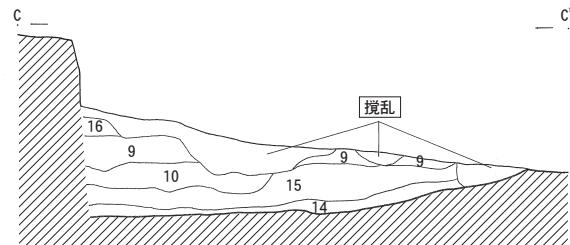
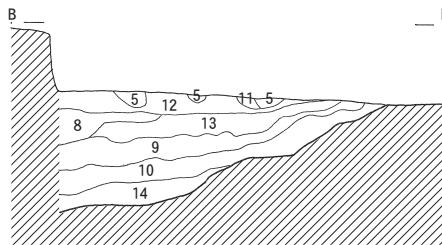
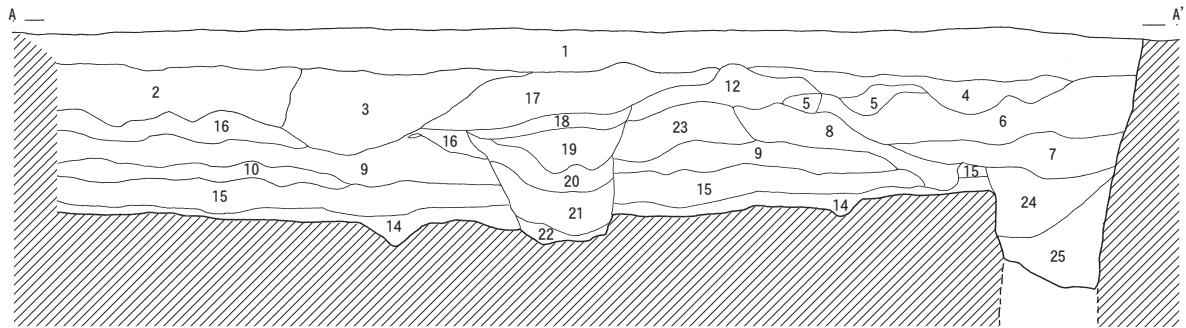
出土遺物はドット図（第5図）と照合がナンバーなしのため困難であったが、図中の出土位置から見ると埋没谷覆土・堀覆土からの出土が多く、実際の遺物も中世以降の時期が主体であった。

第1号溝（SD1）（第3図・第4図） 南北方向に検出され、長さ4.6m・幅2.1mを測る。断面形態は箱築研形よりもやや幅広く、逆台形状を呈している。底幅は0.8mで全体が整えられている。南端部が掘り上げられており、南側の堀とは連続しない。この場所に浅い溝が通るが、本来通路上に残された空間であったことも考えられよう。規模・形態的に近似している溝が、1・2次調査区のB3～D3区で検出されている堀跡で、この堀は大形の堀が埋没した後に、新たに掘り直した堀とされるものである。

第1号土壙・第2号土壙（SK1・SK2）（第3図・第4図） 調査区の東辺に南北に並んで検出された。

第1号土壙は、一辺1.5m方形で深さ0.8mを測る。2号土壙は一回り小さく一辺1.3mを測る。両土壙とも方形を意識して造られていると思われるが、特別な加工も遺物も出土していない。主軸を同じくしていることから時期的に近い築造であろうが、先の調査地点では同形態の土壙は確認されていない。

第2号溝（第3図・第4図） 調査区の中央東西に検出された。長さ14.6m・幅1.5m・底幅は0.6mを測る。断面形態は幅広のレンズ状を呈し、溝というより通路状をしていると見受けられる。溝1号と堀を壊して

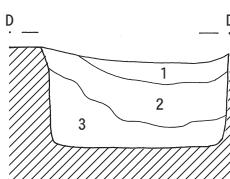


埋没谷

土層説明 (A-A'、B-B'、C-C')

- 1 耕作土
- 2 ローム黒色混合
- 3 ローム土
- 4 暗褐色 褐色土粒にロームブロック(直径1~2cm)を多量に含 ローム粒を含 粘性・しまりやや強
- 5 黒色土 粒子細かい黒色土粒を主とする 粘性やや有するがソフト
- 6 黒褐色 黒色土を主とするがローム粒を少量含 色調も明るい 粘性やや強
- 7 暗褐色 褐色土粒を主とするがローム粒を少量含 粒子細かい 粘性・しまりやや強
- 8 暗褐色 黒色褐色土の混合 ローム粒、ロームブロック(直径0.1cm)を多量に含 粘性やや強
- 9 暗褐色 暗褐色土を中心 ローム粒を微量含 粘性・しまり弱
- 10 暗褐色 褐色土粒中に多量のローム粒を含 粒子やや粗いがしまりやや弱 粘性やや強
- 11 褐色 ロームブロックを含 褐色土含 ソフト
- 12 黒褐色 第6層と近似

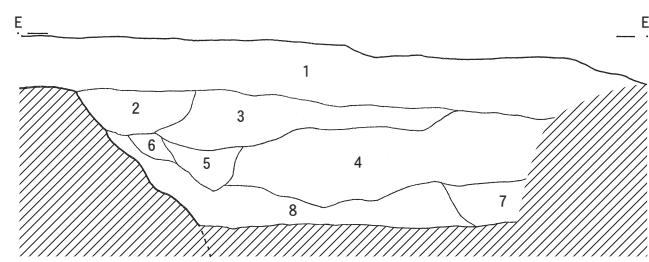
- 13 暗褐色 褐色土を主にロームブロック(直径1~3cm)を多量含 上面がハード面 粘性・しまり強
- 14 注記なし
- 15 注記なし
- 16 薄黒色 黒色土粒粒子細かい 白色スコリア ローム粒を少量 ソフト
- 17 黒色土 粒子粗いローム粒を多く含 粘性・しまり強
- 18 暗褐色 ローム粒を多量含 ローム粒1~2cmを多く含
- 19 黒褐色 ローム粒を多量含 粘性・しまりやや強
- 20 黒色 黒色粒を主とし、粒子細かい ローム粒微量
- 21 黒色 黒色粒を主とし、粒子細かい ローム粒やや多く含
- 22 黒褐色 粒子細かい黒色土粒とローム粒を多量に含 ロームブロック(直径0.5~1cm)を多く含
- 23 黒褐色 粒子細かい黒褐色土粒を主とし、ローム粒を含 色調がやや明るい
- 24 黑褐色 黒色土30%、褐色土30%、ロームブロック(直径1~3cm)を多く含 粘性・しまりやや弱
- 25 黒褐色 黑色土中に白色粘土ブロックを含 ソフト



第1号土壤

土層説明(D-D')

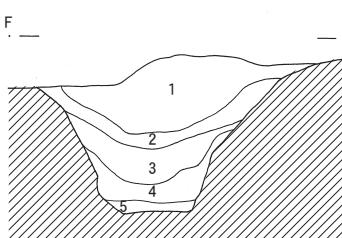
- 1 暗褐色 耕作 粒子粗いロームブロック少量含 粘性・しまり欠く
- 2 暗褐色 耕作 粒子粗いロームブロック多く含 粘性・しまり欠く
- 3 暗褐色 耕作 粒子やや細かいローム粒微量含



堆

土層説明(E-E')

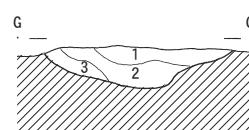
- 1 耕作土
- 2 暗褐色 ロームブロック(直径3~5cm)を多量含 しまり欠く
- 3 暗褐色 粒子細かいローム粒少量含 粘性・しまりやや弱
- 4 明暗褐色 粒子細かいローム粒多量含 粘性・しまりやや弱
- 5 暗褐色 粒子細かいローム粒多量含 色調で第3層より暗い
- 6 黒褐色 黒色土を少量混入 ローム粒子大きいのを少量ソフト
- 7 暗褐色 粒子細かく、粘性・しまりやや強
- 8 黑褐色 粒子粗いローム粒多く含 下層にハード面あり



第1号溝

土層説明(F-F')

- 1 暗褐色 褐色粒を主とし、ローム粒を多含 粘性やや強いがしまり欠く (耕作溝的)
- 2 暗褐色 第1層よりローム粒を多く含
- 3 黒褐色 黒色土粒少量と褐色土粒、ローム粒(0.5~2cm)を多く含
- 4 ロームブロック(直径2~5cm)を多量含
- 5 ローム2次堆積

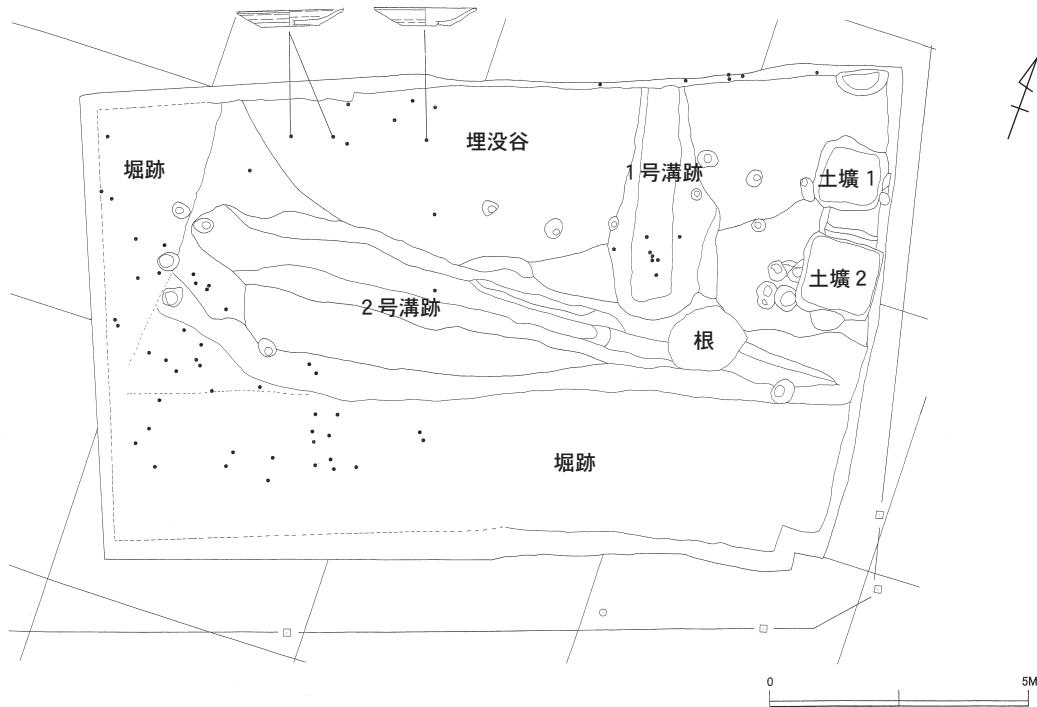


第2号溝

土層説明(G-G')

- 1 暗褐色 ローム粒を多く含 粒子に砂粒含 粘性・しまり弱
- 2 暗褐色 ローム粒を多量に含 粒子粗い
- 3 黑褐色 黑色土粒を主とし、これに少量のローム粒含 粘性やや強 しまりやや弱

第4図 箕輪遺跡第4次遺構断面図 (1/60)



第5図 箕輪遺跡第4次遺物分布図

造かれていることも、両遺構の性格とは異なるものであろう。

堀（第3図・第4図） 調査区の西辺と南辺に検出された。両者は切り合いがあるのか一連なのが不明であるが、南辺では長さ15m・幅4m以上、深さ1.2m、底幅は0.6mを測る。断面形態は略箱薬研形をしており、幅広の堀底が造られている。1・2次調査区で確認された堀跡の形態に近いと思われる。本調査区の西辺と南辺が一連とすると、1次調査区の堀跡へ連続するとも推定される。その場合、南辺と1次調査区の堀との距離はおよそ80mとなる。

出土遺物（第6図 第7図 第1表）

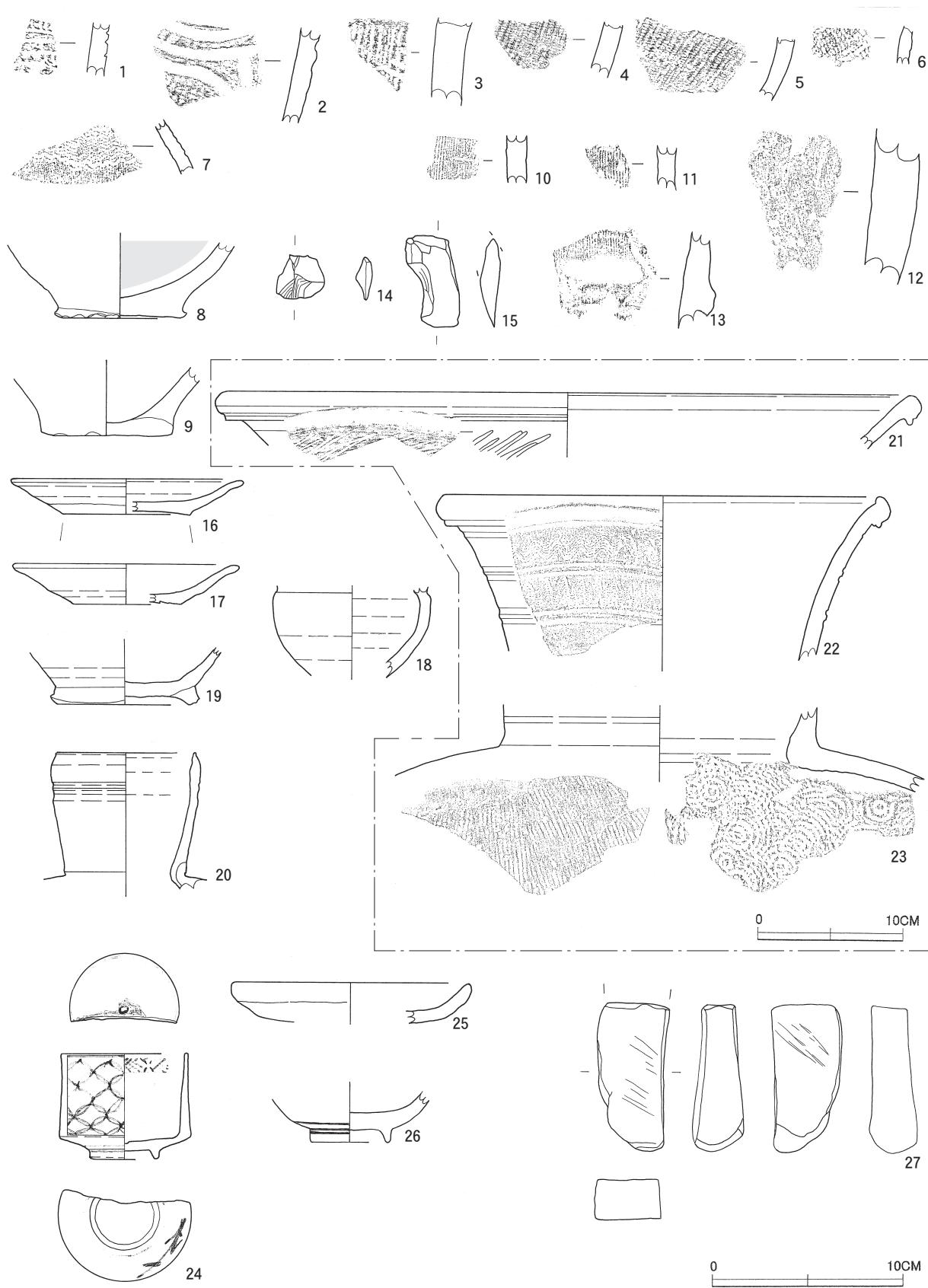
本調査区の出土遺物は地点と遺物が照合できない状況のため、どの遺構からどの遺物が出土しているか判断できないので、時期別に紹介するにとどまる。また、古瀬戸の優品もあるとの伝えを聞くが未確認である。

1～5は、縄文時代土器片を一括した。1は前期諸磯式土器で爪形文と沈線が横位に配される。2はLR縄文の施文後に沈線で弧線文を施文する中期加曾利E式土器である。3は櫛目文を縦に施文する中期曾利式系土器である。4・5はLR縄文を施文する土器片で中期後半の土器であろう。

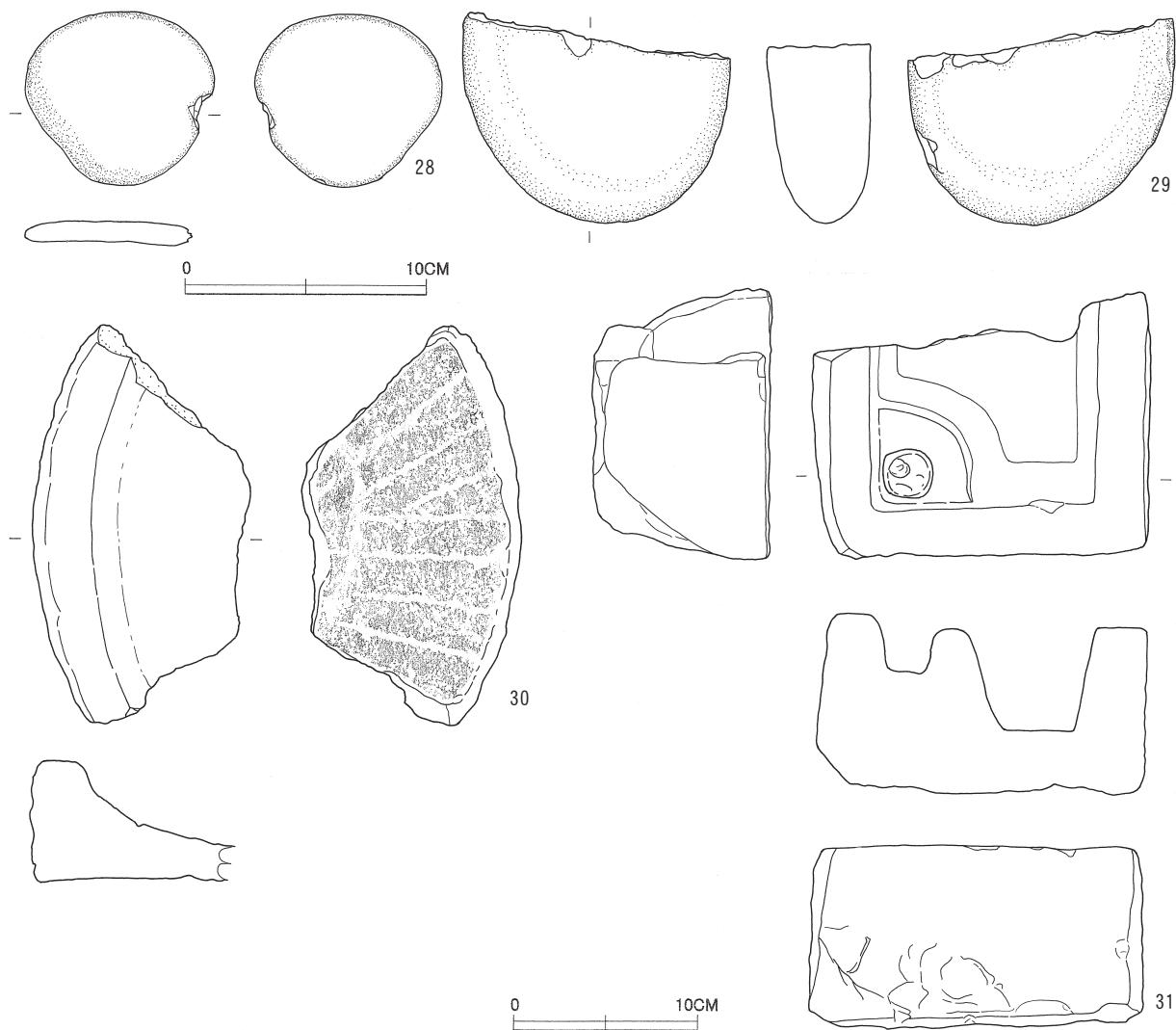
6～9は、弥生時代土器片である。7は9本と思われる櫛歯による波状文が施文される甕形土器の頸部破片であろう。本例のような櫛描文土器は箕輪遺跡では主体的とされ、8・9も櫛描文土器甕の底部であろう。

10～13は埴輪の小破片であり、10・11・13は円筒埴輪片で櫛目が確認される。13は低い台形状の凸帯が確認される。12は形象埴輪片であろう。

18、20～23は古墳時代後期の須恵器である。18は底部のやや尖り気味となる「はそう」の体部破片である。円孔は残らないが肩部に沈線が認められる。20は平瓶の頸部で尖り気味の口縁部は内削ぎ状に口辺部外面の横位に二条の沈線を巡る。21は大甕の口縁部で頸部に斜位の沈線を充填している。22・23は同一個体と推定される大甕で頸部の二段に亘って櫛描波状文が施文される。頸部には補強帯を造らず丁寧に接



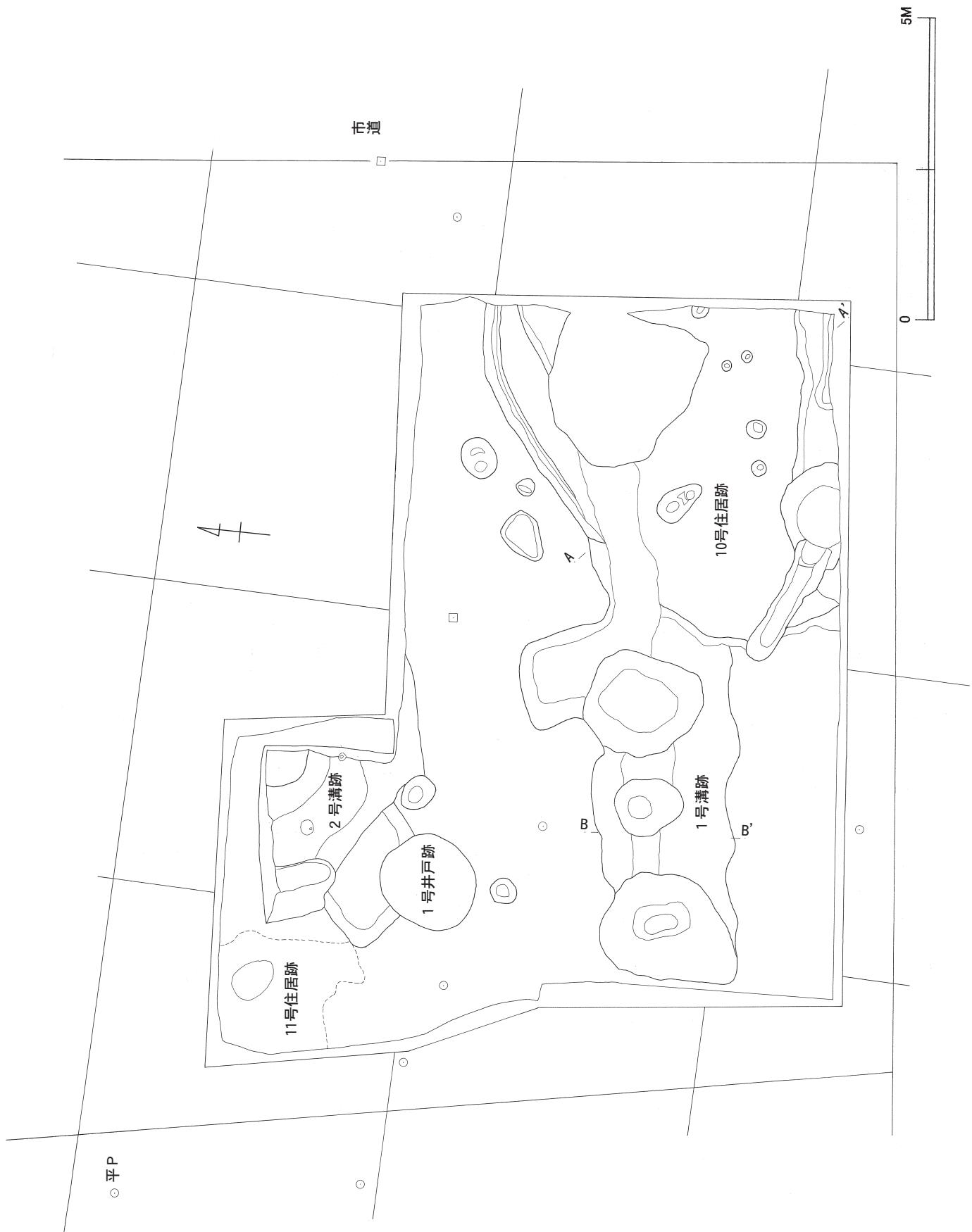
第6図 箕輪遺跡第4次出土遺物 (1) (1/3) 21、22、23 (1/4)



第7図 箕輪遺跡第4次出土遺物 (2) 28 (1/3) 29～31 (1/4)

第1表 箕輪遺跡第4次出土遺物観察表 (第6.7図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	縄文式土器	-	-	-	A·B·D·E·G·N	B	にぶい黄橙	胴部の一部	諾磁。
2	縄文式土器	-	-	-	A·G·K·N	B	明赤褐	胴部の一部	
3	縄文式土器	-	-	-	A·B·D·E·J·K·N	B	にぶい黄橙	胴部の一部	
4	縄文式土器	-	-	-	A·B·E·J·K	B	明赤褐	胴部の一部	L R縄文。
5	縄文式土器	-	-	-	A·B·C·D·N	B	内: 黒褐 外: 明赤褐	胴部の一部	L R縄文。
6	弥生式土器	-	-	-	A·B·I	B	にぶい黄橙	胴部の一部	
7	弥生式甕	-	-	-	A·B·E·J·N	B	明赤褐	胴部の一部	
8	弥生式甕	-	(4.0)	6.7	A·D·G·I·N		にぶい橙	底部のみ	内面炭化質。
9	弥生式壺	-	(3.6)	6.8	A·D·G·I·N	B	にぶい褐	底部1/2	両面胴部赤彩。
10	円筒埴輪	-	-	-	A·B·C·N	B	赤褐	胴部の一部	はけ目2cm角(径-14本)
11	円筒埴輪	-	-	-	A·B·C·N	B	赤褐	胴部の一部	はけ目2cm角(径-13本)
12	形象埴輪	-	-	-	A·B·E·H·I·N	B	赤褐	胴部の一部	馬? 表面ナデ。
13	円筒埴輪	-	-	-	B·C·D·E·J·K·N	B	明赤褐	胴部の一部	はけ目2cm角(径-16本) 低M字凸帯。
14	黒耀石	最大長1.5、最大幅1.6、最大厚0.6、重さ3.9g					破片		
15	頁岩	最大長3.2、最大幅1.6、最大厚0.6、重さ1.0g							
16	須恵質皿	(12.0)	(1.9)	(6.5)	A·I·N	C	にぶい褐	1/6	末野産。
17	須恵器・皿	(11.6)	2.1	-	A·N	B	黒褐	1/12	
18	須恵器・ハソウ	-	-	-	A·D·E	B	にぶい黄褐	小片	
19	須恵質・高台椀	-	(3.0)	7.0	A·B·E·I·J·K	B	にぶい橙	底部3/4	
20	須恵器・瓶	(7.2)	(6.7)	-	A·D·I·N	B	にぶい黄橙	口縁1/2	
21	須恵器・甕	(47.2)	(3.8)	-	A·F·I·N	B	灰黄	口縁の一部	
22	須恵器・甕	(30.4)	(11.5)	-	A·B·D·N	B	灰黄	口縁の1/3	波状上-6本、下-8本。
23	須恵器・甕	-	-	-	A·G·I·N	B	黄灰	肩の一部	頸～末野か。
24	磁器・椀	6.5	5.6	3.2	-	B	明青灰	2/3	伊万里。
25	土師質・皿(かわらけ)	(12.4)	(2.1)	-	B·C·G·H·I·K	B	にぶい橙	1/5	
26	磁器・椀	-	(2.7)	4.0	-	B	灰白	底部3/4	
27	砥石	最大長(7.8)、最大幅(3.7)、最大厚2.7、重さ105g					全体の約1/2		
28	不明	最大長7.2、最大幅7.8、最大厚1.1、重さ96g					完形品	扁平礫。小主格不明。	
29	磨石	最大長(10.0)、最大幅14.2、最大厚5.1、重さ1210g						ほぼ全面煤。炭化質付着。	
30	石臼	器高6.7、下径(46.0)、石材: 角閃石安山岩					1/10	長期使用。	
31	石製品	最大長18.4、最大幅(13.8)、最大厚9.5、重さ3000g、石材: 安山岩							



第8図 箕輪遺跡第5次遺構配置図

合している。体部外面は細かい並行叩き、内面は青海波文を残している。これらの須恵器大甕は灰黄色の焼き上がりや、タタキ目文様などをみると比企郡滑川町の羽尾窯産の須恵器に近似している。

16・17・19は平安時代の須恵器である。16・17は挟雜物の多い胎土をした須恵器皿で、末野産と考えられる。19は土師質の須恵器である。25はカワラケの破片である、31の石臼は上臼の破片で刷合面がかなり摩滅し臼自体も薄くなっている。32は槽形の石製品で香立として使用されたものであろう。

(2) 5次調査地点の遺構と遺物

第5次調査地点は面積約230m²で、ほぼ東西に長軸を持つ長方形部分を主とし一部北側に拡張する。この調査区からは、北東隅に第11号住居跡（S I 1 1）とこれを切る2号溝（S D 2）と1号井戸（S E 1）が検出されている。また、調査区の南東側で第10号住居跡（S I 1 0）とこれを切る1号溝（S D 1）が検出されている。1号溝には切り合う1号土壙（S K 1）・2号土壙（S K 2）がある。遺物の伴う10号住居は弥生時代後期に、1・2号溝は中世末期と考えられる。

第10号住居跡（S I 1 0）（第8図 第9図 第10図） 調査区の東南隅部分に約四分の一程度発掘されている。調査区の南辺と住居の北半部分が1号溝と攪乱のため、住居の遺存状況は良くない。確認できる住居の掘り込みラインから、住居は8m程度の楕円形をなすと想定される。床は平坦な直床と想定されるが柱穴と考えられる堀込みは確認できない。弥生時代の遺物が床面上から出土している。

第11号住居跡（S I 1 1）（第8図） 調査区の北西隅部分に床面の一部が確認されただけである。第8図に残存すると推定される床範囲の記載があるので土層図などが作られていないようなので妥当かどうか確認できないが住居跡として報告する。図中の床範囲内の小楕円形の点線範囲が何なのか記載がないが炉跡であった可能性もある。

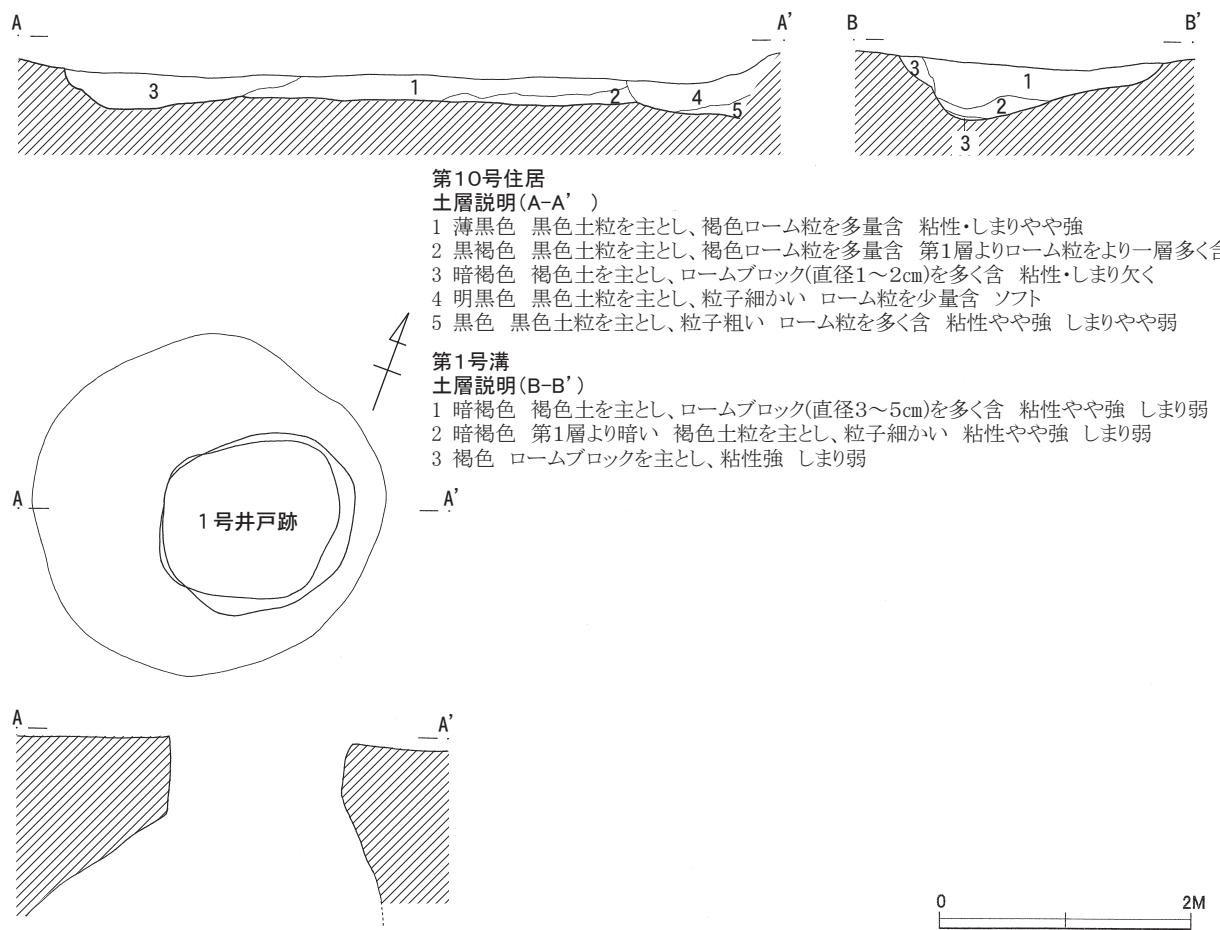
第1号溝（S D 1）（第8図 第9図） 調査区の東西にゆるい弧を描くように検出されている。10号住居を切っているが、1号・2号土壙に壊されている。調査区の東西にさらに延長するものと想定される。長さ12m、幅2.1m、深さ0.4m片流の薬研形をしているものの、堀底の幅は一定しない。また、確認遺構のほぼ中央付近で北側に溝が突出するような図となっているが、説明できない。加えて、遺構名や所見の記載がないが、西半部分に3基のおそらく土壙（であろう）が切りあっているようである。

第2号溝（S D 2）（第8図） 調査区の北西に矩形に曲がるコーナー部分が検出されているようだ。上面幅で1.5mを測るが、遺構下端ラインや土層図がないので詳細は不明である。2号溝の南北軸と1号溝の北側突出部分はほぼ軸を同じくしているように見えるが、途切れる部分の幅が約2mを測ることから通路状として土橋状に掘り残した部分に当たるのかもしれない。

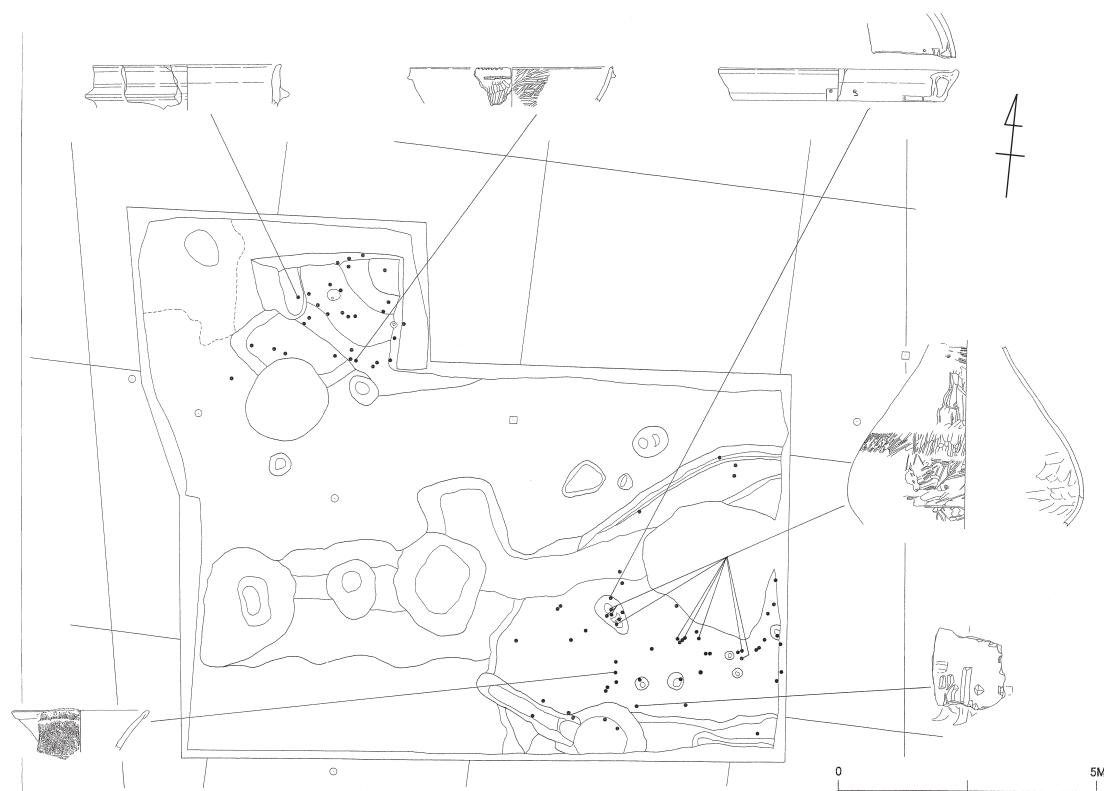
第3号溝との記載はないが、10号住居の南辺を不整形の溝が長さ約7m、幅0.7mで描かれている。土層図も所見もないで詳細は不明であるが示しておく。

第1号井戸（S E 1）（第8図・第9図） 調査区の西半部に検出されている。確認面での直径は1.3～1.5mの楕円形をしている。確認面から0.7m以下はフラスコ形に広がるが、滞水時の土壁崩落に原因するものであろう。土層図はなく、発掘も途中までのようにあり遺物の記載もない。

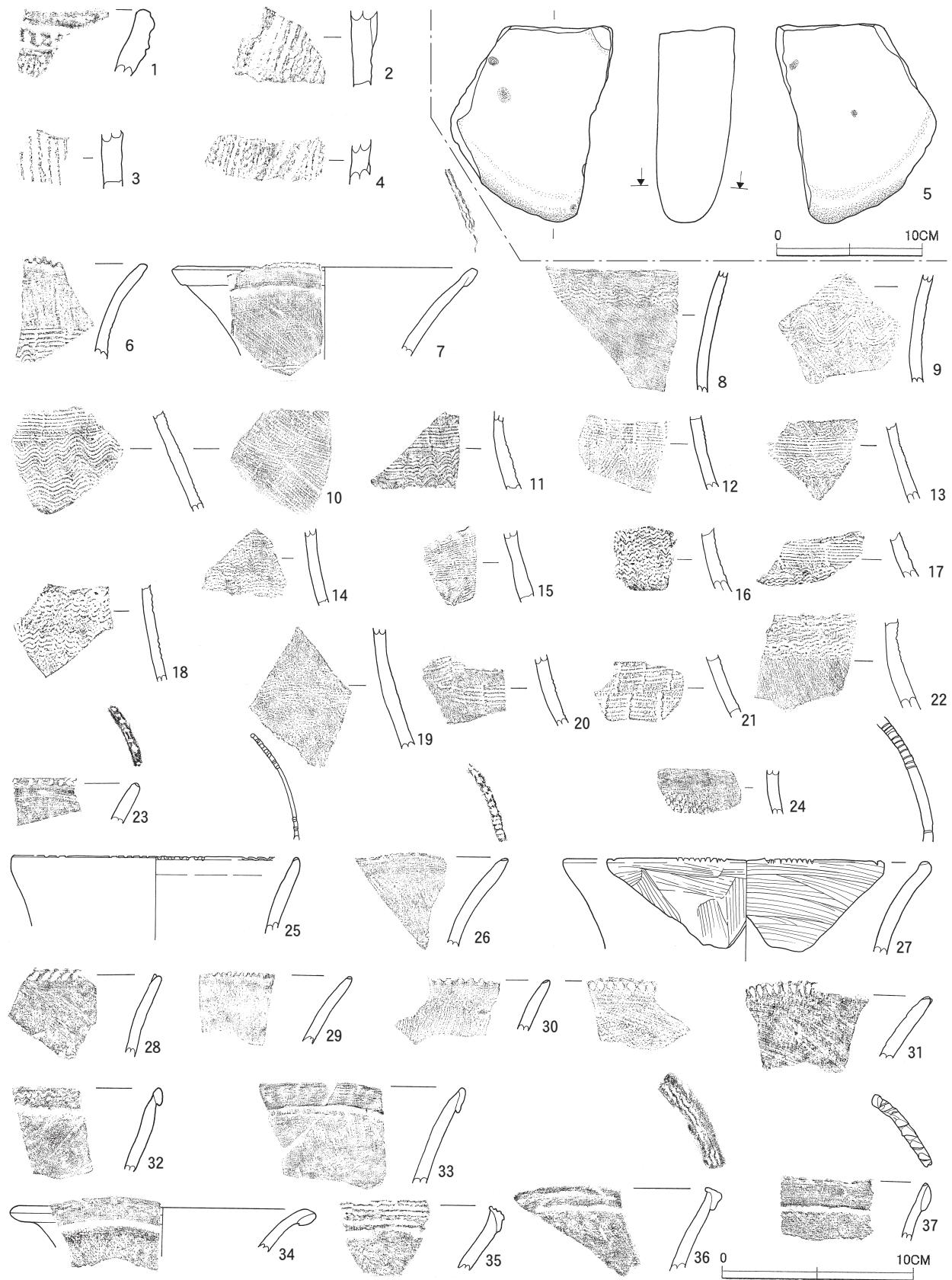
第1号溝に切りあい関係を持つ遺構の記載があるので、その性格は不明だが、西から第1号土壙、第2号土壙、第3号土壙として報告する。第1号土壙は上面径2.5m・下面径1×0.5mの擂鉢状の形態をするようである。第2号土壙は長軸1.3×1.0mの掘込をしている。第3号土壙は長軸1.6m程の楕円一部方形をする。いずれの土壙も深さの記載がなく不明である。



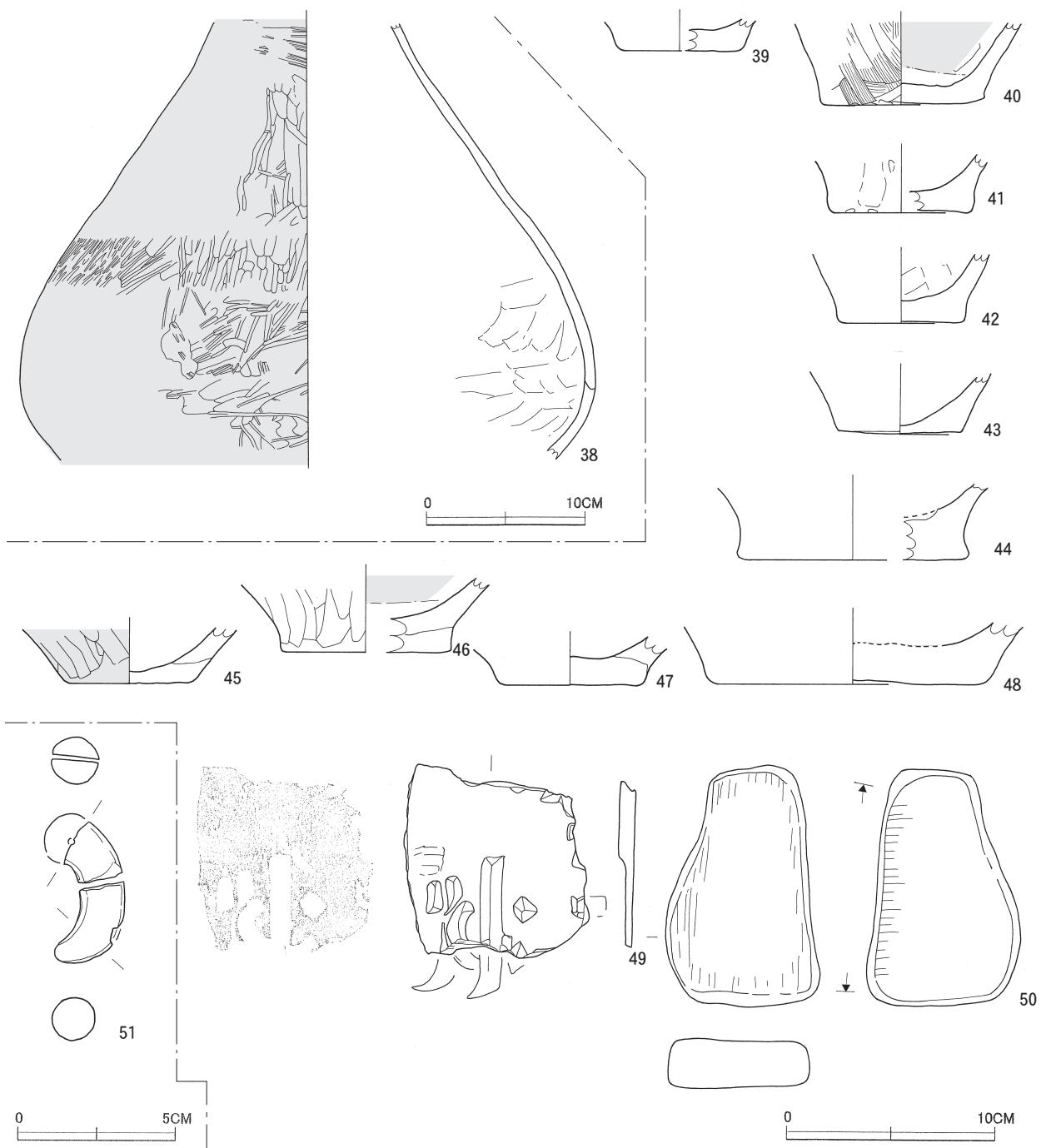
第9図 箕輪遺跡第5次遺構実測図 (1/60)



第10図 箕輪遺跡第5次遺物分布図



第11図 箕輪遺跡第5次第10号住居出土遺物 (1) (1/3) 5 (1/4)



第12図 箕輪遺跡第5次第10号住居出土遺物 (2) 51 (1/2) 39～50 (1/3) 38 (1/4)

第1号土壙 第10号住居跡を切り込んで造られた土壙で、長軸1.1m 幅0.6mを測る。覆土から弥生時代の壺や近世期の瓦器が出土している。

出土遺物

第10号住居跡 (第11図 第12図 第2表)

弥生時代の住居であるが、覆土には縄文時代や中世末期の遺物が混在しているようだ。土器が主体であるがいずれもごく細片であり、接合して形態の復元できる資料はほとんどない状況であった。

6～24は櫛描文土器の壺・甕の口縁・口頸部破片である。頸部簾状文、波状文が残る部位である。簾状文の下に波状文を施文する6、簾状文を挟んで上下に波状文が施文される13・17の2種が認められる。他は前記いずれかの文様構成をとるのだろうが、波状文の波頭の振幅が大きい9・10・12と、振幅の小さい8・13・16・18・22などがある。なお、器面の調整には表裏とも細かい刷毛目調整が残ることから(7・8・10)、櫛描文の施文に使用する工具とは別工具である。櫛歯数は8本から12本がみられる。

25から37の口縁部が本来接合する破片であろう。口縁部へのきざみのあり方は、口縁部上面に施文される23・25～27と口縁部外面に施文される28～31がある。32～37は口縁部に粘土帯を貼り付ける口縁形状をとる土器で粘土帯に波状文や沈線形・きざみ文を施文している。底部は39から48までの資料で底径6cm・8cm・12cmの3種が認められる。38は全形を推定しえる唯一の土器で頸部から体部下半を残している。おそらく頸部から口縁部が小さく浅く開き体部下半は下膨れ状に底部となる壺形形態となるものであろう。49は板碑破片で勢至菩薩の梵字(サク)であり右上方に主尊の蓮座逆花の一部が見えることから阿弥陀三尊板碑と推定される。50は勾玉形の土製品である。分断した欠損しているが、長さ約4.8cm、断面径1.3cmを測る。51は磨石。

第1号溝 (第13図 第3表)

灰釉及び鉄釉の陶器片、砥石が出土している。時期は十七世紀以降であろう。

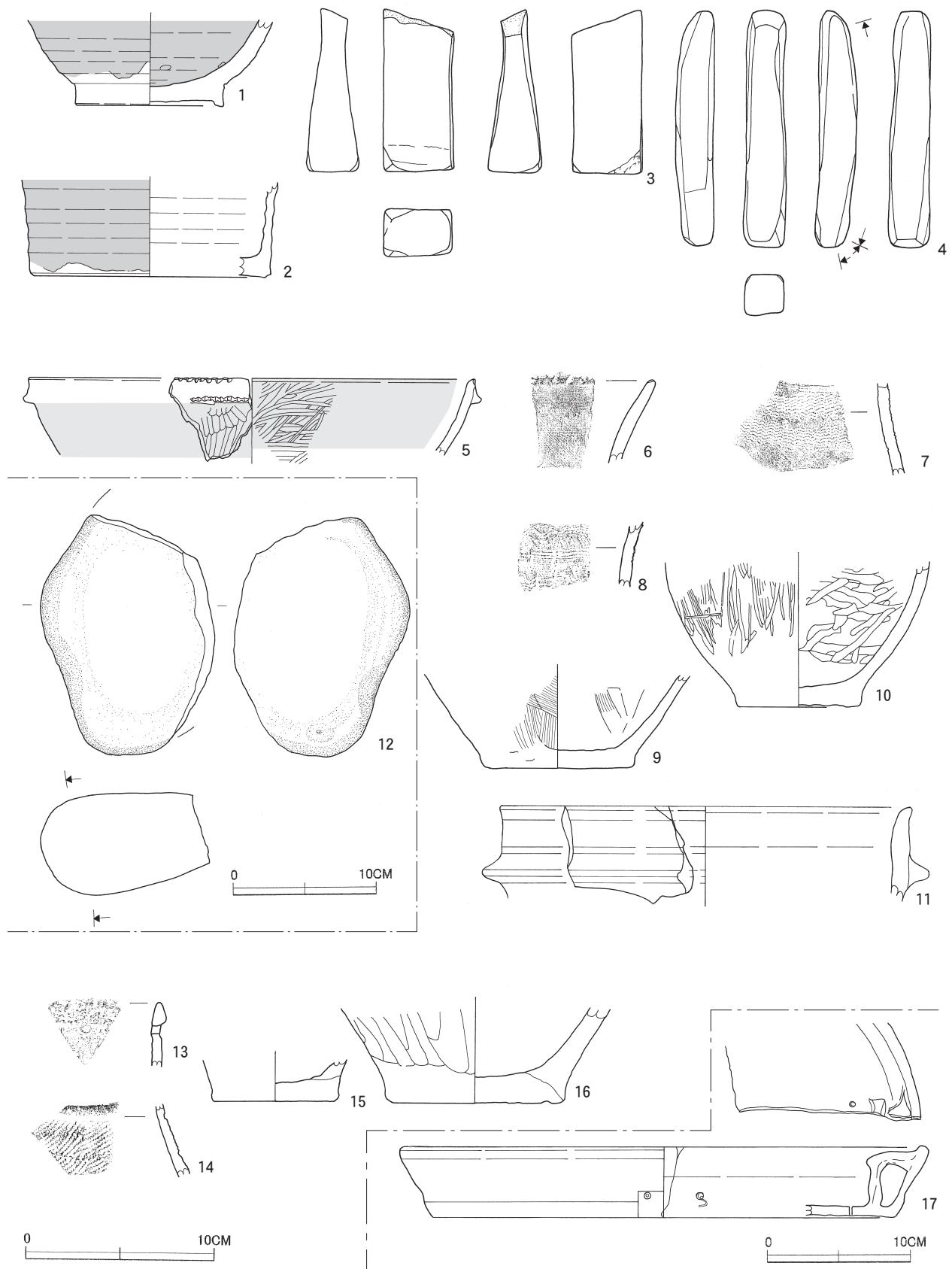
第2号溝 (第13図 第3表)

いづれも櫛描文の施される土器の一部または部分品であろう。

弥生土器破片が覆土に含まれていた。11は古代の羽釜片である。溝の時期を示すものは、この羽釜が最新であるが、この時期としてよいか躊躇する。遺物はないが中世以降の掘削であろう。

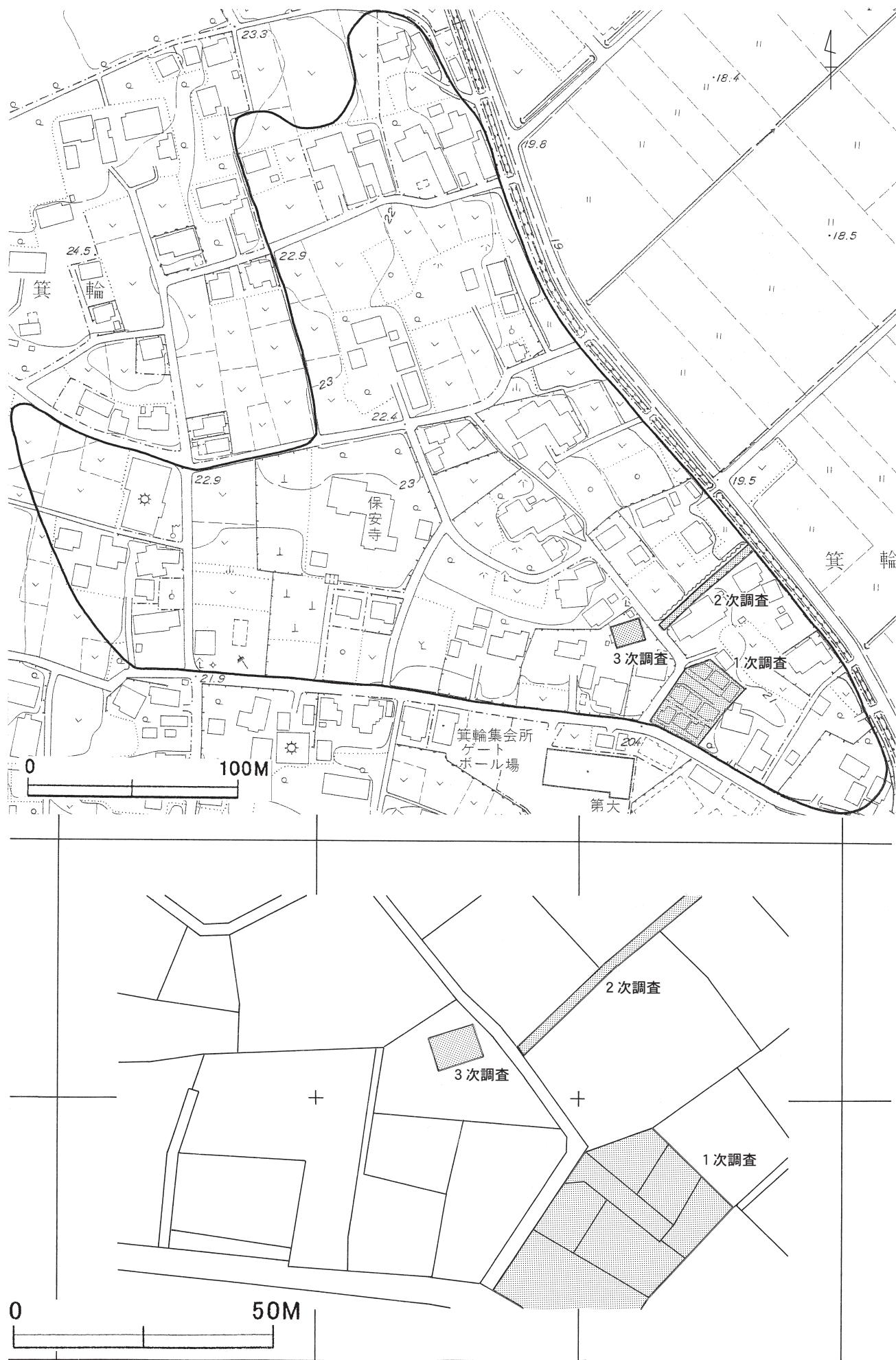
第2号土壙 (第13図 第3表)

17は瓦製の焙烙で直径約36cmに復元される。内耳が底部と接合する。補修のための小孔が底面と体部下半の二箇所に認められ、体部では結束した銅線が遺存していた。時期は十七世紀以降であろう。



第13図 箕輪遺跡第5次

1号溝4 (1/3)、2号溝5～11 (1/3) 12 (1/4)
2号土壙17 (1/4)、遺構外遺物13～16 (1/3)



第14図 中廓遺跡位置図・発掘調査地点図 (1/2500) (1/1000)

II 中廓遺跡 3 次の調査

1 発掘調査の概要

調査にいたる経過 中廓遺跡は、過去 3 次の発掘調査が旧大里町教育委員会の手で行われた。平成 2 年(2000) 刊行の「大里村史」から、1 次(第一地点)・2 次(第二地点)の発掘調査の概要が知られる。今回の報告は第 3 次調査(第三地点)とされるものである。1 次～3 次の発掘調査は当時の町担当者が行っているが、発掘履歴を明らかにしておくため、公式的な履歴である埼玉県埋蔵文化財年報より中廓遺跡の調査履歴を下記に確認しておく。

年・次	年報No.	所在	調査通知 年月日・	原因・調査面積	調査主体	主な遺構・出土遺物・数量
S 63 1 次	3825	箕輪字 中廓 223-8他	63委保記第 2 - 3837号 昭和63年 5月16日	(第一地点) 分譲宅地造成 1,012m ²	大里村教育委員会	縄文時代晚期住居 2 軒、古墳時代柱穴群、平安時代住居 1 軒、掘建柱建物 1 棟 縄文時代土器・石器 コンテナ 5 箱
S 63 2 次	3419	箕輪字 中廓 2048	元委保記第 5 - 525号 平成元年 7月13日	(第 2 地点) 村道建設 200m ²	大里村教育委員会	土壙 2 基 溝 1 条
H13 3 次	8649	箕輪字 中廓 192-1	大里教発第 177 号 平成13年 3月29日	(第 3 地点) 個人住宅 80m ²	大里町教育委員会	古墳時代住居跡 1 軒 奈良時代住居跡 3 軒 溝 1 条 土壙 1 基 遺物少量

この表でみるように、昭和63年に初めて発掘調査が行われ、本遺跡の性格が明らかにされたものである。3 次の発掘調査は、個人の住宅建築にかかるもので建築主から、文化財保護法にかかる「埋蔵文化財発掘届」提出を受け保存のための調整を経た上で、現状の保存が困難との確認がなされたことから実施したものである。

発掘調査・整理報告作業の経過

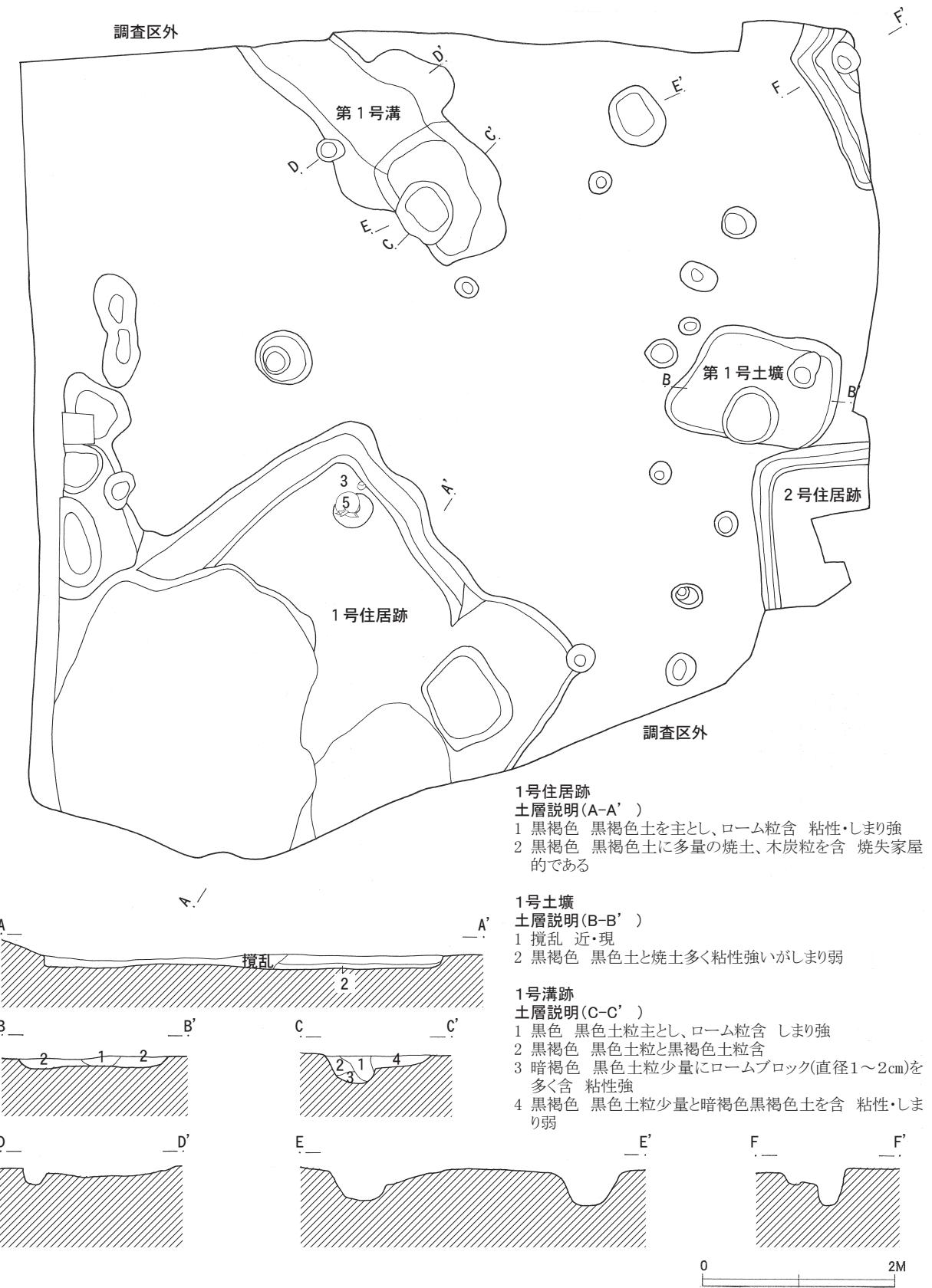
3 次の発掘調査は、平成13年 2 月 28 日より同年 3 月 3 日まで行われた。現場には作業員を投入し遺構の確認を進め、遺物包含層を掘り進めて行った。遺構としては住居跡 1 軒、土壙 1 基、溝 1 条、柱穴状の小穴が検出されている。

調査実施に当たっては、旧大里町が平成12年度の文化財関係国庫補助事業を受けており、国1/2、埼玉県1/4、大里町1/4の費用負担を行っている。

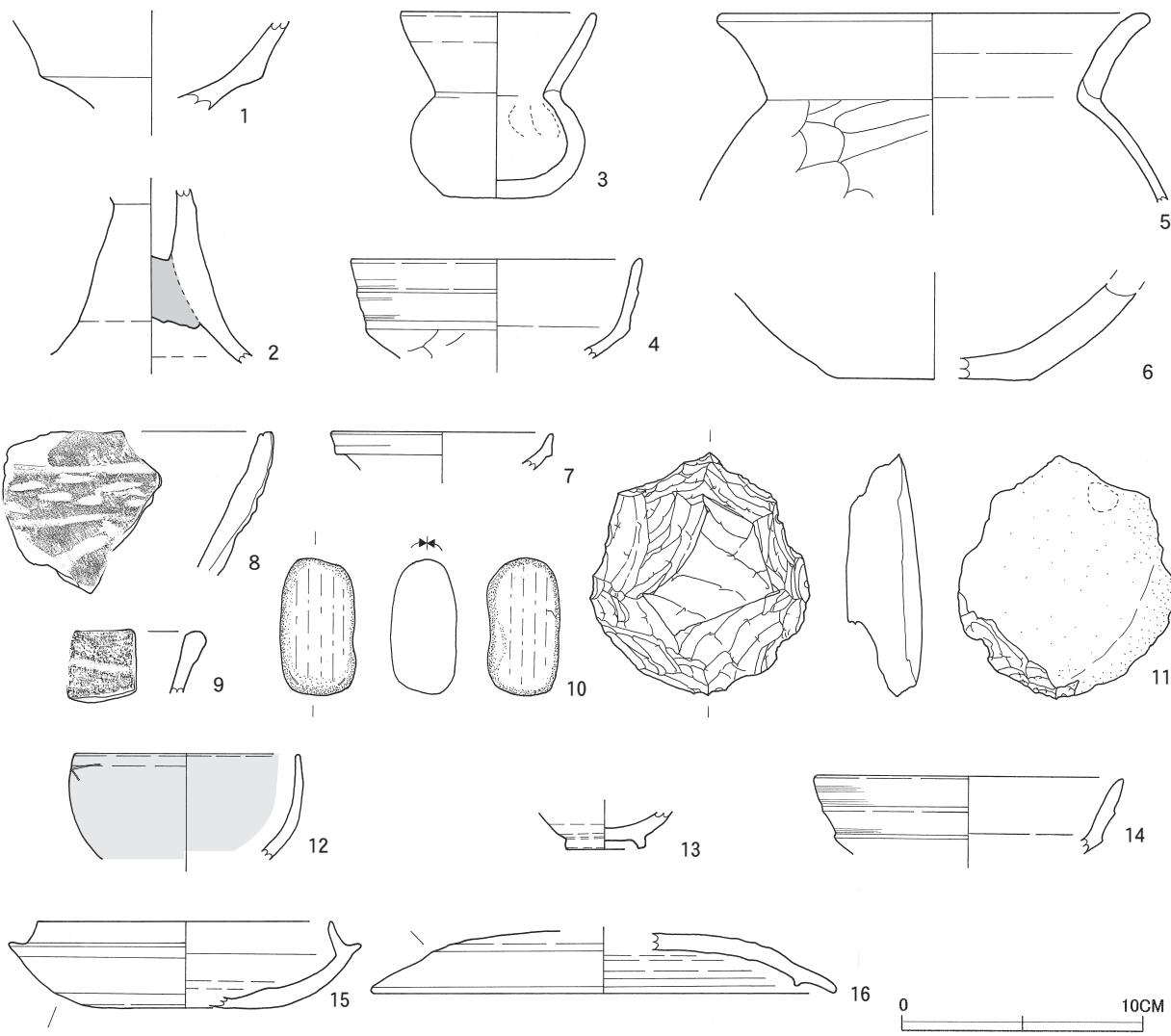
整理報告書作成作業は大里町が熊谷市に合併したことから、これを熊谷市教育委員会に引き継ぎ熊谷市埋蔵文化財保護事業として実施した。

発掘調査の組織

中廓遺跡の発掘調査は旧大里町教育委員会が実施し、整理報告書作成は合併後の熊谷市教育委員会でこれを実施した。当該年度の組織・人員配置は箕輪遺跡と同一であるため表記を省略する。



第15図 中廓遺跡第3次遺構実測図 (1/60)



第16図 中廓遺跡第3次出土遺物 (1/3)

2 遺跡の立地と環境

立地と環境 中廓遺跡は箕輪遺跡から引き続く台地縁辺部に立地する標高23mで水田との比高は3m前後である。箕輪遺跡との関係からは本文は省略する（立地と環境を参照 7頁）。

調査の方法

本遺跡調査地点の標準的な土質は、高燥な関東ローム層を基本とする土壤で、上層に黒色の腐植土の薄層で覆われる。建物敷地部分を掘削し遺構確認の上、個々に遺構を掘り下げている。

市が引き継いだ中廓遺跡の発掘調査資料は、現地の実測図・記録写真であるが、現地の基準点測量は道路境界杭、民家建物を見返点として任意の測点を設定していたことが示されている。この実測図中には方位や水準高の記載がなく、公図から方位・位置は復元したが厳密なものではない。遺憾ながら実測図に記載の無いデータは復元し得なかった。

第4表 中廓遺跡第3次出土遺物観察表（第16図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・高壺	-	-	-	A・G・I・N	B	橙	1/4	
2	土師器・高壺の台	-	-	-	A・G・I・N	B	明赤褐	2/3	台部焼土の詰まり有。
3	土師器・壺	(8.0)	7.8	4.4	A・B・C・E・I・N	B	内:灰褐 外:橙	1/3	内側指圧痕有。
4	土師器・壺	(12.1)	(4.1)	-	A・B・E・I・J・N	B	明赤褐	口縁1/6	
5	土師器・甕	(17.6)	(7.9)	-	A・B・D・E・I・J・N	B	橙	口縁3/4	
6	土師器・甕	-	(4.0)	(8.2)	A・B・E・I・N	B	明赤褐	底部1/4	
7	須恵器・長頸瓶	(9.2)	(1.6)	-	A・B・I・N	B	灰	口縁の一部	
8	縄文土器	-	-	-	A・B・E・I・K・N	B	赤褐	口縁の一部	
9	弥生土器	-	-	-	A・B・E・J	B	にぶい黄橙	口縁の一部	
10	摩石	最大長5.7、最大幅3.1、最大厚2.8、重さ75g							泥岩。
11	礫器	最大長10.0、最大幅9.0、最大厚3.1、重さ295g							
12	灰釉・椀	(9.2)	(4.4)	-	-	-	灰黄	1/5	唐津。両面:釉有。
13	陶器・高台椀	-	(1.5)	(3.2)	-	-	浅黄	底部のみ	
14	土師器・壺	(12.9)	(3.2)	-	A・B・D・E・I・N	B	にぶい赤褐	口縁の一部	
15	須恵器・壺	(12.0)	(3.65)	(5.6)	A・B・D・I・J	B	褐灰	1/5	
16	須恵器・蓋	19.2	(2.4)	-	B・G・I・K	C	灰黄褐	1/4	

3 検出された遺構と遺物

調査地点の概要を第14図中廓遺跡位置図・発掘調査地点図、第15図中廓遺跡遺構実測図で説明する。1次調査では安行3a式期の重複した2軒の住居跡が検出され、第1号住居跡は方形を呈し一辺4.8mほどで地床炉、柱穴等の遺構のほか床敷も確認されている。遺物は同時期の精製土器・粗製土器を中心に鉢形土器・注口土器、土面・土偶・耳飾などが多数出土した。また、大洞式b～c式の土器も出土が伝えられている。2次調査では土壙2基と溝跡であったが、遺物は縄文時代晚期安行式期の土器を中心に出土している。

今回の3次調査では、遺構遺物も散漫で少ないが、住居跡1軒（第1号住居跡—古墳時代か）と溝1条、土壙1基、柱穴状の小穴が調査区の全体から互いに重複することなく検出されている。

遺物は古墳時代から奈良時代の遺物が確認されている。以下第15図中の説明では、原図に表記がないが上方位が北方向として説明する。また遺構の表記に洩れがあり、整理途上で判断した遺構名も用いた。

第1号住居（S I 1）（第15図 第16図） 調査区南西隅に検出され、北西壁で2.6m・北東幅2.1mを測る。他の部分は攪乱を受けているようである。壁に沿って幅広の壁溝が巡る。1, 5の土師器が出土していることから古墳時代後期と考えられる。

第2号住居 住居跡との明示がないが、調査区東辺に矩形の溝状の堀込があり、その形態から住居跡ではないかと想定される。時期は不明だが古墳時代から奈良時代の住居跡であろう。この時期の土師器壺形土器2, 4, 6, 7, 14や須恵器壺身15, 須恵器蓋16が出土している。

第1号土壙（SK 1）（第15図） 調査区の東辺に検出された。一辺1.5m×1.1mの不整合形をしており、掘り込みも深くない。遺物は出土していないようである。

第1号溝（SD 1）（第15図） 調査区の北側に検出された。溝の端に土壙が重なっている可能性があるが、土層図からもはつきり読み取れない。長さ約3.2m・幅約1.1mを測る。断面形態はわずかにレンズ状を呈している。

他の遺構では、柱穴状の小穴が分布するが、発掘時の所見がなく、性格等を判断することができない。また、他に遺物の伴う遺構も不明だか、縄文時代早期の礫器。磨石、後期称名寺式土器破片などがある。後世の攪乱に伴うものに12・13のような近世期の陶磁器破片があったと思われる。

III 西浦遺跡の調査

1 発掘調査の概要

調査にいたる経過 西浦遺跡は、昭和63年に旧大里町教育委員会の手で行われた。発掘調査は個人住宅の建設に伴うもので、遺跡保存のための調整を経て現状の保存が困難との確認がなされたことから事前の記録保存を目的としておこなわれた。発掘調査届後は、平成9年2月6日 8委保記第5—5483号による受理通知を受けている。

発掘調査・整理報告作業の経過 西浦遺跡の発掘調査は、昭和63年7月16日より同年8月2日まで行われた。現場には作業員を投入し遺構の確認を進め、遺物包含層を掘り進めて行った。遺構としては多数の柱穴状の小穴、土壙、溝が調査区の全面に現れた。伴出する遺物から中世～近世期の遺跡と考えられる。

なお、発掘に際して基準点の測量は行われていなかったようで、公図への位置の落込、全体図の作成（第17・18図）は整理報告時に操作したものである。また、方位・水準高など原図に記載のない情報については一部復元を試みている。この発掘調査は、旧大里町が昭和63年度に文化財関係国庫補助事業を受けており、国1/2、埼玉県1/4、大里町1/4の費用負担を行っている。整理報告書作成作業は大里町が熊谷市に合併したことから、これを熊谷市教育委員会に引き継ぎ熊谷市埋蔵文化財保護事業として実施した。

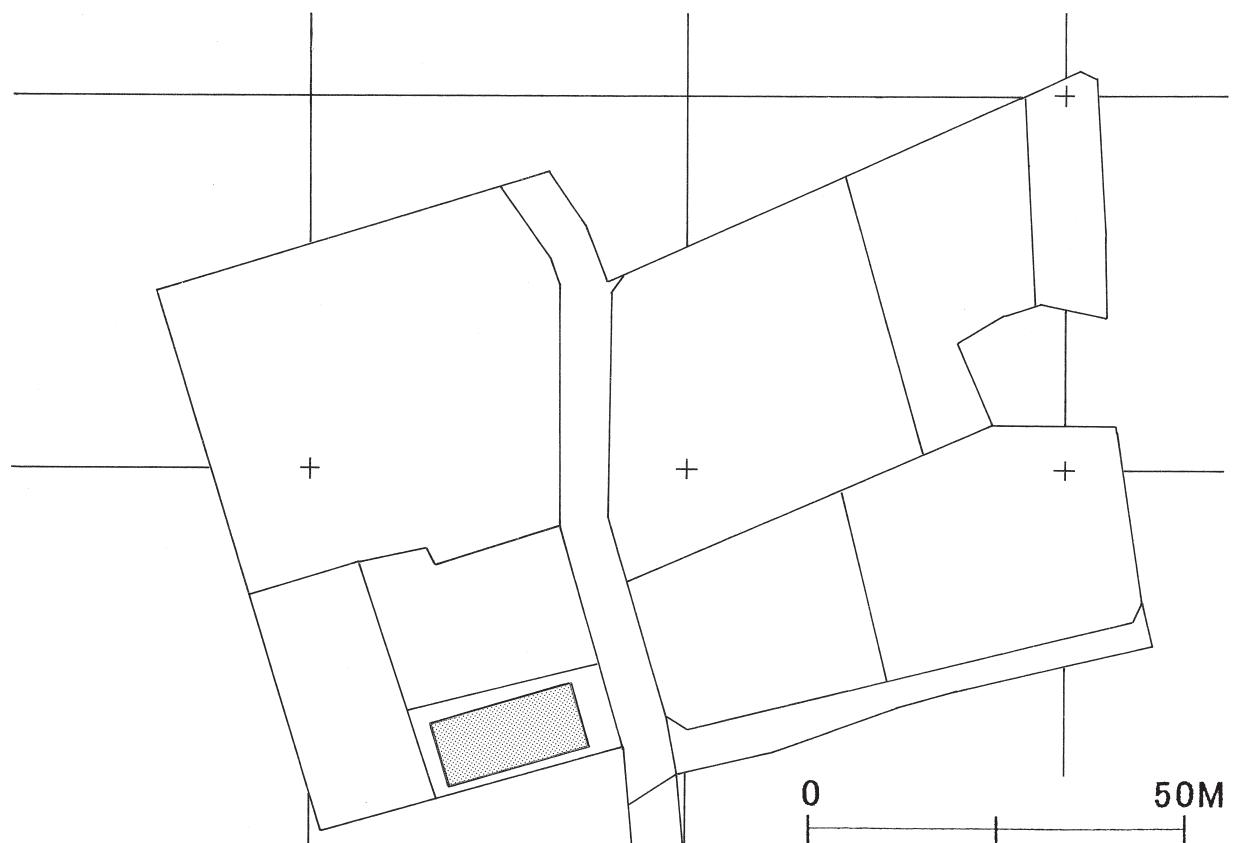
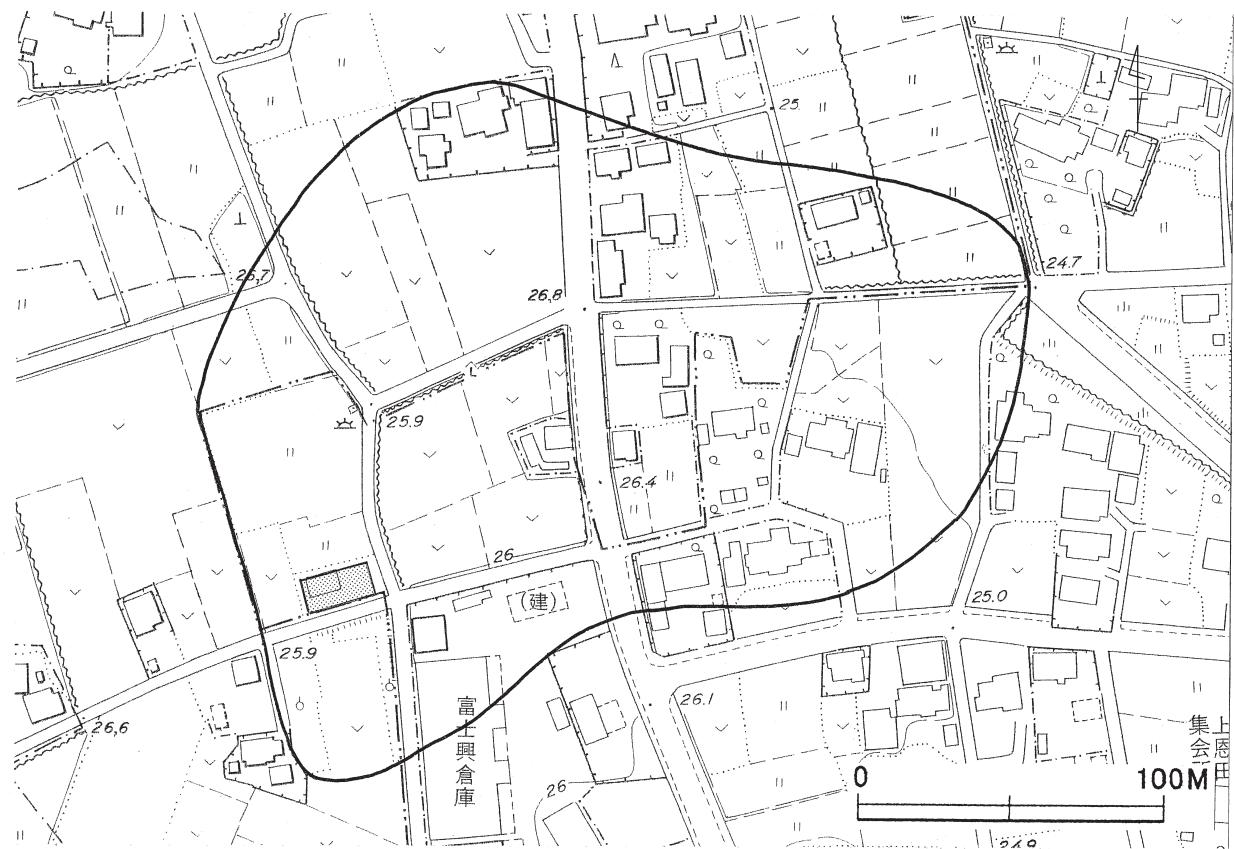
発掘調査の組織 箕輪遺跡の発掘調査は旧大里町教育委員会が下記の組織で実施し、整理報告書作成は合併後の熊谷市教育委員会でこれを実施した。当該年度の組織・人員配置は次のとおりであった。

西浦遺跡発掘調査の組織（昭和63年度）発掘調査		同（平成20年度）整理・報告書作成	
主体者	大里町教育委員会	主体者	熊谷市教育委員会
事務局	教 育 長 小池 敬介	※ 省略（5頁と同一）	
	教育次長 矢島 利夫		
	社会教育係長 塚本 敏子		
	文化財担当 出縄 康行		
	発掘作業員 11名		

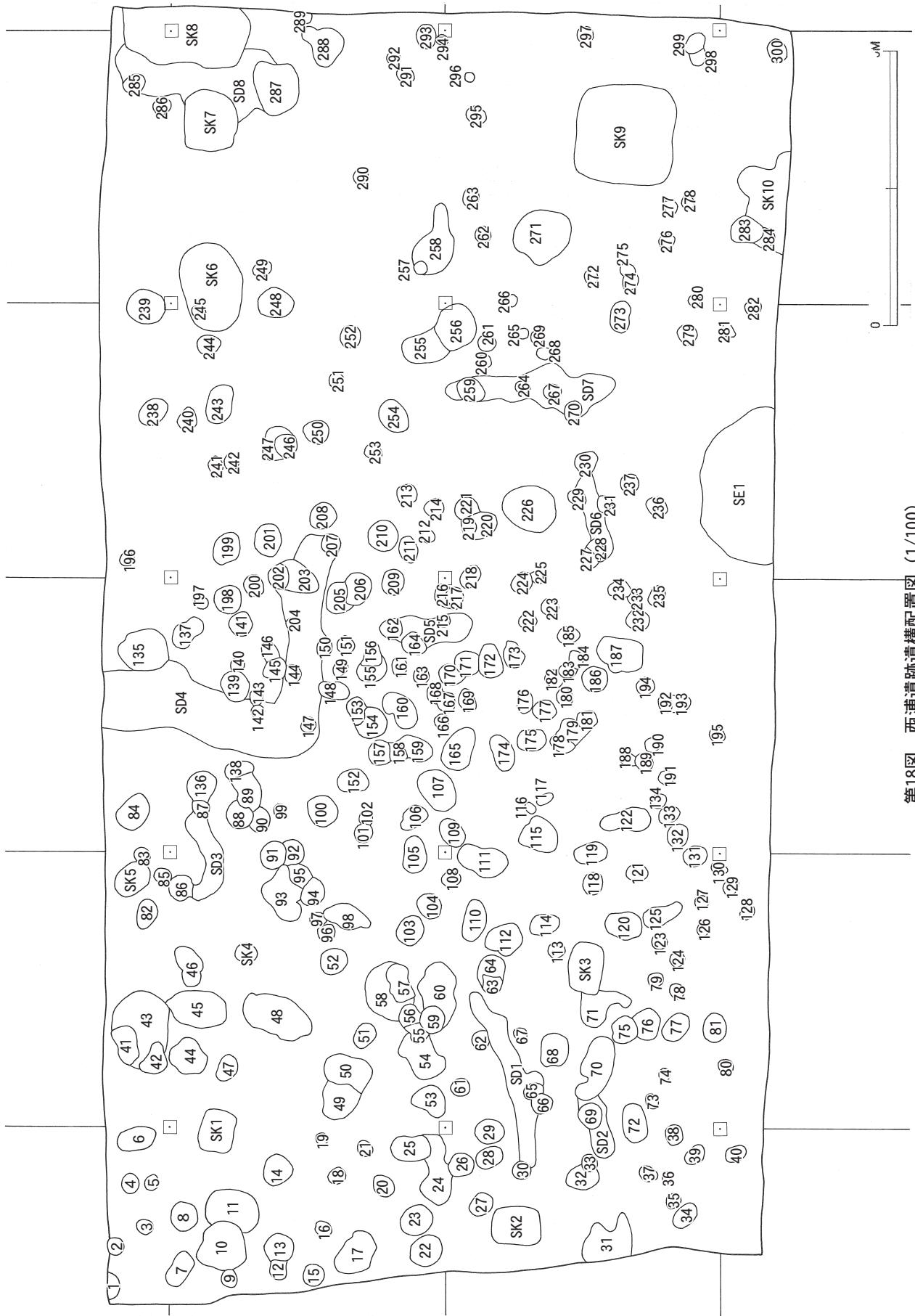
2 遺跡の立地と環境

立地と環境 西浦遺跡は荒川の低位段丘の上に立地し標高は約25mである。遺跡範囲は東西約260m×南北180mの広がりをもつとされ、ほぼ水田面から微高地上となる畑地部分と一致している。調査地点は本遺跡を南北に通る407号国道の西側部分で調査面積は約400m²である。この地域は東山道武藏路の想定路・駅家施設の可能性や、中世恩田御厨の所在地との推定がなされる地域として知られる。

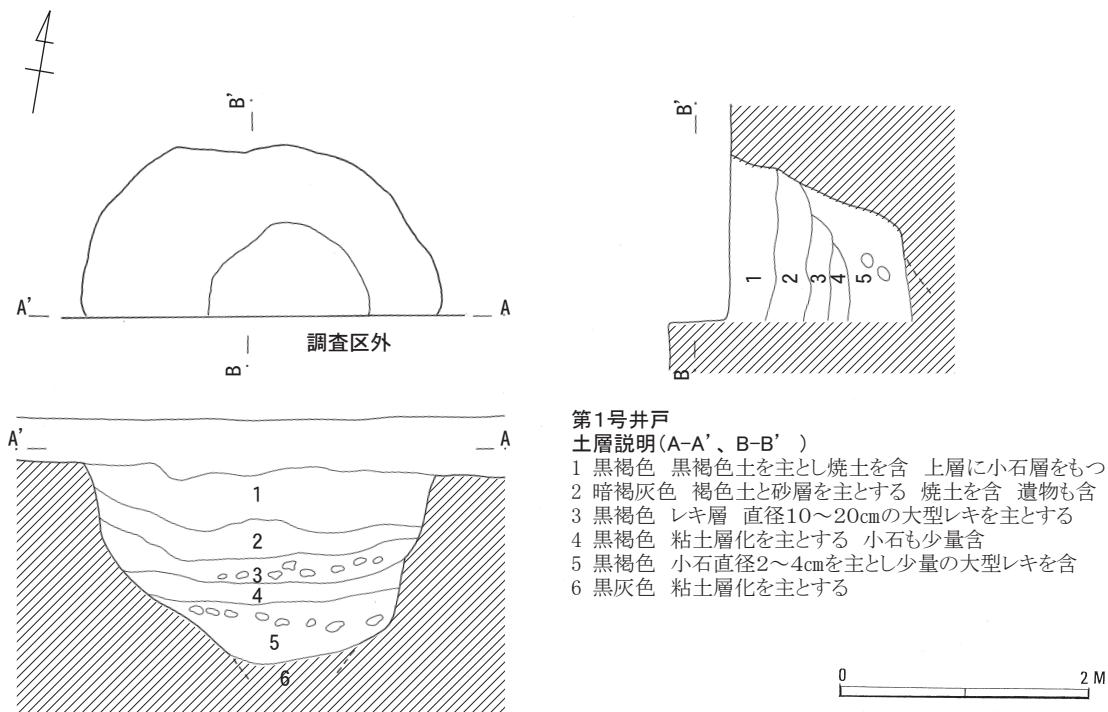
調査の方法 当地の標準的な土壤は、河川堆積土を基本とし、乾燥時は砂質細粒の茶褐色土で、湿潤時は粘性が高くなる。上位段丘面に近接するためローム土由来の黄褐色土を混じえていると考えられる。確認された遺構（第18図）は、井戸跡（S E1）、溝（SD 1～8）、土壙（SK 1～10）、柱穴群（P 1～300）であり調査区の全面に亘って検出された。とくに小穴群についてはその性格を把握することを意図して、堆積土の判別や形態・深さ等が綿密に計測されている。



第17図 西浦遺跡位置図・発掘調査地点図 (1/2500) (1/1000)



第18図 西浦遺跡遺構配置図 (1/100)



第19図 西浦遺跡第1号井戸実測図 (1/60)

3 検出された遺構と遺物

井戸跡 (S E 1) (第19図) ほほ円形で、約2分の一を調査している。素掘りの井戸だが底までは至っていないようである。本体部の直径は約1.2mで、上面径は2.7mを測る。遺物の出土ははつきりしない。

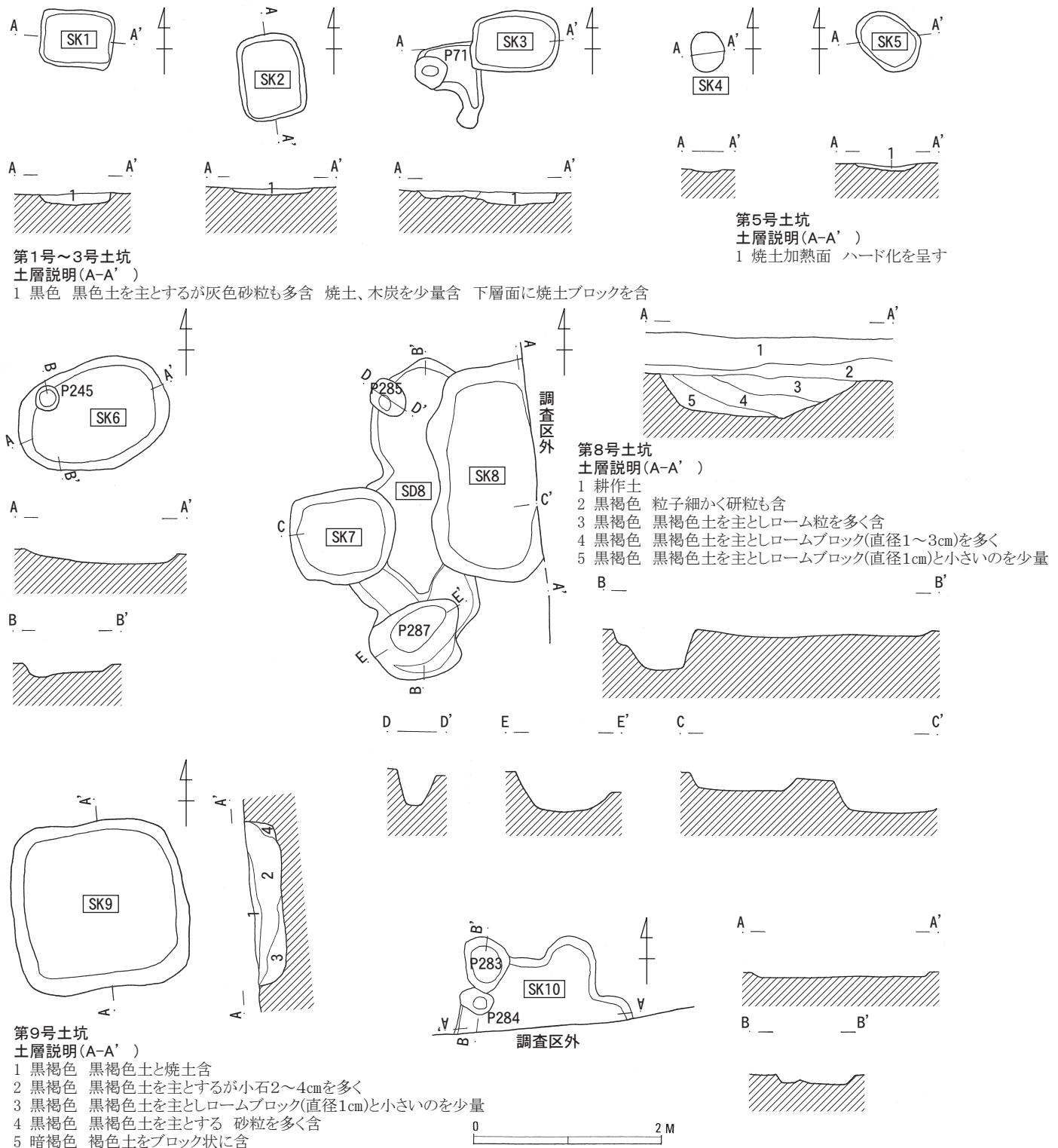
土 壤 (S K 1 ~ 1 0) (第20図) 1・2・3・7・9号は方形を呈し覆土に焼土粒子を含むことから、火葬跡または墓壙であった可能性があろう。遺物はほとんど出土していないようである。

溝 跡 (S D 1 ~ 8) (第21・22・23・24図) 溝とされているものは、SD 4以外土壙の連続跡のようで、不定形で互いに連続性もうかがえない。雨落溝、区画溝と見ることも困難であろう。

柱穴群 (第21・22・23・24・25・26・27・28・29・30図)

これらの柱穴群としたものは、建物の柱穴とも想定されたようで、土質により6種の判別がなされていた。このデータは第29・30図に弁別したが、読み取れるものが何かは説明しがたい。しかし、断面形態や埋土の状態をみると特徴的に焼土や木炭が含まれている場合があり、このような状況を呈する遺跡には深谷市(旧岡部町)六反田遺跡A区で見られた柱穴群のあり方が参考になると思われる。これら的小穴のあるものは墳墓跡の可能性を考えたいが、墓碑や供養塔婆の出土は見られないので可能性にとどまるかもしれない。なお、小穴覆土の類別は下記のとおりである。

I a類 (A・C・E・G) + D	I b類 B + D
I c類 F + D	I d類 D
II類 (A・B・C・G) + E	III類 A
※ (A - 焼土塊、粗粒主体 木炭 B - 焼土粒少量 C - ロームブロック D - 黒色土主体	
E - 灰色土 F - 小石混じり土 G - 磯混じり土)	

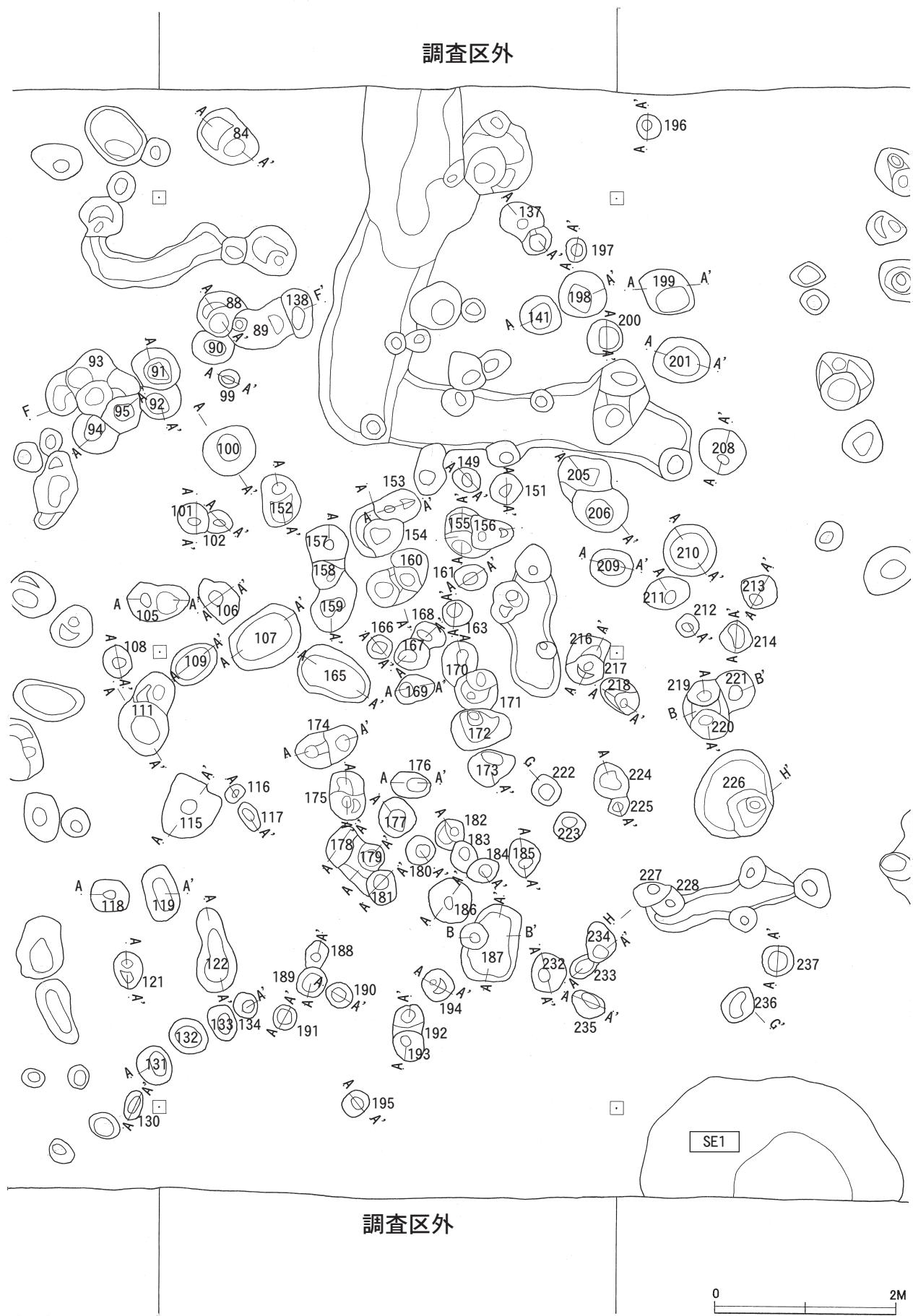


第20図 西浦遺跡土壤実測図 (1/60)

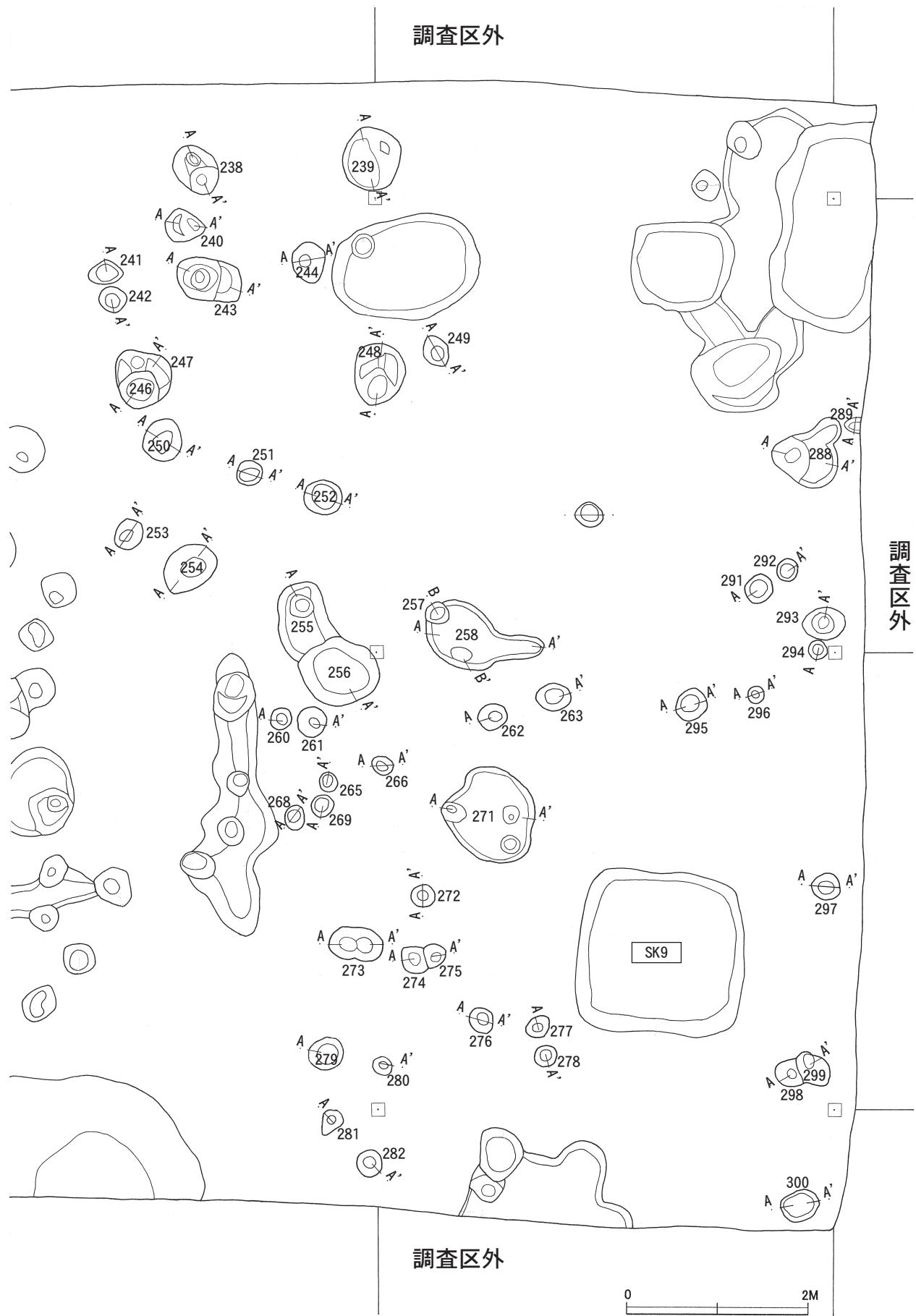
調査地点からの出土遺物量は極めて少ない。小穴覆土にわずかに伴う例があるが大部分の小穴に遺物は伴っていない。その少ない遺物の中で多いものは片口鉢がある。4・6は瓦質の片口鉢で、4は口径30.5 cm、逆ハの字状に大きく開く、二分の一遺存のため片口部を残さないが内面には摺目が認められないので、14世紀以前のものであろう。6・7・18は瓦質の火鉢類で火鉢や火盆に使用されたものである。18は菊花



第21図 西浦遺跡ピット全体図(1)(1/60)

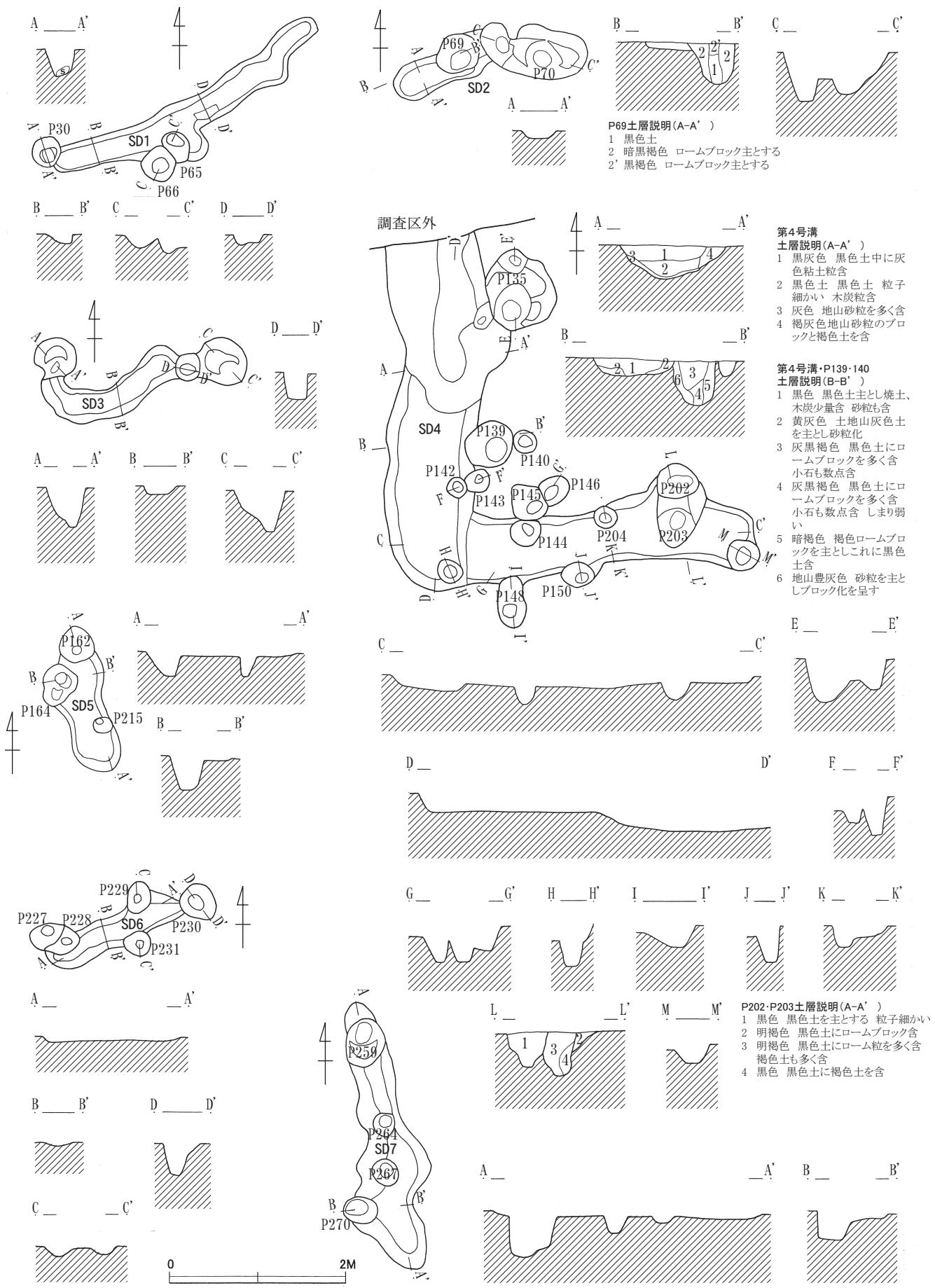


第22図 西浦遺跡ピット全体図 (2) (1/60)

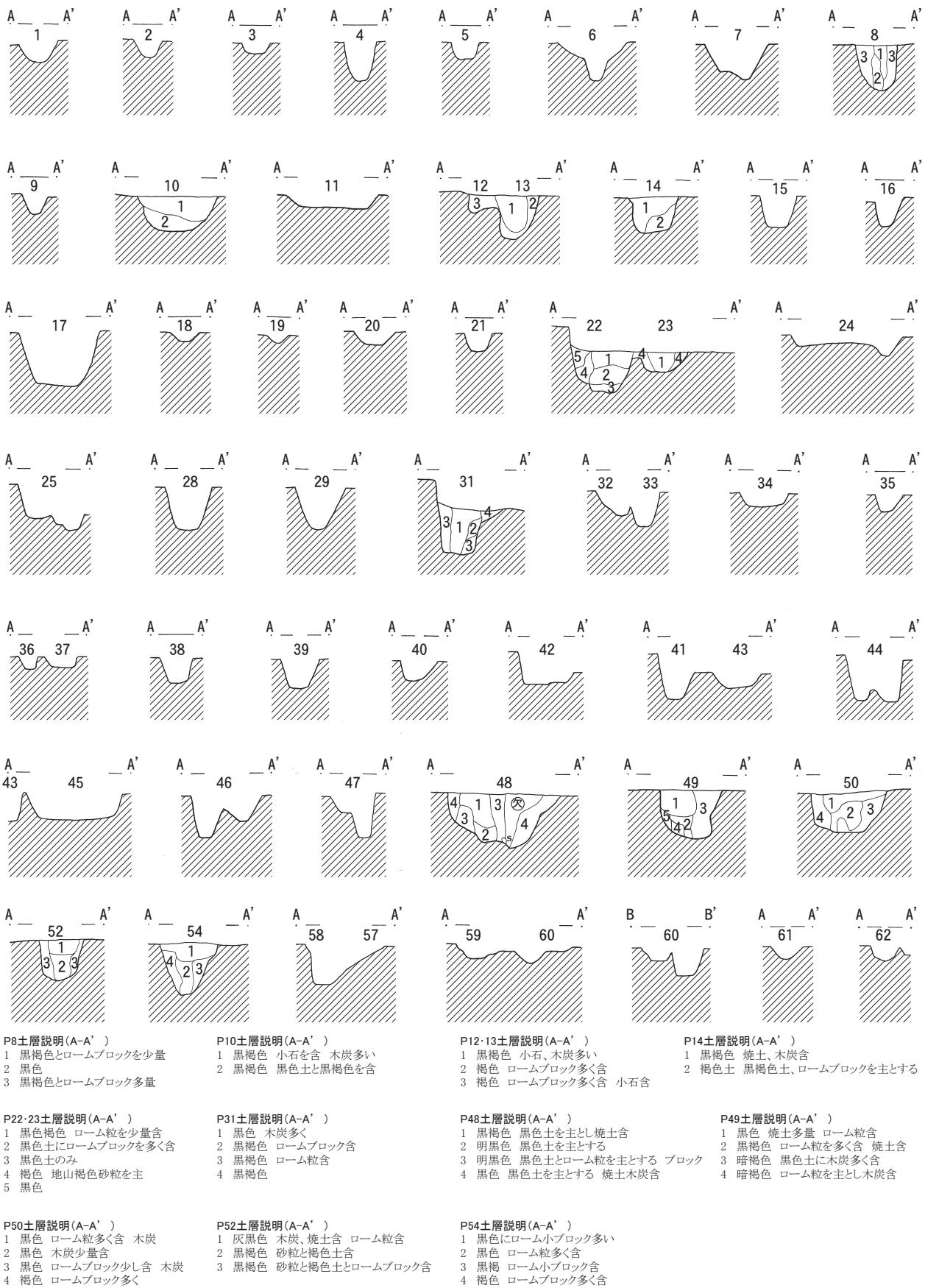


第23図 西浦遺跡ピット全体図 (3) (1/60)

西浦遺跡の調査

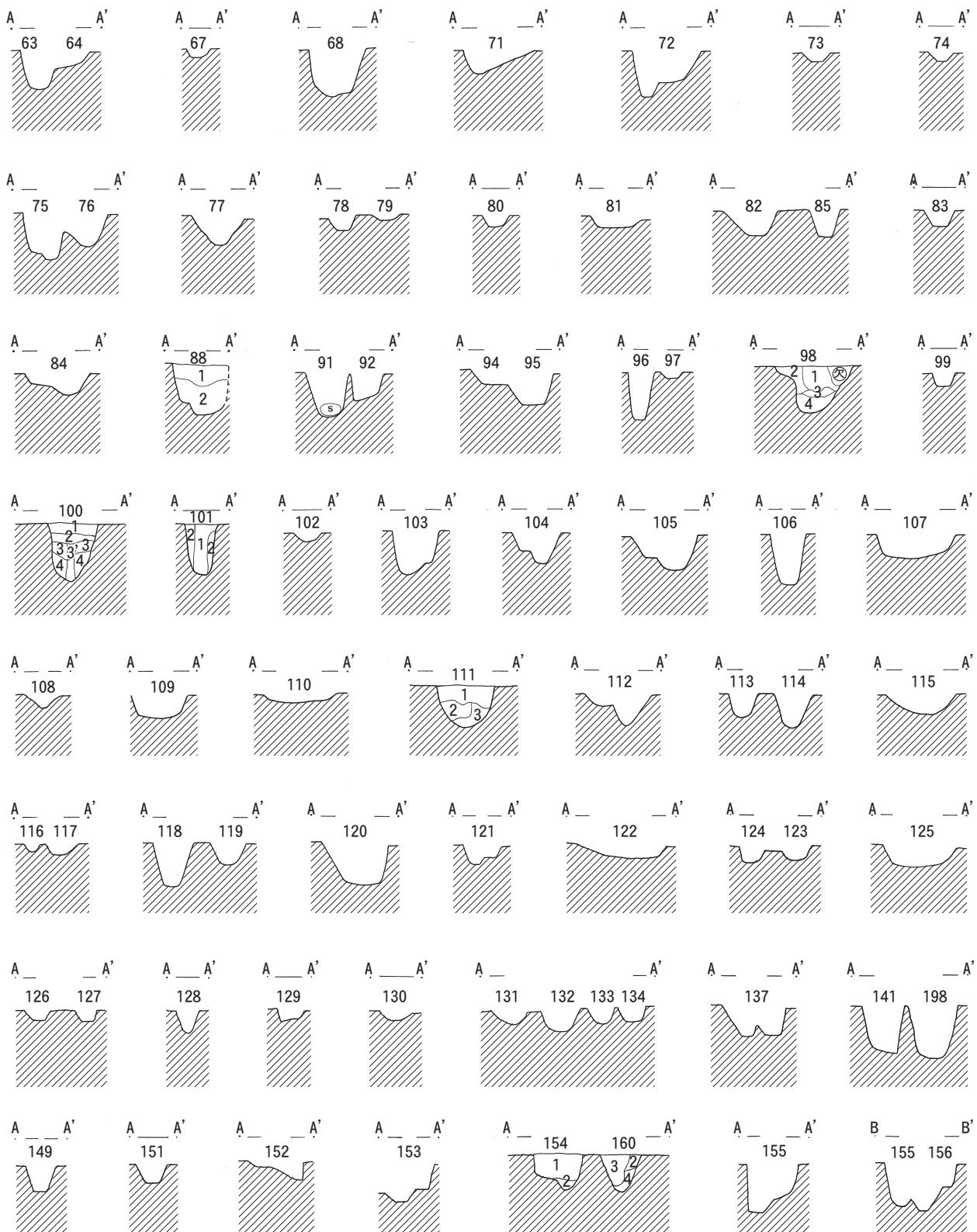


第24図 西浦遺跡溝・ピット実測図 (1/60)



0 2M

第25図 西浦遺跡ピット断面図(1) (1/60)



P98土層説明(A-A')

- 1 黒褐色 ローム粒を多く含 焼土、木炭少量含
- 2 黒褐色 ロームブロックを多く含

P100土層説明(A-A')

- 1 黒褐色 黒色土と褐色土 焼土粒含
- 2 黒色 黒色土を主とする
- 3 褐色 灰色粘土を主とする 3'欠
- 4 暗褐色 ロームブロック、黒色土を主とする

P111土層説明(A-A')

- 1 黒色 黒色土に小石を多く含
- 2 黒褐色 ロームブロックと小石多く含
- 3 黒色 小石含まない

0 2M

P98土層説明(A-A')

- 1 黒色 黒色土を主としローム粒を少量含 焼土、木炭多く含
- 2 黒褐色 ロームブロックを含 1層に
- 3 黒色 木炭、焼土を多量含 1層に
- 4 黒褐色 ロームブロックを多量含 5 説明欠

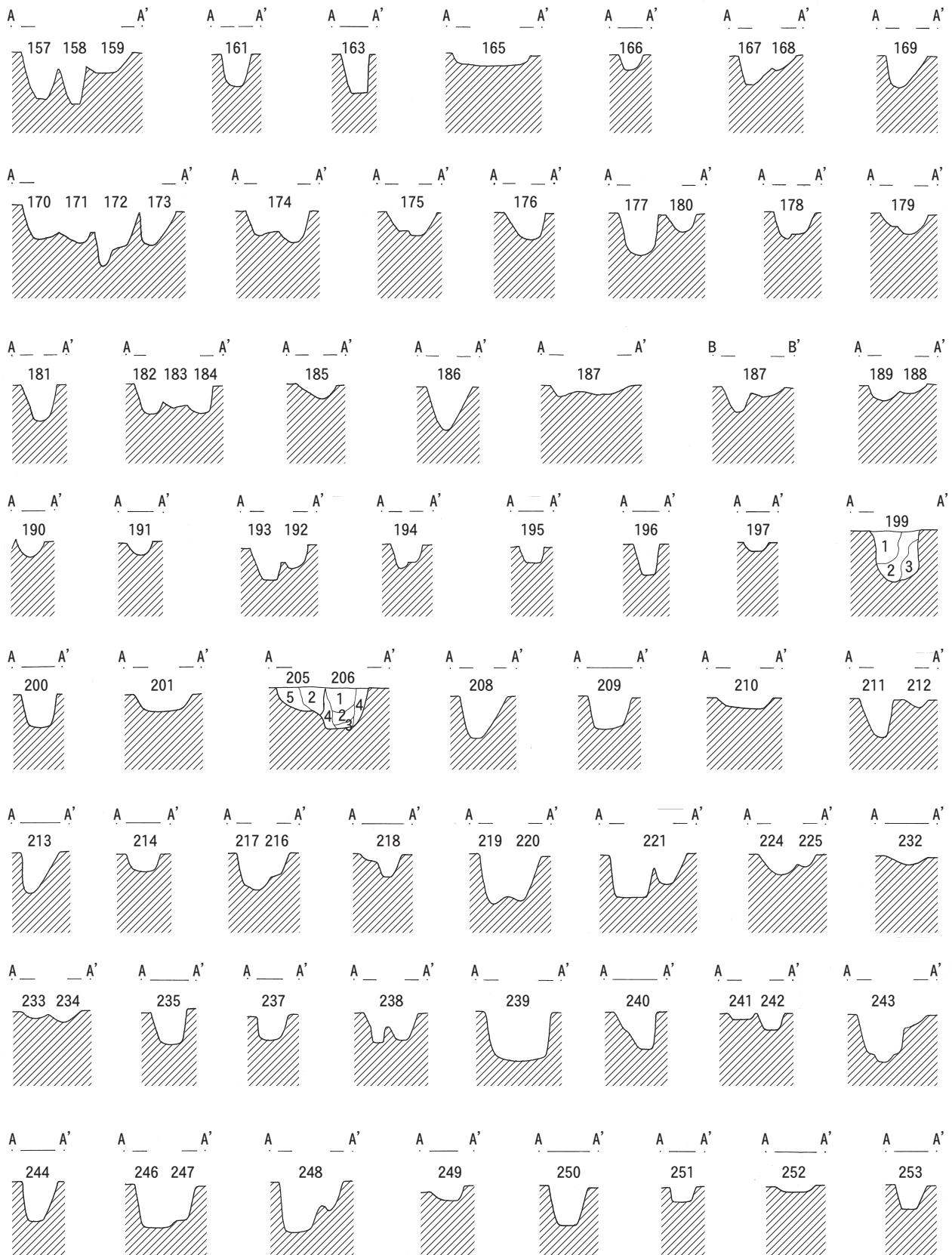
P101土層説明(A-A')

- 1 黒褐色 黒色土粒を主とする 焼土粒含
- 2 暗褐色 ロームブロックを多く含

P154-160土層説明(A-A')

- 1 黒褐色 黒色土、ロームブロックを含(埋戻)
- 2 黒色土 黑色土を主とする
- 3 黒褐色 黒色土と砂粒を主とする
- 4 黄灰色 地山砂粒を主とするがブロックと黒褐色土を少量含

第26図 西浦遺跡ピット断面図(2)(1/60)



P199土層説明(A-A')

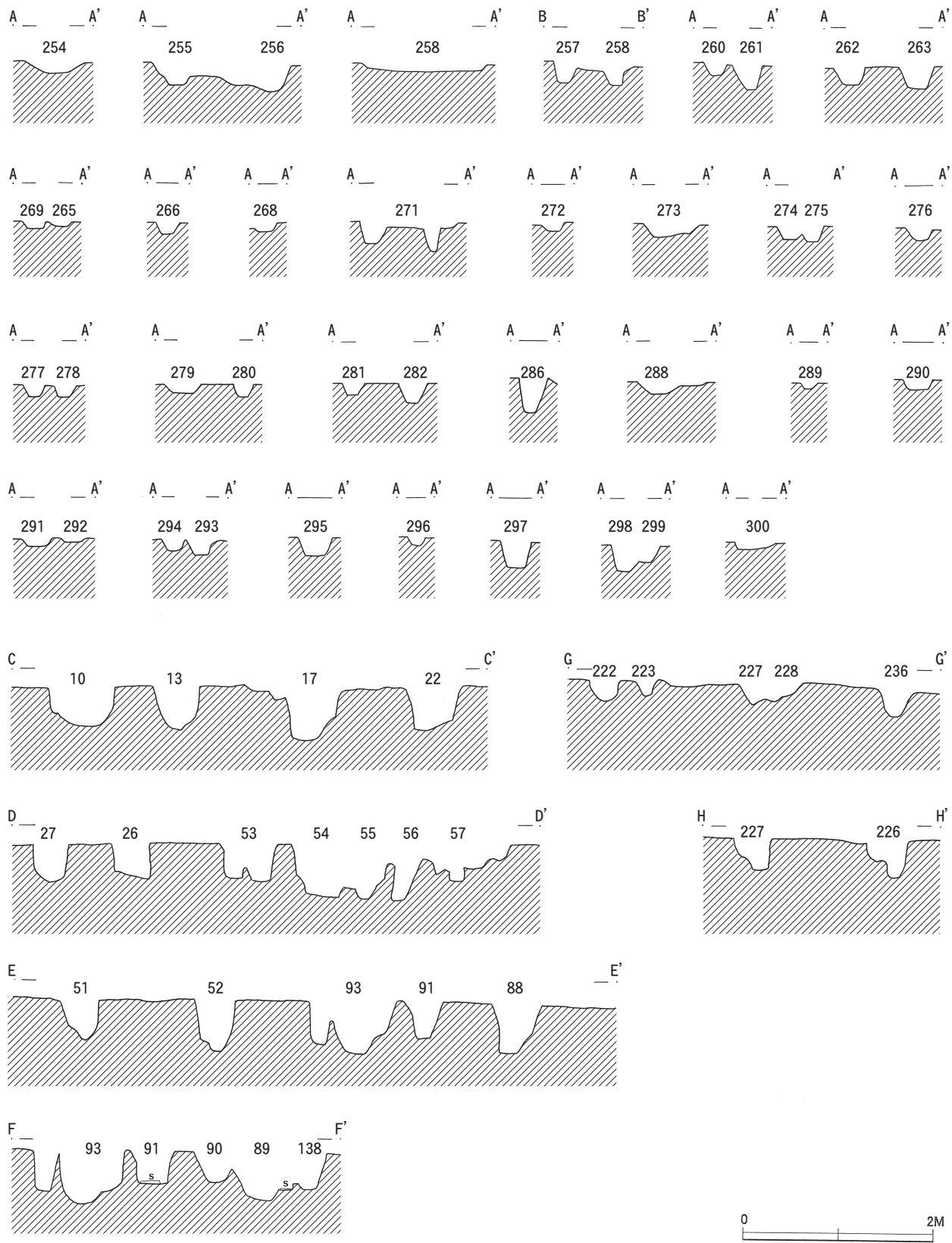
- 1 黒色土 黒色土を主としローム粒を含 木炭も含
- 2 黒褐色 黒色土とロームブロックを主とする
- 3 黒色土 黒色土を主とする

P205-206土層説明(A-A')

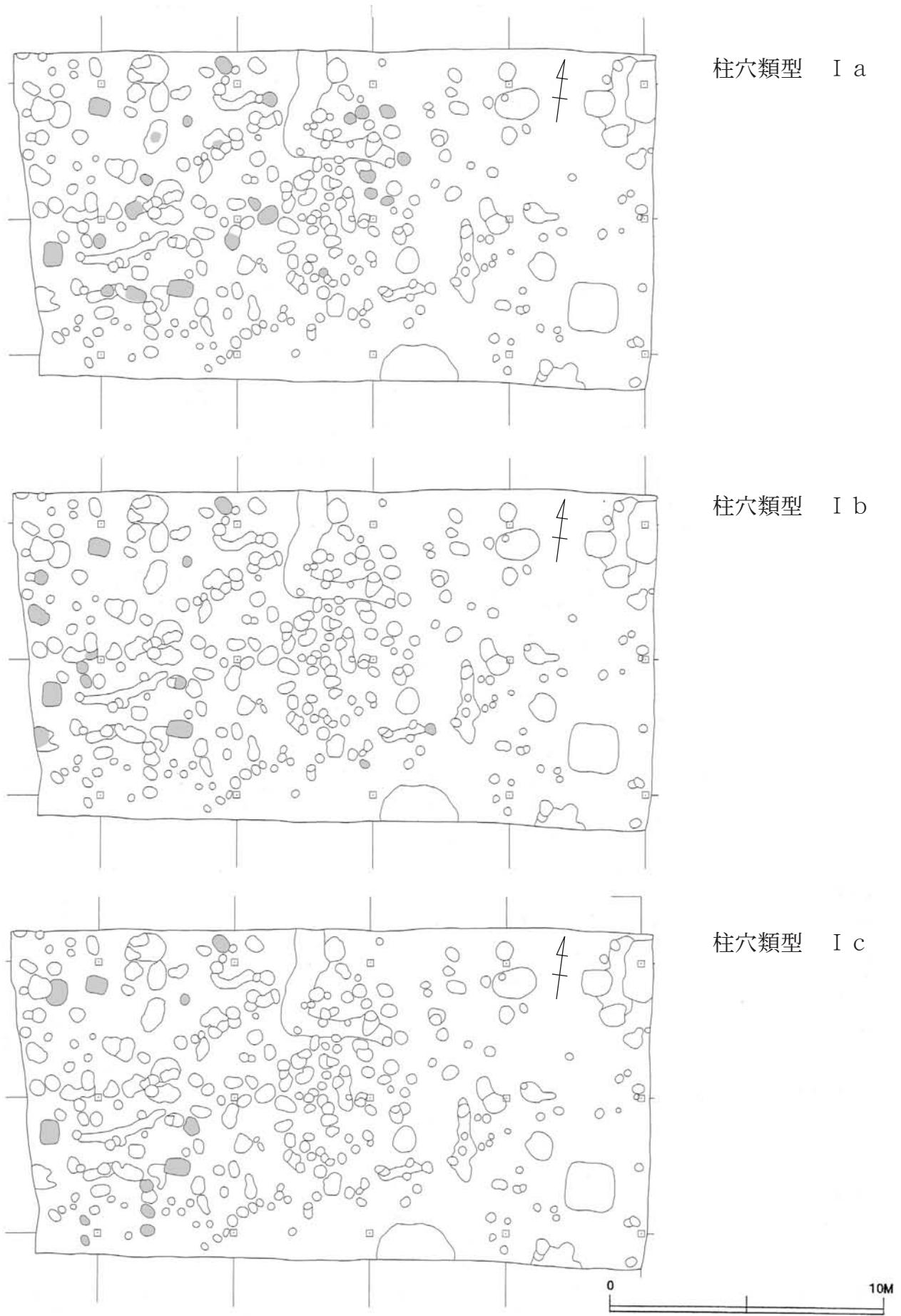
- 1 黒褐色 黒色土にローム粒を多く含
- 2 黒色土 黒色土のみ
- 3 黒褐色 ローム粒を少量含
- 4 暗褐色 ロームブロックを主とする
- 5 黒褐色 ロームブロックと黒色土を主とする

0 2M

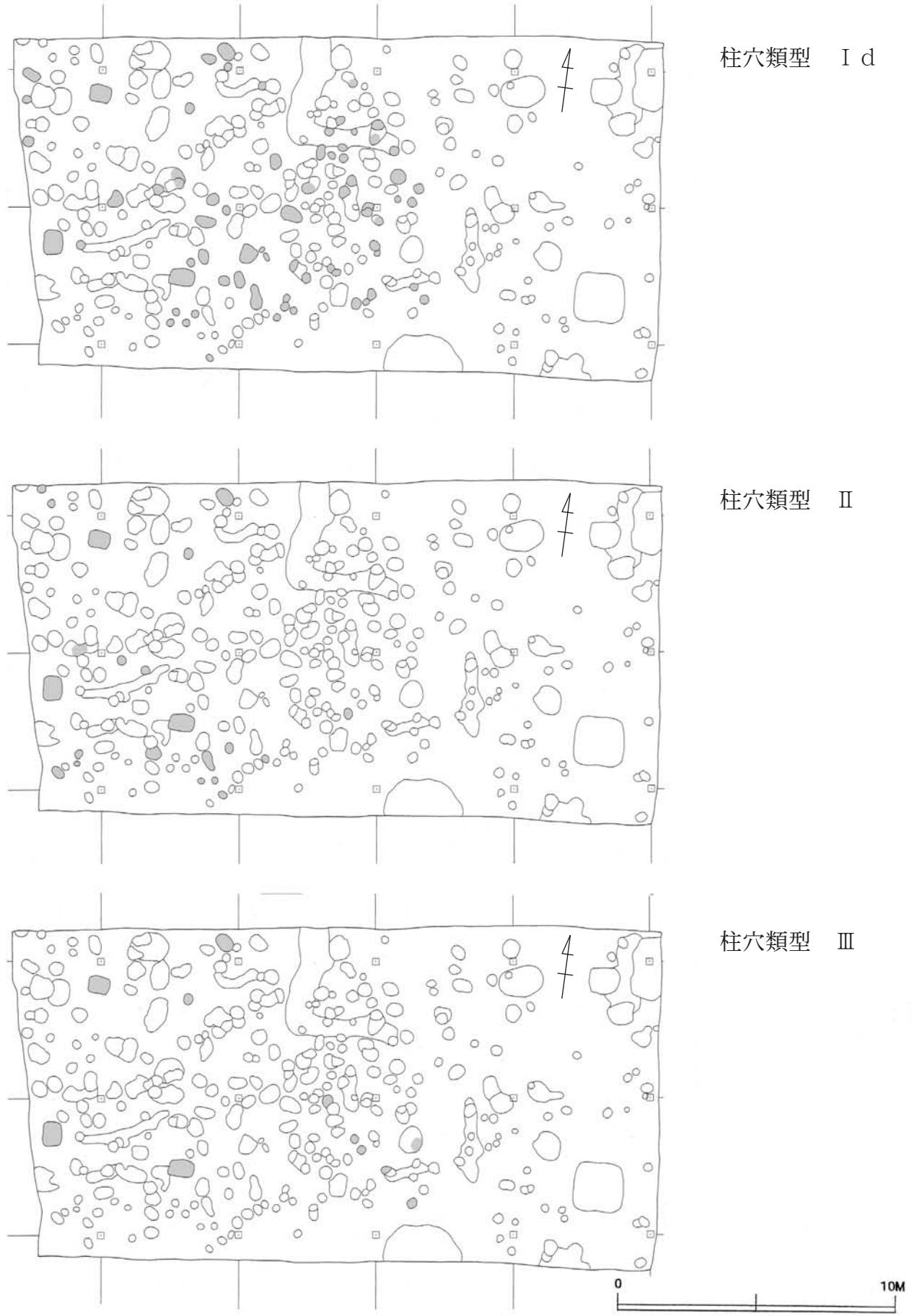
第27図 西浦遺跡ピット断面図(3) (1/60)



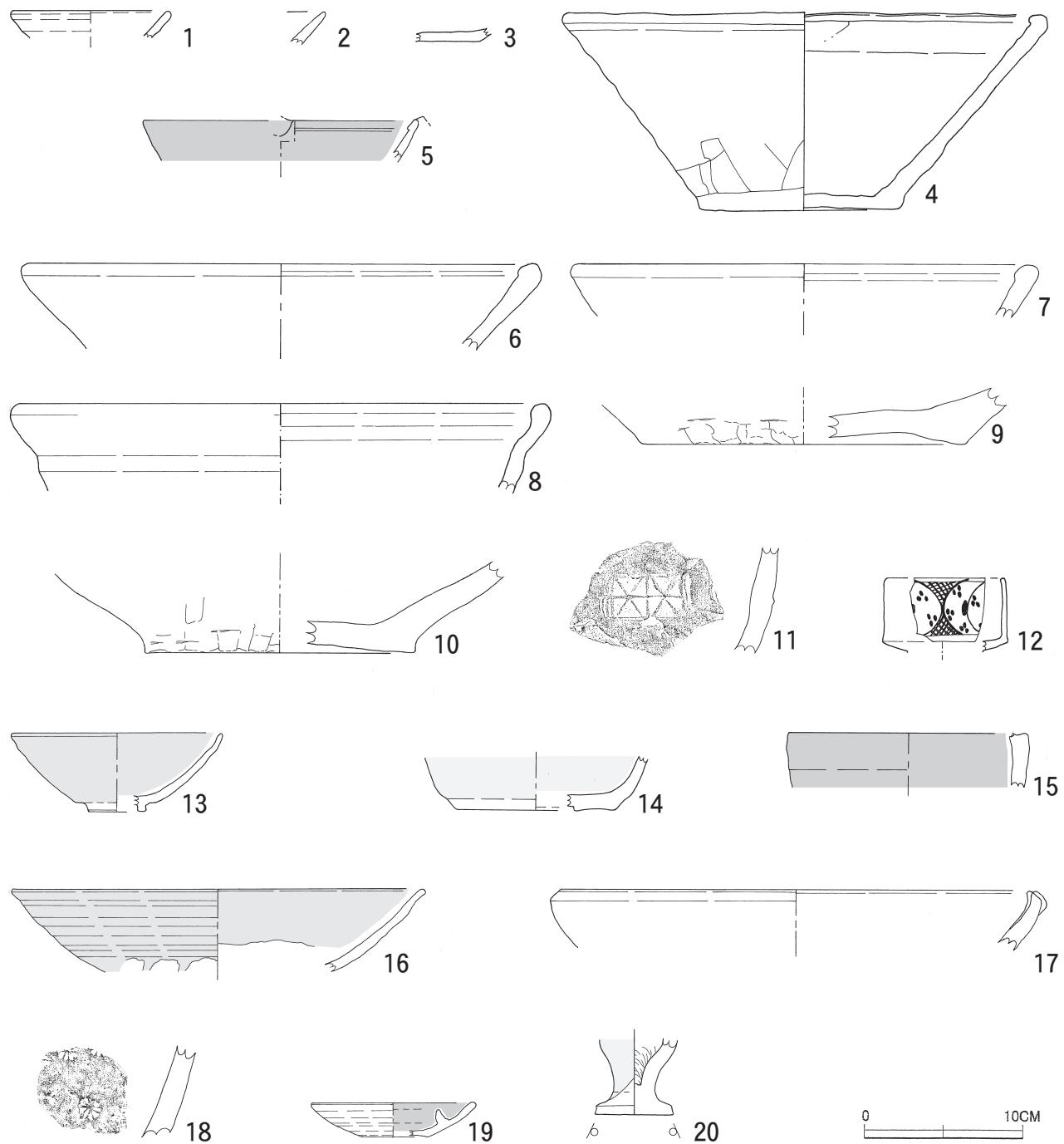
第28図 西浦遺跡ピット断面図 (4) (1/60)



第29図 西浦遺跡ピット土層別分布図-1 (1/200)



第30図 西浦遺跡ピット土層別分布図-2 (1/200)



第31図 西浦遺跡出土遺物 (1/4)

文の押印が施されている。16は体部が緩やかに立ち上がり口径26cmを越える大形の品で内外面に灰釉がかけられている。仏具とした盤であろう。9・10・11は常滑系の炻器である。11は二窓の格子に一と×入れた押印が施される。19は灯明皿。20は小形の瓶子で仏華瓶であろう。12は近世期の染付け茶碗である。遺跡の時期は、遺物の主体となる片口鉢や炻器から13世紀中～14世紀代と思われる。

参考 宮田 真 1995 常滑大甕の押印文様について 『集成 鎌倉の発掘2』 鎌倉市教育委員会

市内遺跡（旧江南町） III

元境内遺跡 4 次

宮脇遺跡 2 次 諏訪脇遺跡

IV 元境内遺跡4次の調査

1 発掘調査の概要

調査にいたる経過 本境内遺跡は、過去において1回の範囲確認調査と4回の発掘調査が旧埼玉県立歴史資料館と旧江南町教育委員会の手で行われた。詳細は下表のとおりであるが、範囲確認調査では埼玉県中世城館跡遺跡調査のひとつとして行なわれたもので、同所の増田館跡の土壘・堀を対象に実施された。1次調査は道路拡幅工事に先立って実施し、平安時代の住居跡が一部調査された。2次調査は文殊寺の建物建築に伴い増田館跡の内郭と堀が発掘された。3次調査は福祉施設の建築に伴い古墳時代から平安時代の集落跡が発掘された。4次調査は今回報告を行なうものである。

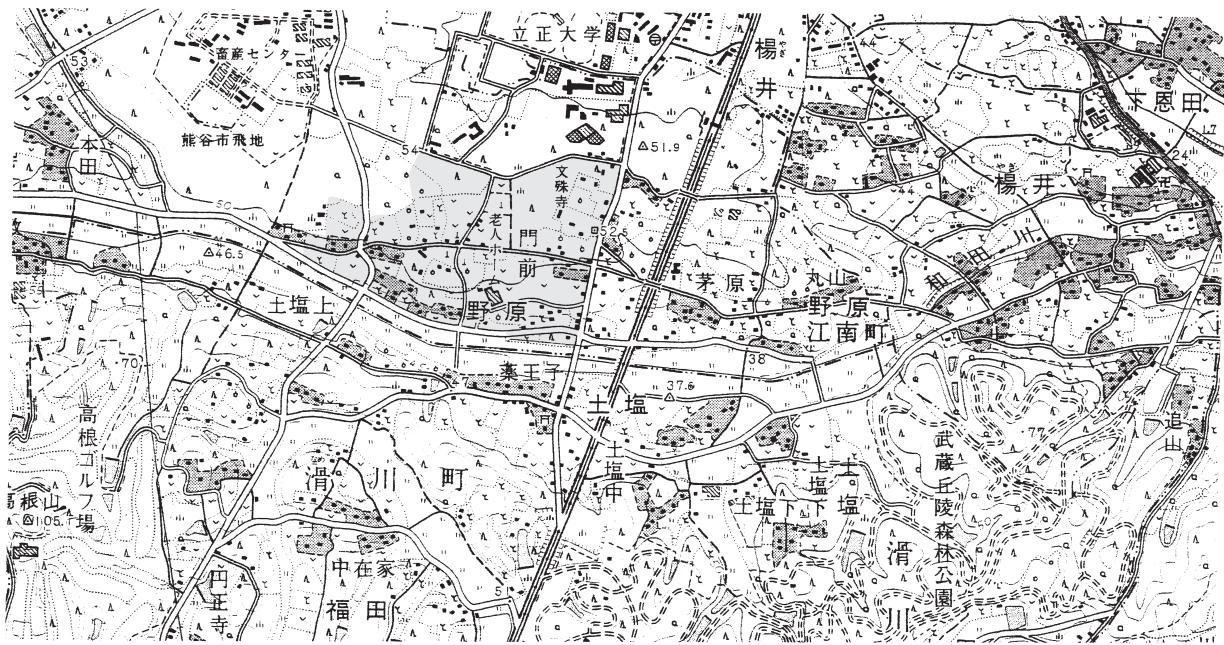
年・次	年報No.	所在	調査通知・年月日	原因・調査面積	調査主体	主な遺構・出土遺物・数量
S 57		元境内 623	昭和59年	範囲確認調査 約100m ²	埼玉県立歴史資料館	外郭土壘・堀 内郭堀 渡来銭 中・近世陶磁器
S 57 1次	1722	元境内 678	57委保記第2-2395号 昭和57年10月22日	道路拡幅工事 1200m ²	江南町教育委員会	平安時代竪穴住居跡2軒
H 8 2次	6770	元境内 623	8委保記第5-6784号 平成9年2月6日	文殊寺建物建築 1500m ²	江南町教育委員会	廃棄場 土壙 溝 内郭堀 中・近世陶磁器 金属製品 板碑
H 11 3次	7871	元境内 461-7	教文第2-172号 平成11年1月13日	福祉施設建設 2400m ²	江南町教育委員会	古墳時代竪穴住居跡21軒
H 11 4次	8059	元境内 466-1	江教第 2249号 平成11年9月7日	個人住宅 408m ²	江南町教育委員会	古墳時代竪穴住居跡

発掘調査は、個人の住宅建築にかかるもので建築主の岡田氏との調整を経て、現状の保存が困難との確認がなされたことから、次のようにおこなわれたものである。4次調査地点は、現況が畠地となっていたが、住宅地への農地転用が許可となった時点で、建築主から文化財保護法にかかる「埋蔵文化財発掘届」の提出を受け、江南町教育委員会教育長の副申を付して埼玉県教育委員会へ通知した。発掘調査は調査履歴から第4次とし、平成11年10月1日から同年10月29日まで、教育委員会文化財担当職員を調査担当者として実施された。

発掘調査・整理報告作業の経過 第4次発掘調査は、平成10年10月29日より平成10年11月13日まで行われた。現場には作業員を投入し遺構の確認を進め、遺物包含層を掘り進めて行った。遺構としては重なり合った古墳時代竪穴住居跡8軒・土壙2基・溝1条などを検出している。なお、本遺跡では過去の調査実績から住居番号を付しており、第4地点は第25号住居跡より報告する。発掘調査では、現地の基準点測量及び地形測量を委託業務として実施している。

この発掘調査は、江南町が平成11年度の文化財関係国庫補助事業を受けており、国1/2 埼玉県1/4 江南町1/4の費用負担を行っている。

整理報告書作成作業は江南町が平成19年に熊谷市と合併したことから、これを熊谷市教育委員会に引き継ぎ、平成20年度の熊谷市埋蔵文化財保護事業として実施した。事務組織等は次のとおりである。



第32図 諏訪脇遺跡、元境内遺跡、宮脇遺跡の地形と調査地点 (1/5000) (1/25000)

発掘調査の組織 元境内遺跡の発掘調査は旧江南町教育委員会が下記の組織で実施し、整理報告書作成は合併後の熊谷市教育委員会でこれを実施した。当該年度の組織・人員配置は次のとおりであった。

元境内遺跡発掘調査の組織（平成11年度） 発掘調査

主体者	江南町教育委員会
事務局	教 育 長 岡部 進 教育次長 安藤 喬司 課長補佐 大久保 光司 文化財担当 森田 安彦

元境内遺跡発掘調査の組織（平成20年度） 整理・報告書作成

主体者 熊谷市教育委員会 組織 ※ 省略（5頁の組織と同一）

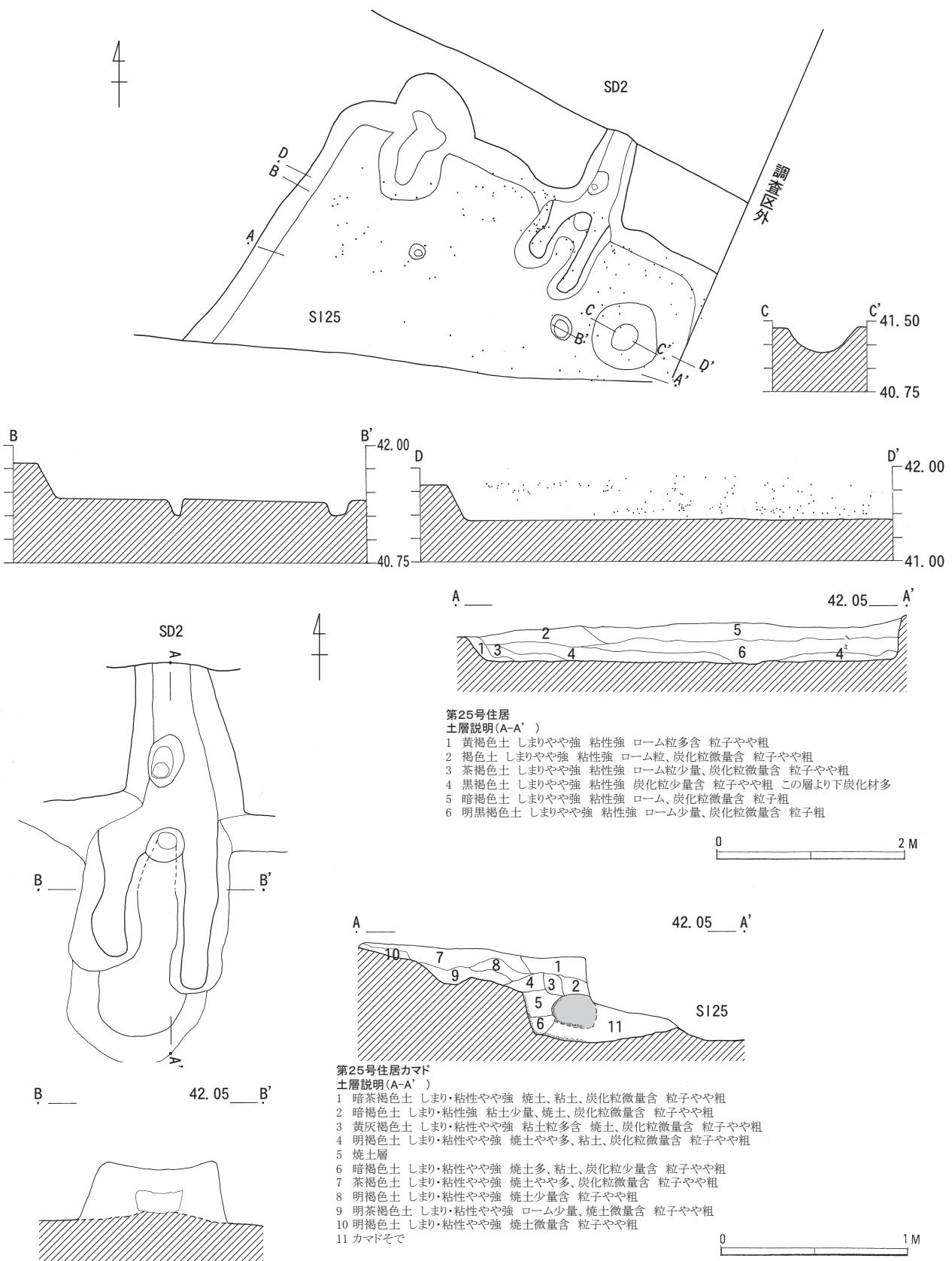
2 元境内遺跡の立地と環境

立地と環境（第32図） 元境内遺跡は江南台地の南縁比企丘陵とは和田川の開析する帯状の沖積地を挟んで立地する。高燥な台地だが旧石時代のナイフ形石器を伴う市域最古の遺物が鹿島遺跡から発見されている。ここは立正大学校地内に所在するため同大学で調査が進められている。早期の集落は和田川や台地の開析谷に面した小谷に点々と分布することが知られ、鹿島遺跡・宮脇遺跡では縄文時代早期撫糸文期の集落も見つかっている。前期以降の遺跡は知られていないが、境田地内で晩期の土器・鹿島遺跡で弥生時代の磨製石鎌が採取されている。古墳時代以降の遺跡は約30基の古墳が現存する野原古墳群と相対して50軒以上の古墳時代住居が発掘された本田東台遺跡、野原古墳群と時期を同じくする瀬戸山古墳群と近隣の集落跡が吉岡中学校地などの台地縁部や支谷沿いに濃密に分布している。石室の調査された野原古墳は墳丘長約35mの前方後円墳で片袖型の石室が前方部と後円部から発掘された。踊る埴輪などが発見されており、当地域では最も早く埴輪を使用する古墳として注意される。古代から中世においても国道407号線沿いに荒神脇遺跡・熊野遺跡・下新田遺跡・丸山遺跡で50軒に及ぶ住居が発掘され、今回報告の元境内遺跡まで広く集落の分布が想定される。とくに丸山遺跡では、郷長の居宅とも推定される建物群が見つかっている。古代末には野原古墳が経塚に利用されたらしく金銅宝冠阿弥陀像が出土している。付近にあったとされる能満寺の伝承から中世後期成立の文殊寺の創建にかかる由来が埋もれているようだ。

元境内遺跡はこのような遺跡群の一つを構成する地域の代表的な遺跡で、遺跡の大部分は増田館跡と現文殊寺の境内地となっている。現在の県道と国道408号に沿い東山道武藏道が通っていたと想定されており、古代以降も古街道として、鎌倉道一つと伝わるなど地域の主要道としても長く使用されていたらしい。増田館の設置もこれを踏まえたものと考えられ、南北朝の騒乱から戦国期の軍陣の往来時に、台地下の村岡宿（荒川渡河点）に駐留した際の陣城として設置されたことが契機であろうと思う。二重方形館を呈する館の構造は陣城とし一時期の滞留に相応しい。文殊寺の成立は文明18年（1487）とされ、その前身と伝わる能満寺跡は第二次大戦時に陸軍小原飛行場滑走路に造成されてしまったが、能満寺、未尊堂、宮脇・諫訪脇、元境内といった由緒を伝える小字地名が隣り合っている。4次までの調査によると遺跡内の北側では増田館を構成する土壘と堀がおよそ東西400m×南北300mの規模を持つようだ。3次4次の発掘調査地点は館堀の南西隅の外側になり、古代以来の住居立地に適した台地南緩斜面にあたる。



第33図 元境内遺跡第4次遺構配置図 (1/100)



第34図 元境内遺跡第4次第25号住居実測図 (1/60)、カマド実測図 (1/30)

第26号住居
土層説明(A-A')

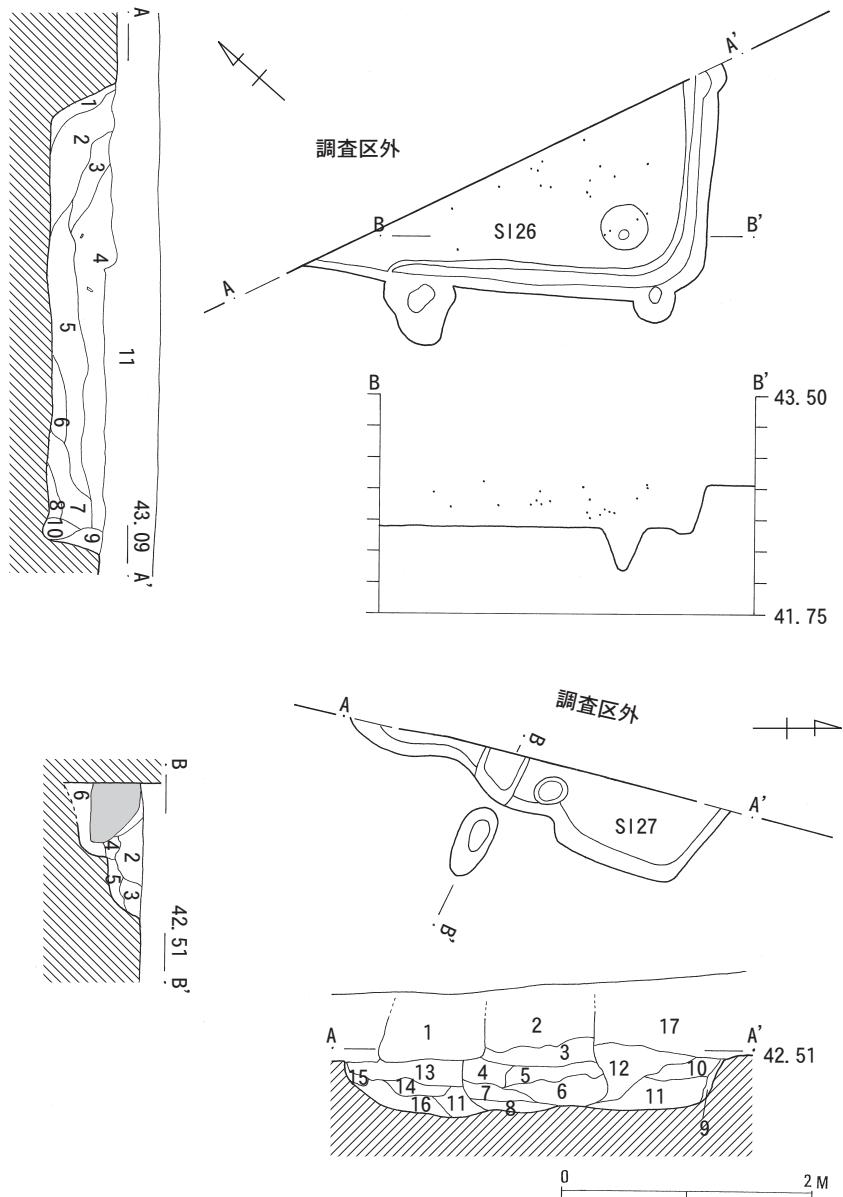
- 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強 ローム少量、炭化粒、焼土微量含 粒子やや細
- 茶褐色土 しまり・粘性やや強 ローム、ロームブロック(直径1~3cm)少量、焼土、炭化粒微量含 粒子やや粗
- 明茶褐色土 しまり・粘性やや強 ローム、焼土、炭化粒微量含 粒子粗
- 茶褐色土 しまり・粘性やや強 ローム、焼土、炭化粒微量含 粒子やや粗
- 暗茶褐色土 しまり・粘性やや強 ローム、焼土、炭化粒微量含 粒子やや粗
- 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強 ローム、ロームブロック(直径1~2cm)少量、焼土、炭化粒微量含 粒子やや粗
- 暗黄褐色土 しまり・粘性やや強 ロームやや多含 烧土、炭化粒微量含 粒子やや粗
- 茶褐色土 しまり・粘性やや強 ローム、焼土、炭化粒微量含 粒子粗
- 黄褐色土 しまり・粘性やや強 ローム粒多含 粒子やや粗
- 明茶褐色土 しまり・粘性やや強 ロームやや多、焼土、炭化粒微量含 粒子やや粗
- 表土

第27号住居
土層説明(A-A')

- 褐色土 しまり強 粘性やや弱 烧土、炭化粒微量含 粒子粗
- 茶褐色土 しまり強 粘性やや弱 烧土、亜円礫(直径1cm以下)少量含 粒子粗
- 暗黄褐色土 しまり強 粘性やや弱 ローム粒少量、焼土微量含 粒子粗
- 明褐色土 しまり強 粘性やや弱 ローム粒、ロームブロック(直径1cm以下)やや多含 粒子粗
- 黒褐色土 しまり強 粘性やや強 ローム粒、ロームブロック(直径1cm以下)少量、焼土微量含 粒子やや粗
- 暗黄褐色土 しまり強 粘性やや強 ローム粒、ロームブロック(直径1cm以下)多含 粒子粗
- 褐色土 しまり強 粘性やや強 ローム粒少量、焼土微量含 粒子粗
- 黒褐色土 しまり強 粘性やや強 ローム粒、焼土微量含 粒子やや粗
- 黄褐色土 しまり強 粘性やや強 ローム粒多含 粒子やや細
- 褐色土 しまり強 粘性やや強 ローム粒微量含 粒子やや粗
- 褐色土 しまり強 粘性やや強 ローム粒少量、焼土微量含 粒子やや粗
- 茶褐色土 しまり強 粘性やや強 ローム、焼土微量含 粒子やや粗
- 明褐色土 しまり強 粘性やや強 ローム、焼土微量含 粒子やや粗
- 褐色土 しまり強 粘性やや強 ローム粒微量含 粒子やや粗
- 暗黄褐色土 しまり強 粘性やや強 ローム多含 粒子やや粗
- 暗褐色土 しまり強 粘性やや強 ローム粒、焼土微量含 粒子やや粗
- 耕作土

第27号住居
土層説明(B-B')

- 暗茶褐色土 しまり強 粘性弱 烧土、炭化粒微量含 粒子やや粗
- 茶褐色土 しまり強 粘性やや強 烧土少量、ローム粒、炭化粒微量含 粒子やや粗
- 褐色土 しまり強 粘性やや強 烧土、炭化粒少量含 粒子やや粗
- 黄褐色土 しまり強 粘性やや強 ローム粒多、焼土少量含 粒子やや粗
- 茶褐色土 しまり強 粘性やや強 烧土、炭化粒微量含 粒子やや粗
- 茶褐色土 しまり強 粘性やや強 烧土、炭化粒少量含 粒子やや粗

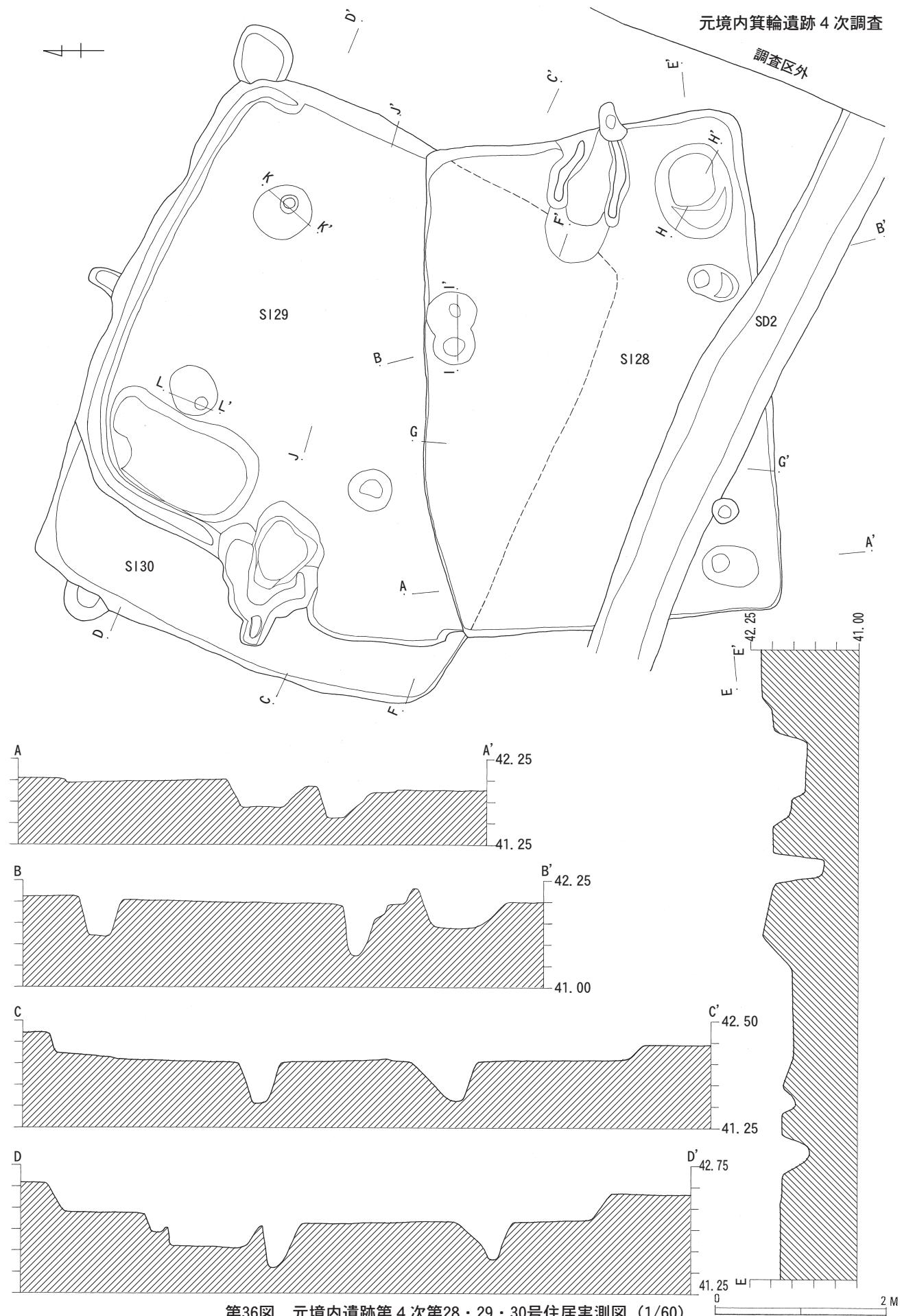


第35図 元境内遺跡第4次第26・27号住居実測図 (1/60)

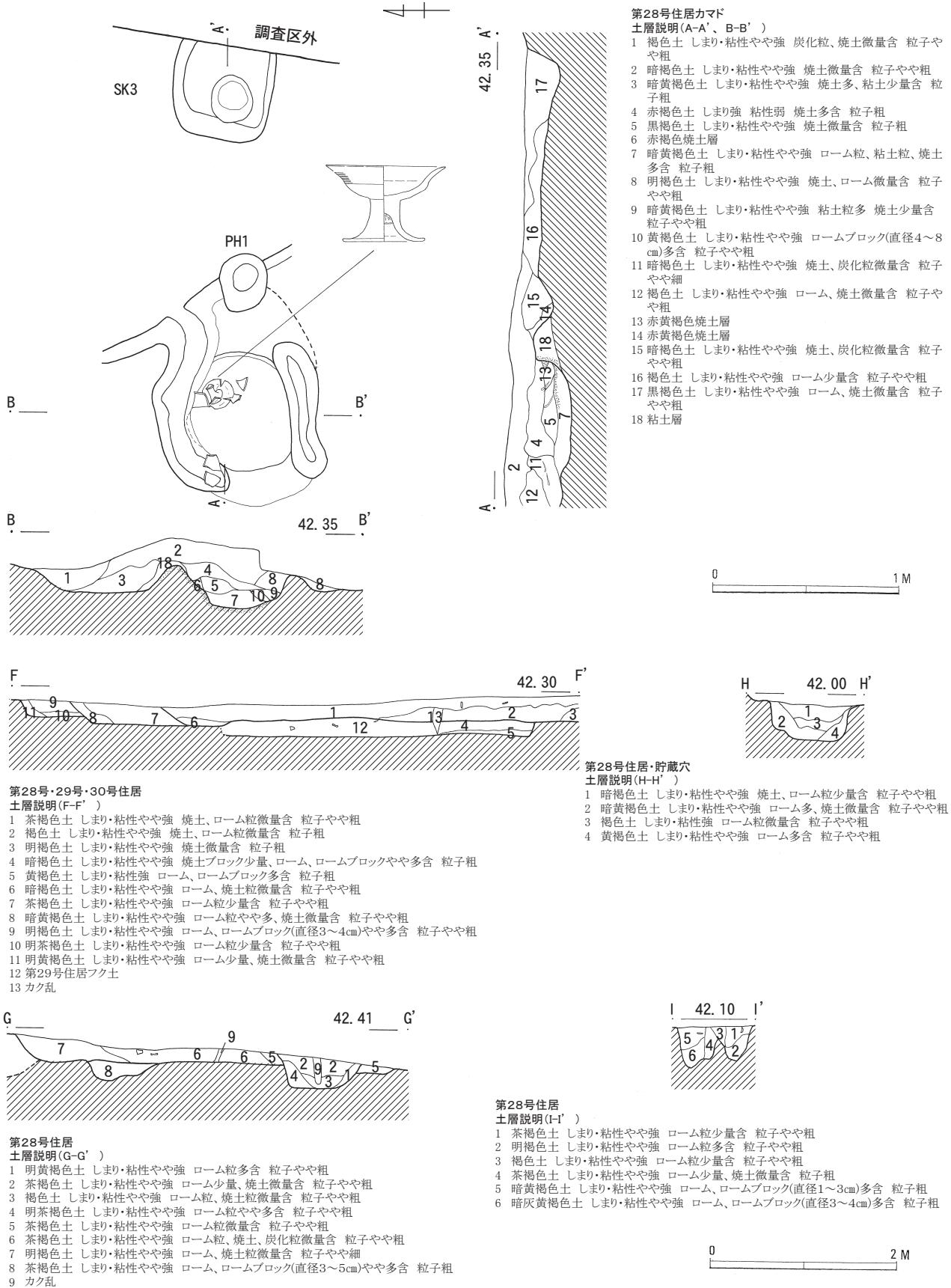
調査の方法 調査地点は標高46~47mの緩斜面で、茶褐色系のローム土混じりの耕作土を除去した後、遺構の掘り下げを行った。確認された遺構は竪穴住居跡(S I 25~30)・溝(S D2)・土壙(S K1~6)のほかに柱穴状の小穴が認められた。遺構の発掘、実測完了後に地震跡と推定された土質変異分部の掘鑿調査を行なった。遺構の実測図化はトータルステーションにて行なっている。

報告書作成作業は、旧町時代に水洗・注記を済ませてあったので、実測遺物の選別後図化作業を進め組版報告原稿の執筆・遺物の写真撮影を進めた。

元境内遺跡第4次調査



第36図 元境内遺跡第4次第28・29・30号住居実測図 (1/60)



第37図 元境内遺跡第4次第28号住居 (1/60)、カマド (1/30) 実測図

3 検出された遺構と遺物

調査地点の概要を第33図元境内遺跡第4次発掘調査地点図で整理し説明する。堅穴住居跡はいずれも古墳時代後期のもので方形を呈する。25号住居跡は北側の一部、26号住居跡は南隅部、27号住居跡は東側の一部を確認したが、主体は調査区外である。28～32号住居跡は互いに重複しており、32・30・31→29→28号の順に造られている。調査区北隅に検出された浅い方形掘り込みも住居の可能性を想定していたようであるが決め手がない。土壙は円形（SK1）・長楕円形（SK6）などが確認されている。溝は斜面と並行して掘られている。

第25号住居跡 S I 25 （第33図・第34図） 北西隅から西壁・北壁を主体とする北半部分を調査している。北壁中央付近にカマドを備え、煙道先を2号溝に切られる。確認される規模は2.18×1.56mとなり、主軸はカマドを通るものとしてN-29°-Eの方位をもつ。壁の掘り込みは北壁で35cm残っており、壁の傾きは西壁で60°前後である。床は直床でほぼ平坦で、柱穴2か所とカマド右脇の貯蔵穴があった。貯蔵穴は不整楕円形で76×72cm、深さ28cmを測る。遺物は土器が主体で覆土の上中層からの出土が多い。床近くではカマド、貯蔵穴付近の出土がまとまっている。

本住居は南側が斜面下位となるため、床面積を広く取ろうとすると斜面上位の掘り込みは自然深くなる。そのため北壁に造られたカマドは保存状態がよく、燃焼部から煙道部が崩壊せずに残っていた。

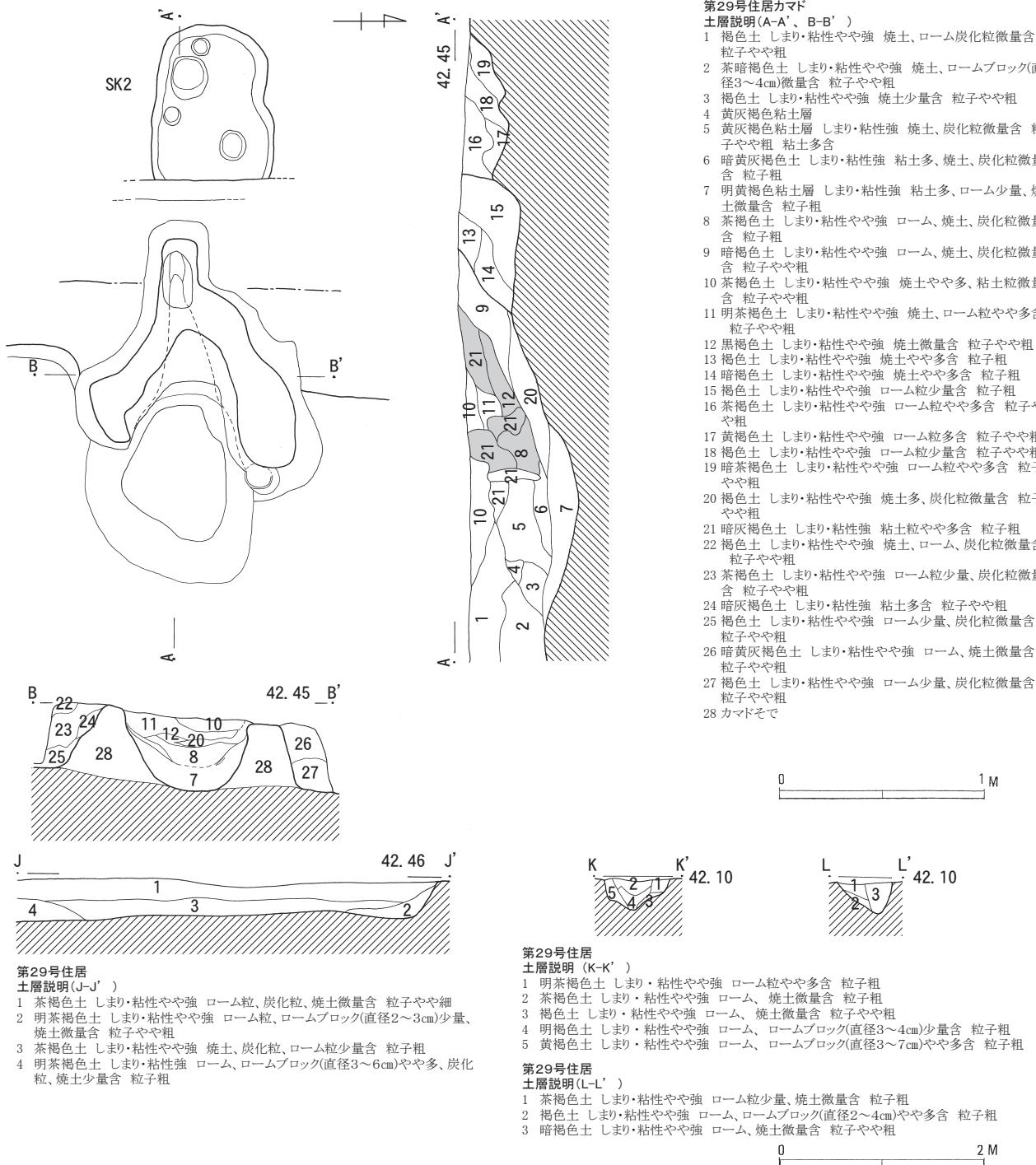
カマドは燃焼部を住居内に位置させ、粘土で構築している。燃焼部と煙道は住居北壁ラインで区分し、約80°立ち上がった後に15°程の傾きをもった煙道へ移行する。焚口部は壁より1.2mの長さがあり、幅は0.8mを測る。

出土遺物 （第43図 第5表） 碎片が多く、実測可能の遺物は図示した21個体の土師器・須恵器である。1～4は壺型土器で口縁部が高く直立し深いもの、6・7は口縁部が内反する身の深い碗型土器である。6はヘラの当たり痕が2列に十回程度繰り返されており、器面のヘラケズリ調整とは別の意図でなされたものようだ。9～12は高壺型土器で壺部は碗上に緩やかに外反し、脚部は短く口縁の半分ほどの広がりを持つ。14はやや胴長の壺型土器で、15は接合しないがその頸部に近い。20はカマドに架けられた長胴甕で内外面に加熱・煮沸の痕跡が明瞭である。器肉が厚くカマドで専ら使用されたのであろう。これらの土器は古墳時代後期後半の様相を示している。

第26号住居跡 S I 26 （第33図・第35図） 南東隅部を調査している。大半は調査区北側になる。方形を呈し、壁に沿いの床には壁溝がある。確認された規模は1.64×0.9mとなり、主軸は東壁を通るものとしてN-49°-Eの方位をもつ。壁の掘り込みは東壁で30cm残っており、壁の傾きは南壁で60°前後である。床は直床でほぼ平坦で、南東隅に小穴がある。遺物は少量の土師器と須恵器で覆土の上中層からの出土である。

出土遺物 （第44図 第6表） 遺物は図示した9個体の土師器・須恵器である。1～2は壺型土器で1は口縁部が外反する。3は口縁の直立気味に外反する大形の壺。8は軟質灰白色をする須恵器平瓶。7は肩部に自然釉を被る須恵器長頸瓶である。これらの土器は古墳時代終末段階の様相を示している。

第27号住居跡 S I 27 （第33図・第35図） 東壁の一部を調査している。後世の攪乱が加わり壁ラインが乱れるようである。東壁の中央にカマドが残る。確認される規模は2.9×0.8mとなり、カマドを通る



第38図 元境内遺跡第4次第29号住居 (1/60) カマド実測図 (1/30)

主軸はN-119°-Eの方位をもつ。壁の掘り込みは北壁で38cm残っており、壁の傾きは西壁で70°前後である。床は直床だが攪乱のためか凹凸があった。

カマドは燃焼部の掘り込みが60×41cm確認され、煙道の一部が掘り抜きで遺存していた。袖は作り付けで燃焼部を住居内に位置させ粘土を使って構築している。燃焼部と煙道は住居北壁ラインで区分し、約80°立ち上がった後に一段の底面をもって煙道へ移行する。

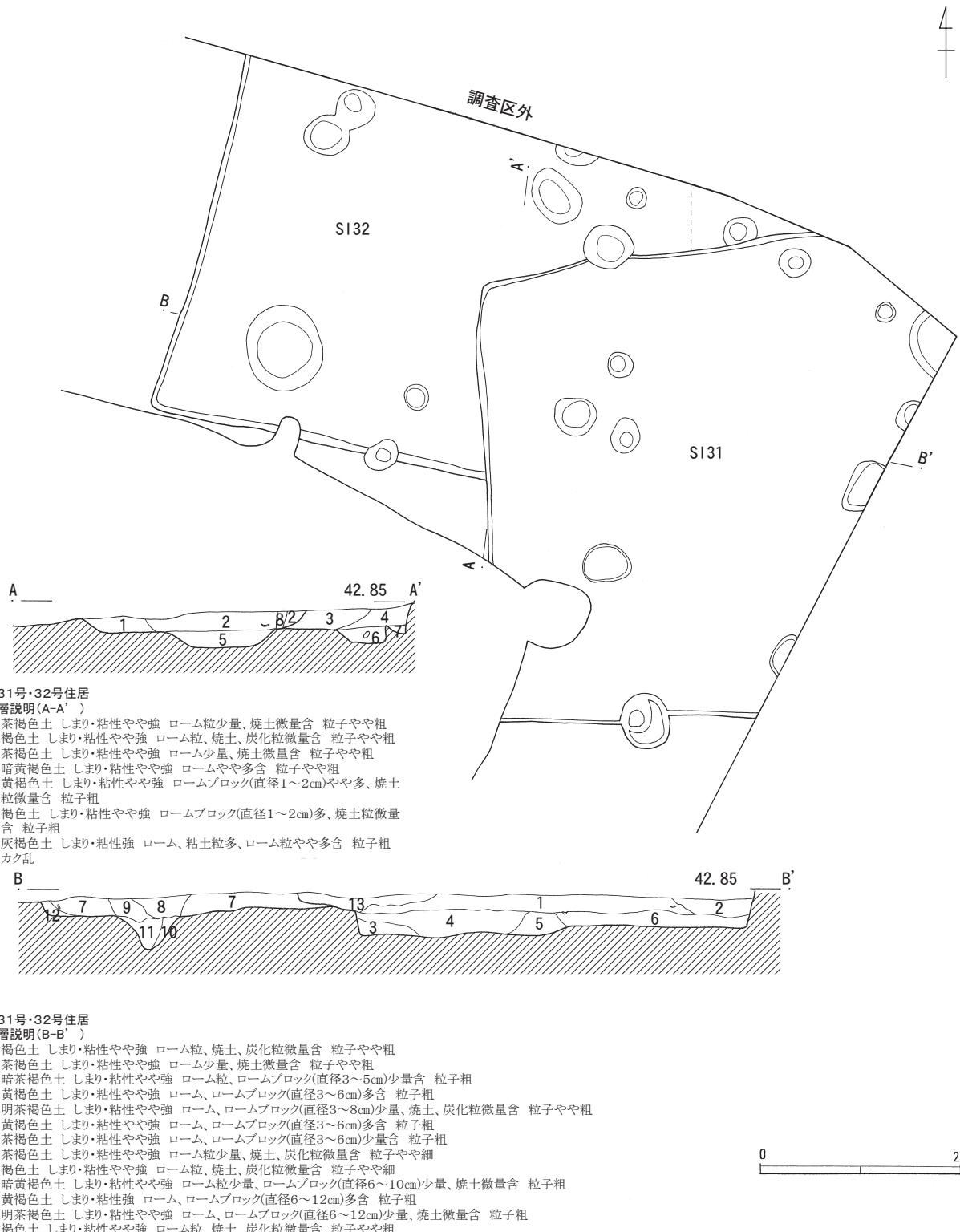
出土遺物（第44図 第7表） 1の坏型土器は口径10cmと小形で口縁が外反する。3の長胴型甕は口縁が緩やかに外反する。これらの土器は古墳時代後半～終末段階の様相を示している。

第28号住居跡 S I 2 8 （第33図・第36図・第37図） 住居全体を調査しているが、北壁が29号住居と重なっている29号住居の南東隅を切って造られる。平面形態は東西に細長い長方形で、東壁にカマドを配置している。確認される規模は 5.86×3.76 mとなり、主軸はカマドを通るものとしてN-86°-Eの方位をもつ。本住居は南側が斜面下位となるため、床面積を広く取ろうとすると床を深く掘り下げ斜面上位側を拡張することが必要だが、そうした場合斜面上位の掘り込みを深くするため掘鑿等の作業量は多くなる。これを避けるためには本住居のように斜面に並行して東西方向に床を作り出すことが容易と考えられる。実際29号住居の床は28号より下位に確認されている。壁の掘り込みは北壁で22cm、南壁は8cm残っており、壁の傾きは西壁で60°前後である(G-G')。床は直床でほぼ平坦で、柱穴3か所とカマド右脇の貯蔵穴があった。貯蔵穴は不整楕円形で 117×92 cm、深さ45cmを測る。遺物は土器が主体で覆土下、床上の出土であった。また、カマド内には高坏が逆位で燃焼部に置かれており、支脚台として使用されたものと認識されている。柱穴は南壁側に3個検出されたが掘り方(E-E')から見て南西隅と貯蔵穴前の穴が主柱穴に相当する。しかし、北壁側では確認されていない。

カマドは東壁の中央部分に位置するが、軸線が通常壁に対して直行せず壁に対して18°右に振っている。これはカマド右側に位置する貯蔵穴を避けているように見える。カマド本体は燃焼部を住居内に位置させ、粘土で構築しているが、袖の下位は地山を掘り残していた。燃焼部は 60×70 cmを測り、煙道の始まりは住居内に位置し、ほぼ直角に立ち上がった後に煙道へ移行している。焚口部は壁より1.2mの長さがあり、幅は0.8mを測る。

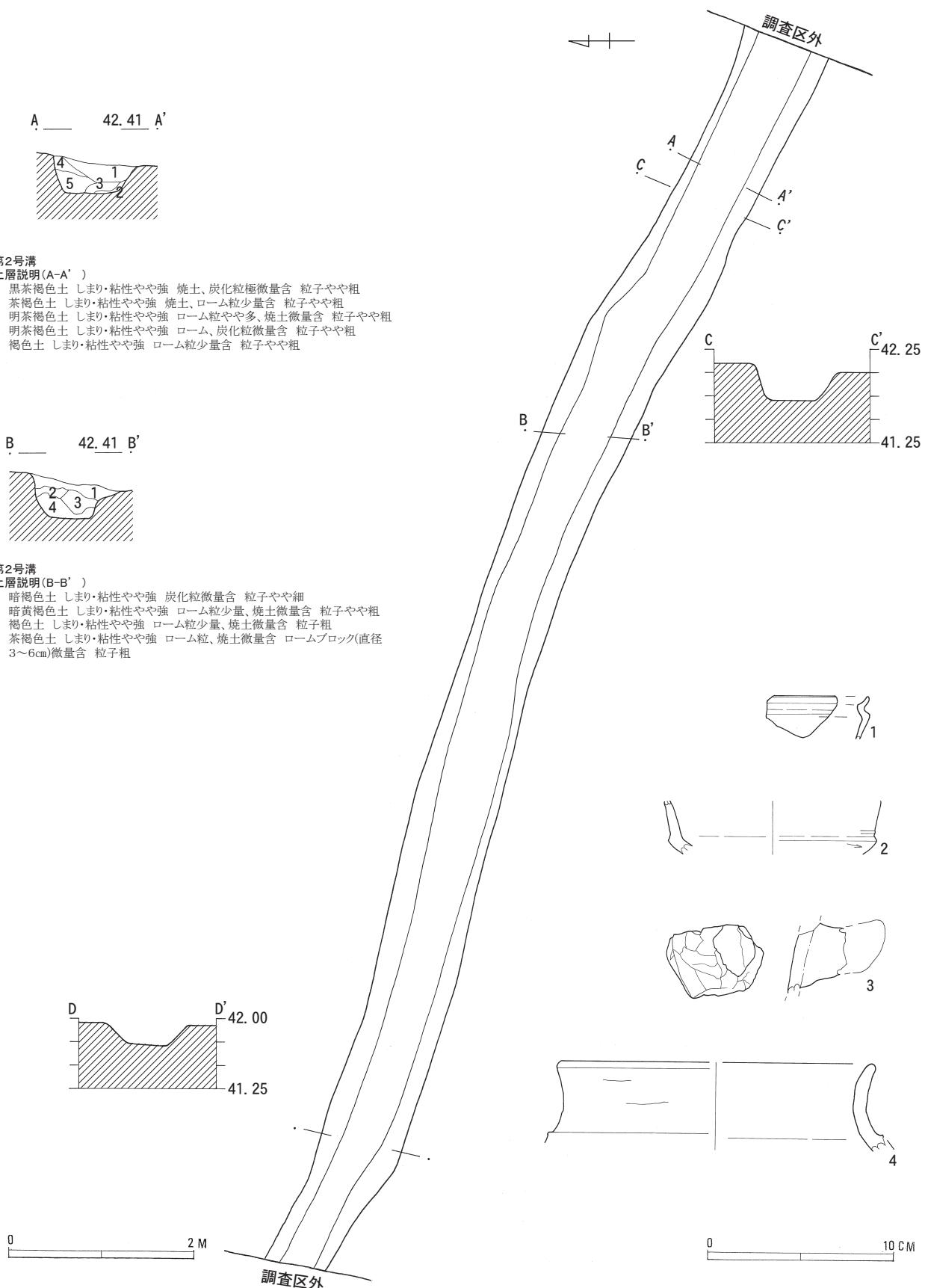
出土遺物（第45～47図 第8表） 実測掲載遺物は図示した41個体の土師器・須恵器である。1～12は坏型土器で口縁部が高く直立し深いものが主体である。8・9は口縁部が短く立ち上がるもの。12は口径が14cmを超える大形品である。13～17は高坏型土器、13はカマド内に支脚台として使用されていたものである。この高坏は25住居の高坏よりやや浅くやや時期が下るものであろう。18は大振りの碗。20は脚が付く鉢。19～22は鉢型土器。23～25は壺型土器、26・27はやや胴の張る甕型土器。31・33は底部を大きく開放する甕型土器。40・41は甕型土器の把手部分。35～37は長胴型甕。須恵器は甕片が確認されている。土師器坏型土器は口径が13cm代にまとまっている。これらの土器は古墳時代後期の後半の土器様相をしている。

第29号住居跡 S I 2 9 （第33図・第36図・第38図） 住居全体を調査しているが、南隅部を28号住居跡に切られている。平面形態はやや東西に細長い長方形で、西壁にカマドを配置している。カマド左側の壁がやや膨らむ。確認される規模は 5.41×5.12 mとなり、主軸はカマドを通るものとしてN-64°-Wの方位をもつ。本住居は28号住居跡カマドを通る住居形態を確認することを意図していたため、土層確認もここに設定された。壁の掘り込みは北壁で42cm、東壁は31cm残っており、壁の傾きは西壁で60°前後である。北側斜面からの湿気を避けるためであろう壁溝が巡らされている。床は直床でほぼ平坦で、柱穴4か所とカマド右脇の貯蔵穴があった。柱穴は住居形態に合わせて四隅に配置される。柱間は2.1～2.2mを測る。貯蔵穴は不整の長楕円形で 187×116 cm、深さ25cmを測る。遺物は土器が主体で覆土下、床上の出土とされる。

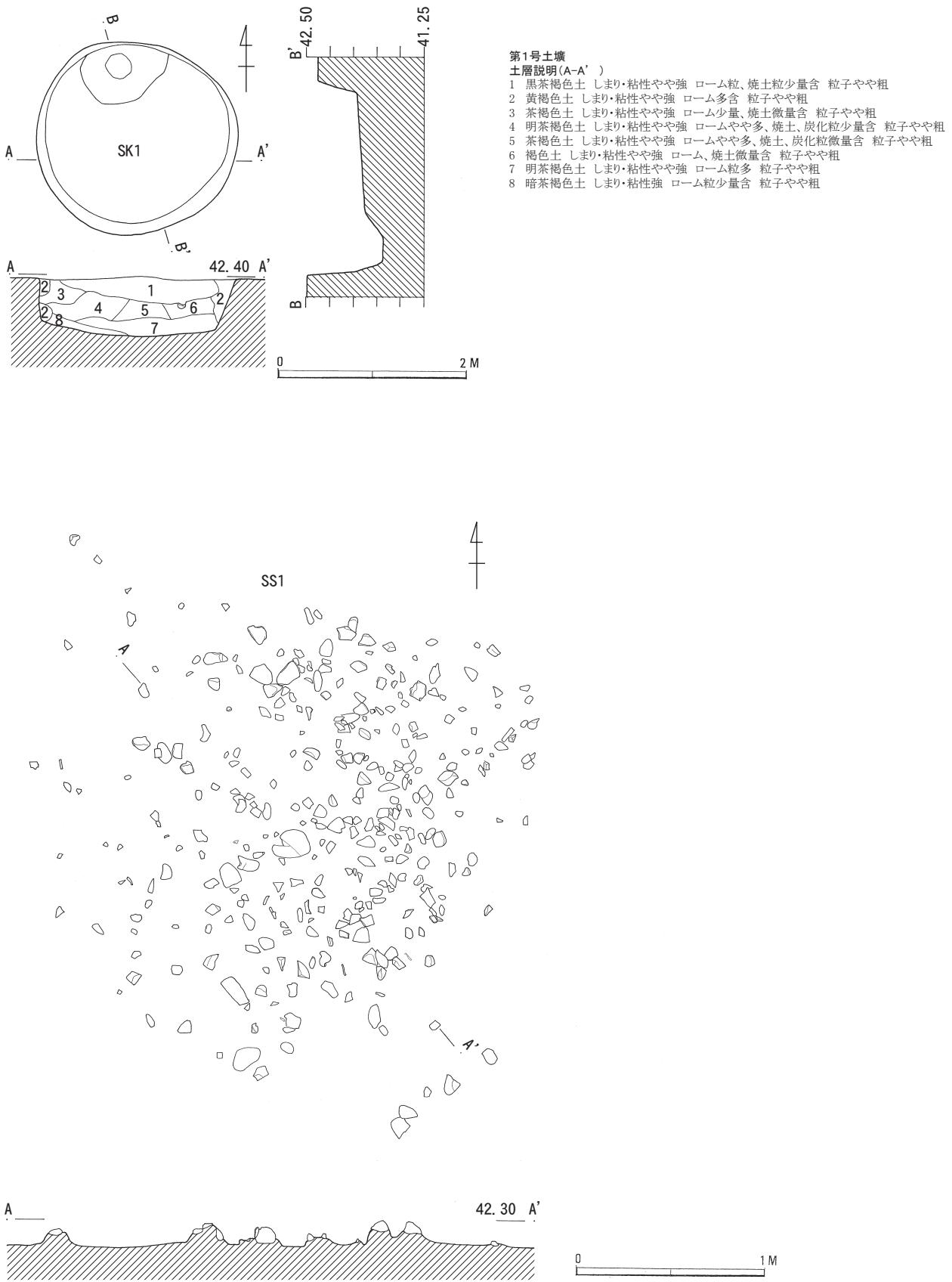


第39図 元境内遺跡第4次第31・32号住居実測図 (1/60)

カマドは西壁の中央部分に位置し、燃焼部と煙道部が遺存していた。カマド本体は30号住居の埋土上にあり、燃焼部を29号住居内に位置させている。粘土で構築された燃焼部や煙道派は良く残り、煙道部の一部は崩壊していなかった。右袖部に埋め込まれた長胴甕の位置までが燃焼部で、60×60cmを測る。煙道へは緩やかに15°ほどで移行する。焚口部は壁より1.3mの長さがあり、幅は0.8mを測る。



第40図 元境内遺跡第4次第2号溝実測図(1/60)・出土遺物(1/3)



第41図 元境内遺跡第4次第1号土壤(1/60)・第1号集石(1/30)実測図

出土遺物（第48～49図 第9表） 実測掲載遺物は図示した33個体の土師器・須恵器等である。1～7・9～12は壺型土器で、口縁が短く立ち上がりやや浅いものが主体である。11・12は放射状の暗文がある。8・13は器台としたが小型の高壺としても良いものであり、脚内面と壺内面の調整がほぼ同一である。18は断面方形の鉄製品であるが、鉄鏃などの茎と思われる。19は滑石製の紡錘車で断面台形を呈する。20～24は胴の張らない長胴甕であろう。24は甕の可能性もある。28は砥石、上部に貫通孔があり提げ砥石でもある。29～32は須恵器破片。これらの土器は古墳時代後期の土器様相をしている。

第30号住居跡 S I 3 0 （第33図・第36図） 住居全体を調査しているが、29号住居跡に大部分が重なり破壊されているので、西壁の一部分を残しているだけである。おそらく南北壁を踏襲し、東壁側を拡張しているものと思われる。カマドの位置は不明だが東側であろう。確認される規模は4.40×4.70mとなり、主軸は推定東壁のカマドを通るものとするとN-126°-Eの方位を示すだろう。壁の掘り込みは北壁で36cm、西壁は31cm残っており、壁の傾きは西壁で60°前後である。残存する床は直床で平坦である。遺物は土器細片がある。

出土遺物（第49図 第10表） 33は土製支脚である。

第31号住居跡 S I 3 1 （第33図・第39図） 住居東壁部分を残し大半を調査しているが、南西隅部を29号住居跡に切られている。平面形態はやや東壁の長い方形で、カマドも東壁側に想定される。確認される規模は5.41×5.12mとなり、主軸はカマドを通るものとしてN-80°-E程の方位をもつだろう。壁の掘り込みは北壁で38cm、西壁は24cm残っており、壁の傾きは西壁で80°前後である。床は直床でほぼ平坦で、柱穴11か所確認された。いくつかは主柱穴であったと思われる。遺物は土器が主体で覆土下、床上の出土とされる。

出土遺物（第49図 第11表） 実測掲載遺物は図示した20個体の土師器・須恵器等である。1～5は古墳時代前期の刷毛目を残す土師器片である。この時期の遺構は本調査区では見つかっていない。6～10は壺型土器で、口縁が短く外反するもので口径は12cm前後である。13は大形の土師器甕型土器。

須恵器は14蓋、16・19、長頸瓶、18横瓶などの細片がある。20は棒状の自然礫で中位上半の18cmが被熱赤変している。カマド内で支脚台として使用されたものと考えられる。これらの土器は古墳時代後期後半の土器様相をしている。

第32号住居跡—S I 3 2 （第33図・第39図） 住居東北壁部分を残し大半を調査しているが、東壁部分は31号住居跡に切られている。平面形態は東壁がはっきりしないが方形をしていると考えられる。カマド位置は不明である。確認される規模は3.61×3.22mとなり、主軸は西壁を通ると仮定し、N-18°-E程の方位としておく。壁の掘り込みは西壁で18cm、南壁は14cm残っており、壁の傾きは西壁で60°前後である。床は直床でほぼ平坦で、柱穴9か所確認された。北壁と西壁側の小穴は主柱穴であろう。柱間はそれぞれ2.1m前後を測る。

出土遺物（第50図 第12表） 実測掲載遺物は図示した14個体の土師器である。1は体部外面に赤彩の残る高壺型土器。壺部が大きく開き、脚部は膨らむ。2の壺型土器は15cmを超える大形。3は口唇部を短くつまみ出すいわゆる比企型の壺で赤彩が良く残っている。9は直口壺、11も肩の張る直口壺。

10～12は胴部の張る長胴甕型土器。第51図1は砲弾型をする土製支脚である。これらの土器は古墳時代後期の土器様相をしている。

第2号溝 S D 2 (第33図・第40図) 標高42m付近に検出された。幅80～90cm、長さ14mの逆台形状をしている。溝からは古墳時代の土師器や陶器の細片が含まれるが、掘削時期は不明である。溝底部の標高はほとんど同一なので、近世以降の土地境の溝であるかもしれない。

第1号土壙 S K 1 (第41図) 直径約1.08mの円形を呈する。約30cmの深さがある。平底であるが一部深掘りとなっている。本土壙からは鉄滓が一点出土している。碗形滓(第51図8)でほぼ2分の1に分割されている。時期の特定は難しいが、古代以前のものと推定される。

第1号集石 S S 1 (第41図) 南側を第2号溝に切られるが、6×5m程の範囲に河原石とその破碎礫が散漫に分布していた。とくに掘り込み遺構を持たない。性格・時期とも不明。

調査区出土の一括遺物 (第51図)

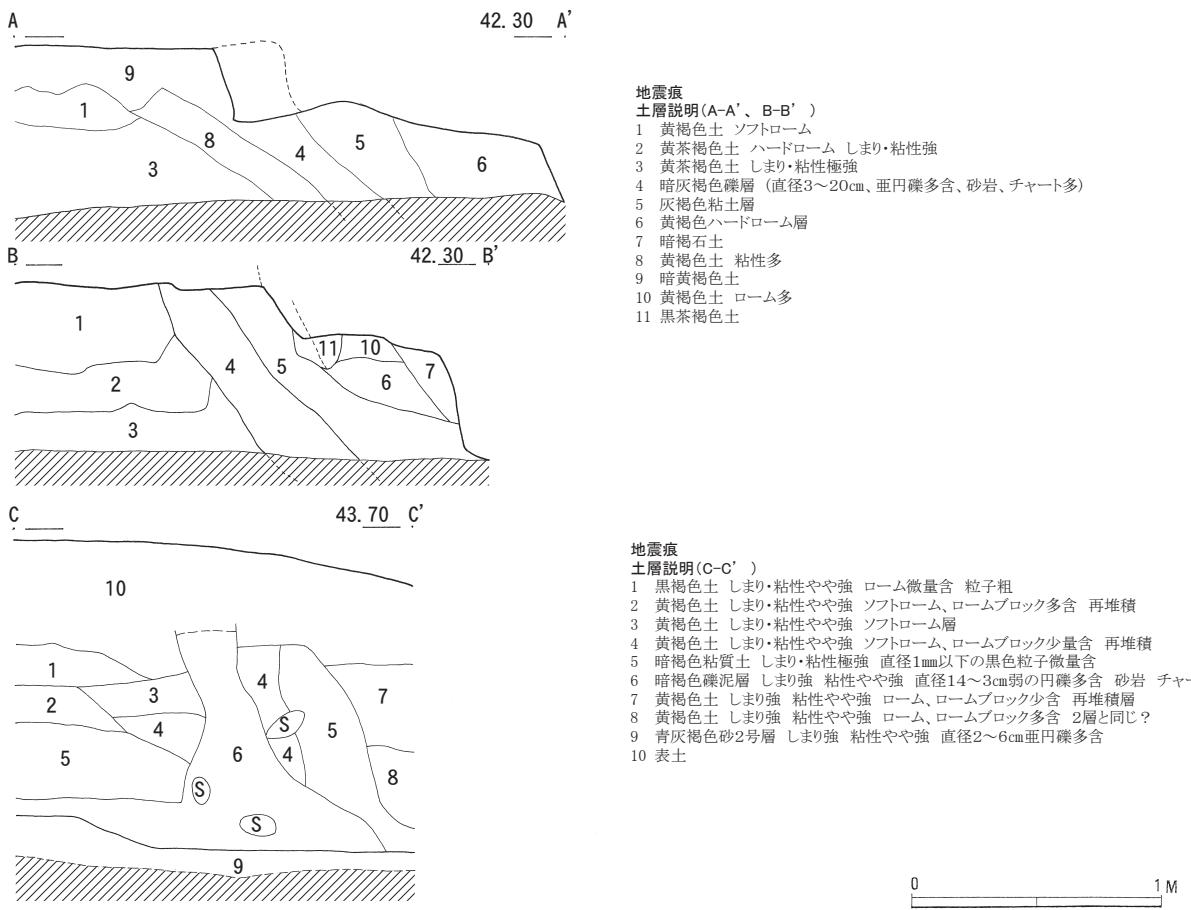
縄文時代の石器である。磨石が4点。13は黒曜石の剥片で使用痕があり、搔器として使用されたものか。14は二等辺三角形の整った石鎌。黒曜石製。長さ2.8cm、茎を作り出している。他に、土錘4本が出土している。

元境内遺跡検出の地震痕跡 (第33図 第42図 写真図版8)

元境内遺跡で確認された地震痕跡は、地震振動により地下の脆弱な地質部分が液状化し上部の地層を突き破って上層に噴出したことを示す痕跡が地層に残されたものである。低地部などでは液状化現象としてよく知られ、多量の水とともに土砂が噴き上げられることが知られる。このような液状化現象は、沖積地などの低地や軟弱地盤での発生がよく知られている。発掘調査の頻度が多い低地部の調査でも発見されることがある、遺跡の年代によっては地震の年代を推定することも可能となっている。国指定史跡となっている地震痕跡では福岡県久留米市で確認されている水縄断層系が天武天皇7年(679)に発生した大地震で、地域に大被害を起こしたことが記録に残されている。この史実が遺跡から確認される貴重な実例である。

元境内遺跡の地震痕跡は台地部での液状化現象を示すもので、そのメカニズムは噴砂と同様下部の地層が液状化し上部の地層を突き破り噴き上げたものである。但し、下層の礫を主に含むことから「噴礫」という。

江南台地の基本的な地質と層位は多くの報告書で述べているが、表土層以下・大里ローム層・新期ローム層・チョコ帯・灰白粘土層(川本粘土層)・段丘礫層・新第三紀層(楊井層・土塩層)となる。基盤となる新代3紀層までは台地中央部で30mの層厚を持つとされるが台地縁辺部などでは層厚に多少の差があるようである。この台地域には江南断層と呼ばれる活断層の存在が知られており、深谷市(旧川本町)武川付近より熊谷市(旧江南町)千代地域に観察され、断層落差7mで、N-33°～55°-Wの走行方位をするとされる。この方向には北へは櫛挽断層が南には大谷断層が走ることが知られる。また、これらの断層には雁行する多くの小断層が知られており、荒川沿いに走る荒川断層もある。また、1994年に発掘された熊谷市(旧江南町)野原の丸山遺跡からN-70°-Wの走行をもつ逆断層が発見された。この断層は



第42図 元境内遺跡第4次検出地震痕跡土層断面図 (1/30)

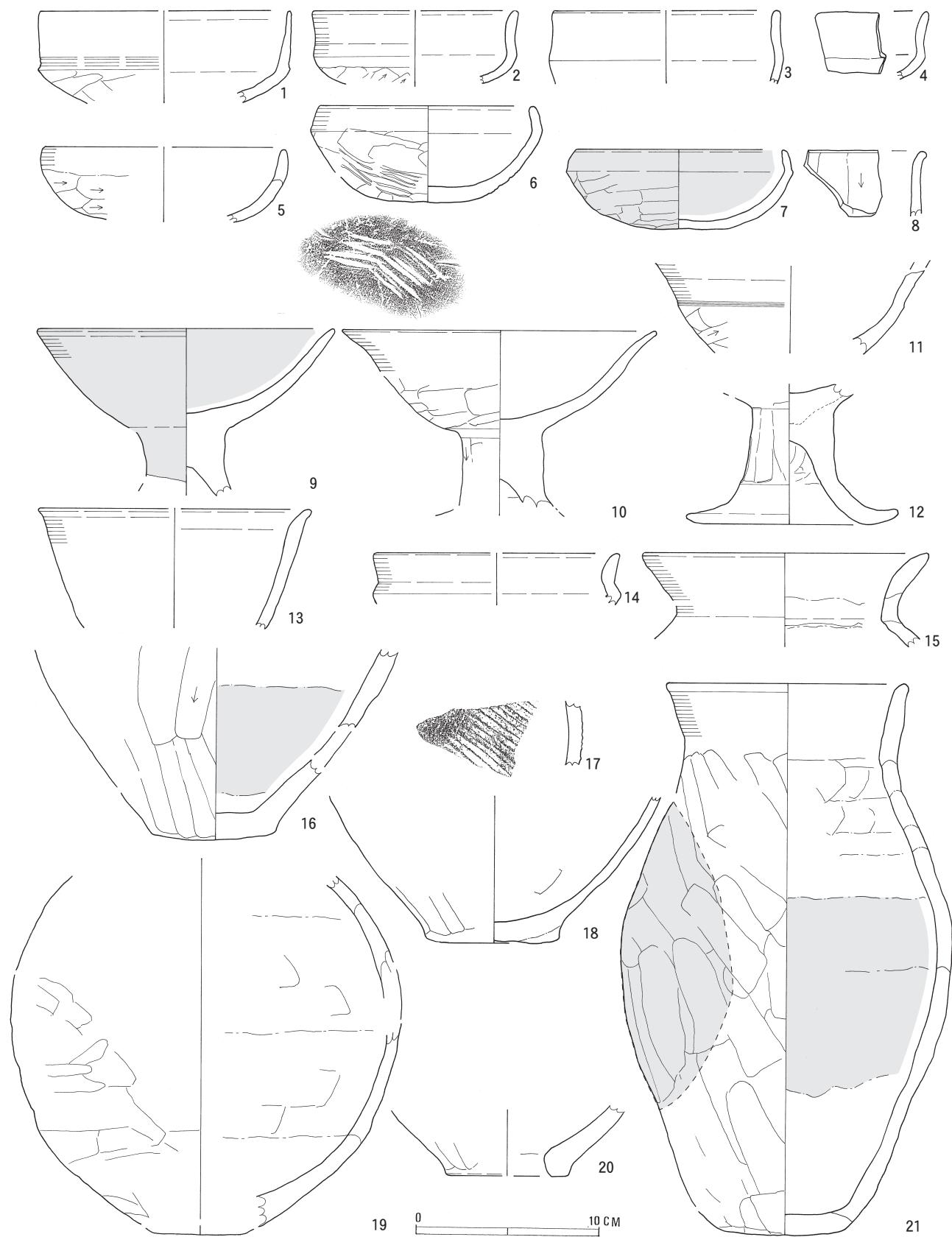
地上に現れ、その落差は約3mを測る。この丸山断層は江南断層と大谷断層の間を埋める形で発見されたもので、基本的にこれらの断層を繋ぐ一連の断層である。また、これらの主断層に並行する断層がところどころに予想されるが、断層以外にも液状化等の地震痕跡を残す場所もこれらの断層上や平行線上に分布していることも想定される。

元境内遺跡での発見もこれに属する。元境内遺跡では遺構確認時から確認面に礫が噴出していることが注意されたが、風倒木のような地質捻転による下層土層の露出とは異なっていた。第33図はいわば地割に沿い礫が噴出している部分を示す。A・B・C 3箇所で土層確認している。土層図で見るよう下位より上位に向かう層がみられ、いずれも下層に堆積する礫を含んでいる。これが噴礫である。噴礫の発見される走行はN-33°-Wで江南断層と並行するといつてよい。元境内地点では断層は確認されていないので、約0.8kmと程近い丸山断層の生起時に同時に発現したとも考えられる。地上に3mの段差を生じさせる地震エネルギーはマグニチュード8以上ともされることから、このときの発現の可能性が想定される。

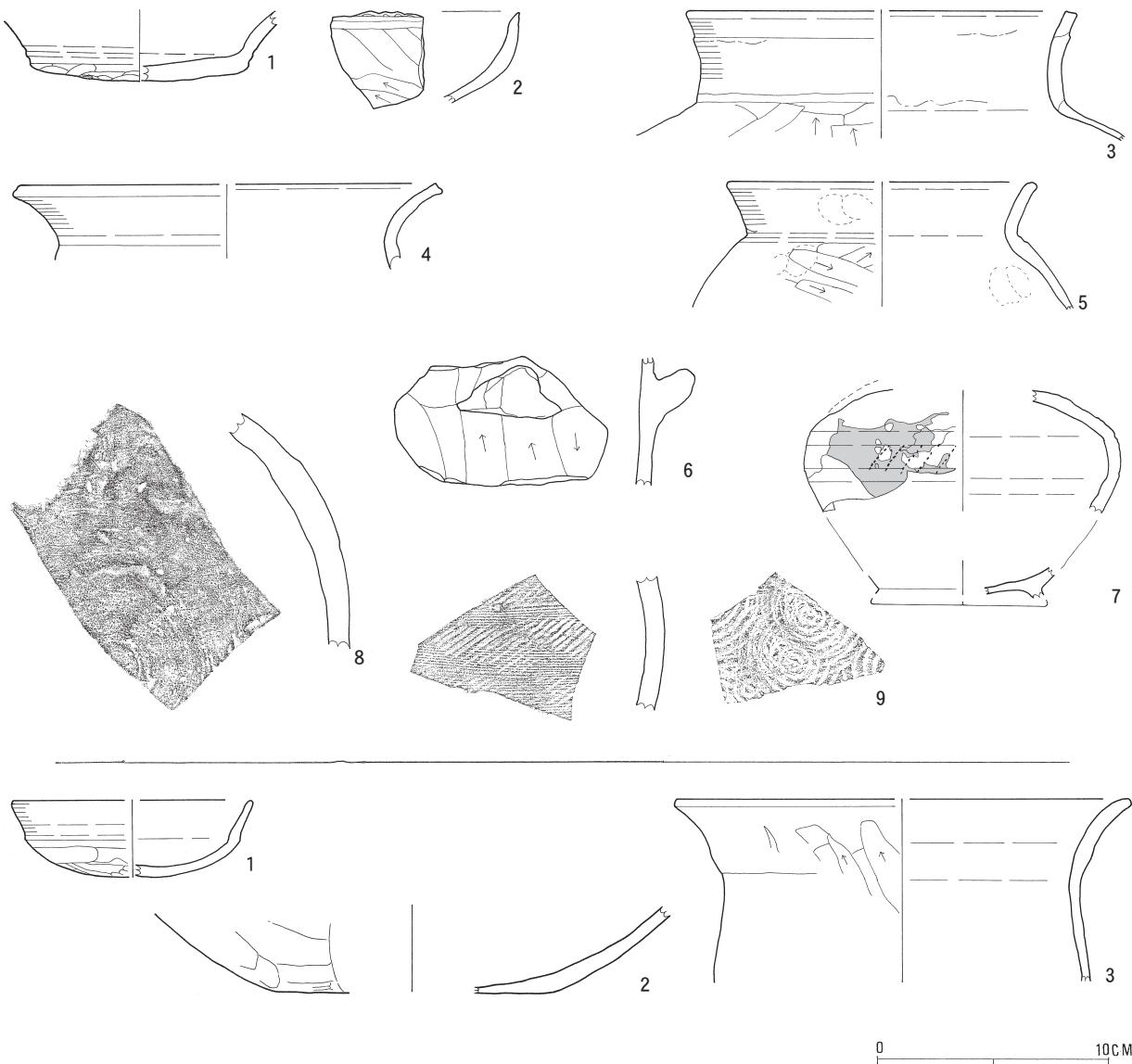
なお、元境内遺跡では住居跡などの遺構を破壊しての地震痕跡ではなく、遺構の築造前に地震が起こったと考えている。その後の調査で丸山断層は縄文時代後期から晩期の発生と推定されるので、縄文時代の遺跡の発掘から確認される機会が出てくるだろう。

註 水縄断層系 『日本書紀』天武天皇7年12月「是の月に、筑紫国、大きに地動る、地裂くること広き二丈 長さ三千余丈 百姓の舍屋 村毎に多く仆れ壞れたり、」とみえる。日本最古の地震被害の記録である。水縄断層系は久留米市の水縄山地に沿って約26km続く活断層である。

註 丸山断層 『丸山遺跡』江南町文化財調査報告第11集 1996



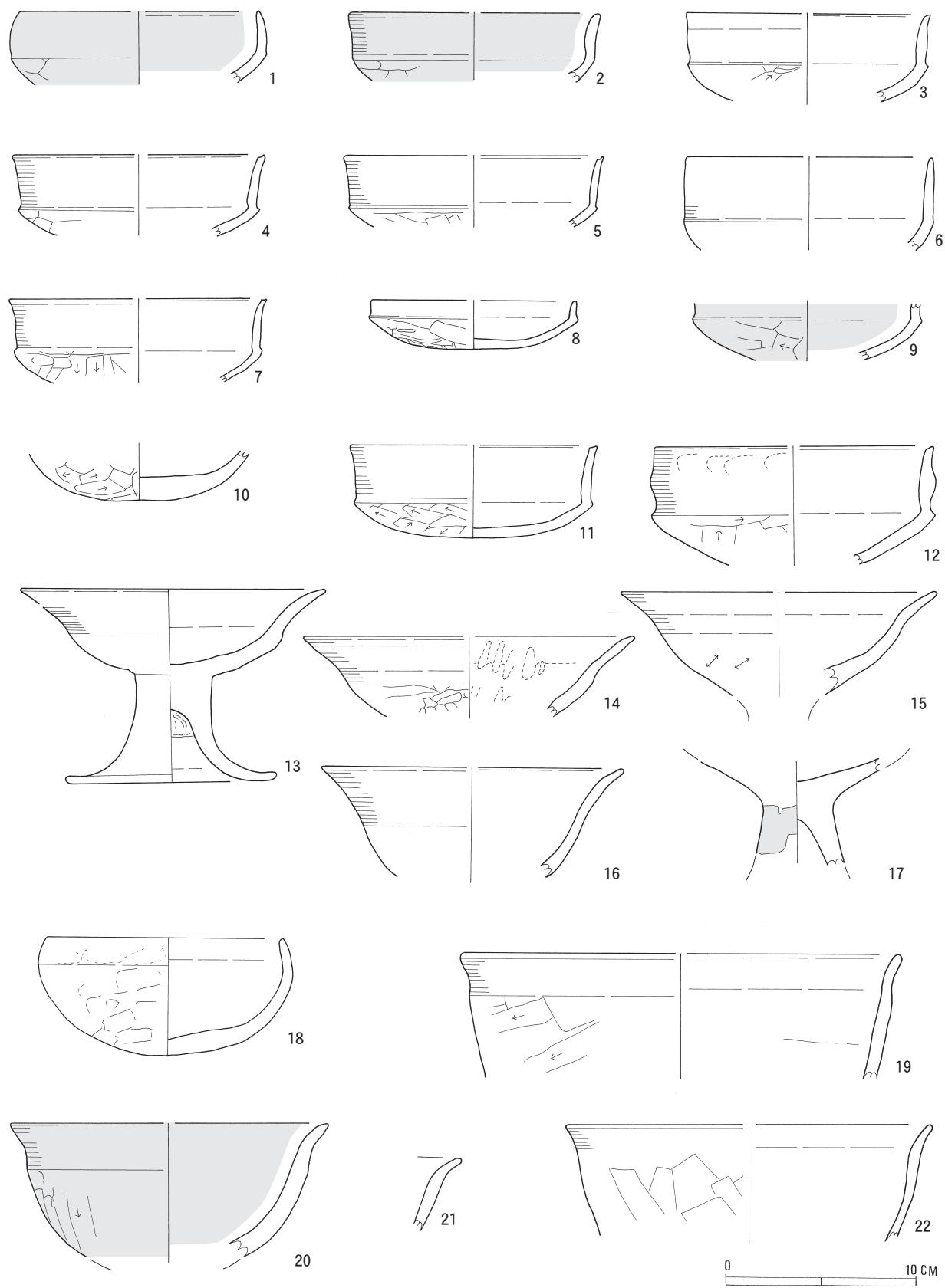
第43図 元境内遺跡第4次第25号住居出土遺物 (1/3)



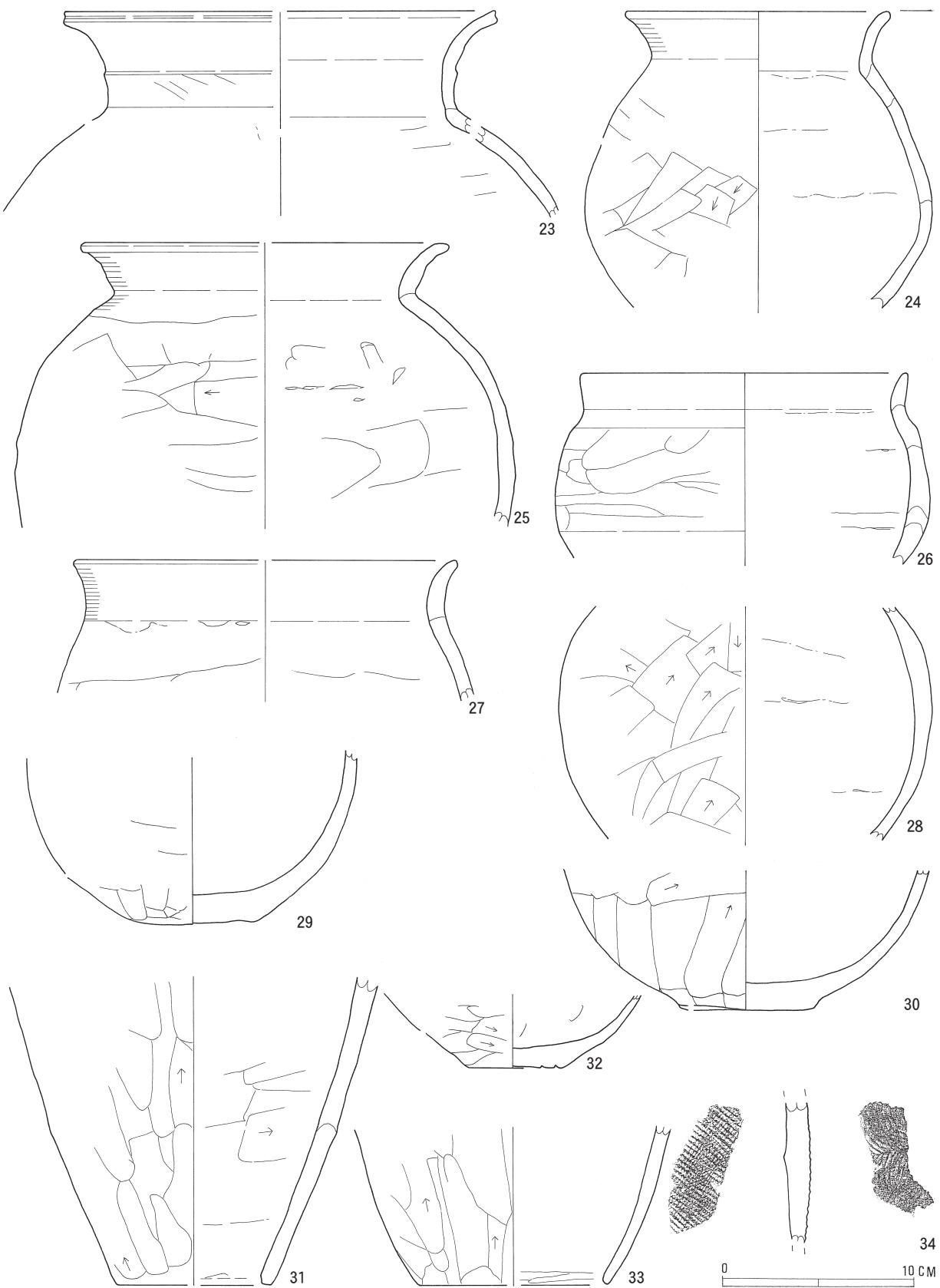
第44図 元境内遺跡第4次第26・27号住居出土遺物 (1/3)

第5表 元境内遺跡 第25号住居出土遺物観察表 (第43図)

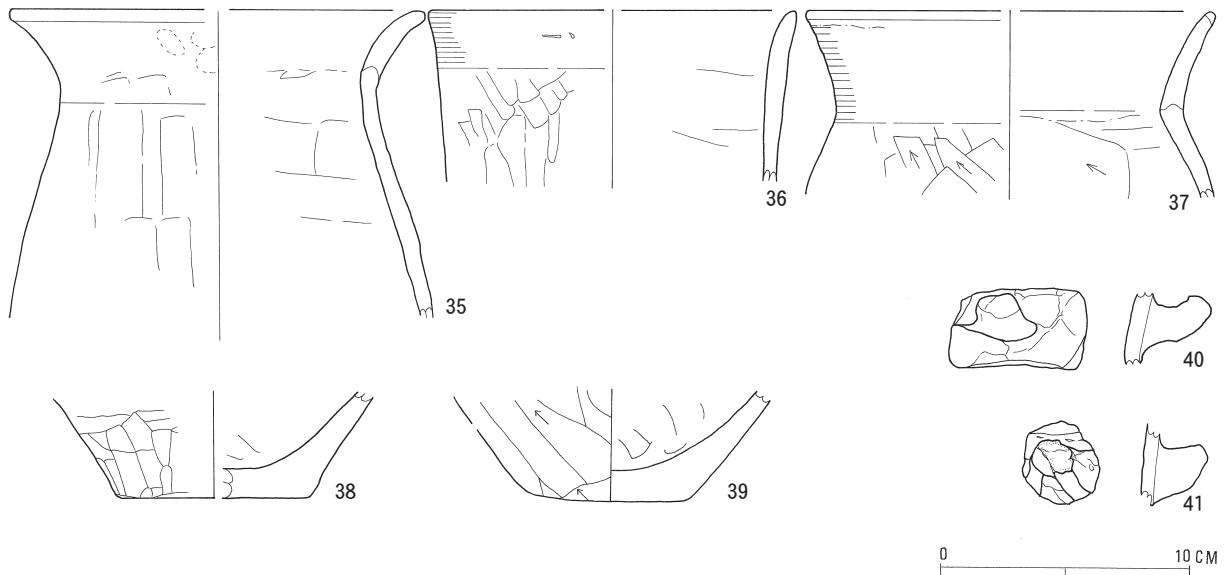
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(13.7)	(5.0)	-	A·H·I·N	B	内:明赤褐 外:明赤褐	1/6	
2	土師器・杯	(11.2)	(4.0)	-	A·B·E·N	B	内:明赤褐 外:明赤褐	1/3	
3	土師器・杯	(12.4)	(4.0)	-	A·B·E·I·N	B	内:赤褐 外:赤褐	口縁1/4	
4	土師器・杯	-	(3.6)	-	A·B·E·I·N	B	内:明赤褐 外:明赤褐	口縁・破片	
5	土師器・杯	(13.0)	(4.0)	-	A·B·H·I·N	B	内:にぶい黄褐 外:橙	口縁・破片	
6	土師器・杯	(11.6)	5.3	-	A·B·E·G·I·N	B	内:にぶい褐 外:にぶい橙	2/3	深いハラキザミ(体部外面)
7	土師器・杯	11.4	4.4	-	A·M·N	A	内:赤 外:赤褐	2/3	全面赤彩。
8	土師器・甌	-	(3.6)	-	A·F·N	B	内:褐 外:黒褐	口縁・破片	
9	土師器・高杯	(16.0)	(9.1)	-	A·D·I·K·N	B	内:橙 外:橙	1/3	内外面赤彩。器面やや風化。
10	土師器・高杯	(17.0)	(10.1)	-	A·B·D·E·I·N	B	内:明赤褐 外:橙	2/3	
11	土師器・高杯	-	(4.8)	-	A·B·E·I·K·N	B	内:黒褐 外:橙	杯部2/5	内面黑色処理。
12	土師器・高杯	-	(7.7)	9.2	A·D·I·K	B	内:橙 外:橙	1/2	
13	土師器・鉢	(14.8)	(6.5)	-	A·E·I·N	B	内:明赤褐 外:明赤褐	口縁3/4	3個体。
14	土師器・壺	(13.4)	(2.8)	-	A·E·I·N	B	内:明赤褐 外:明赤褐	口縁1/6	
15	土師器・壺	(15.6)	(4.7)	-	A·B·D·E·F·I	B	内:明赤褐 外:明赤褐	口縁2/3	
16	土師器・壺	-	(10.3)	6.9	A·D·E·N	B	内:黒褐 外:灰黃褐	底部、体部・破片	内面煮炊き痕有。
17	須恵器・甌	-	-	-	A·D·L	B	内:暗灰黄 外:灰白	破片	
18	土師器・壺	-	(8.0)	(4.8)	A·E·I·K·N	B	内:橙 外:黒褐	底部1/2	
19	土師器・壺	-	(18.8)	(6.0)	A·B·D·E·G·I·N	B	内:にぶい赤褐 外:明赤褐	1/3	
20	土師器・壺	-	(3.8)	(6.8)	A·E·H·I·N	B	内:明赤褐 外:黒褐	底部1/4	穿孔有。
21	土師器・壺	12.8	30.0	6.9	A·D·I·K·N	B	内:赤褐 外:明赤褐	2/3	内外面炭化物付着。



第45図 元境内遺跡第4次第28号住居出土遺物 (1) (1/3)



第46図 元境内遺跡第4次第28号住居出土遺物(2) (1/3)



第47図 元境内遺跡第4次第28号住居出土遺物(3)(1/3)

第6表 元境内遺跡 第26号住居出土遺物観察表(第44図)

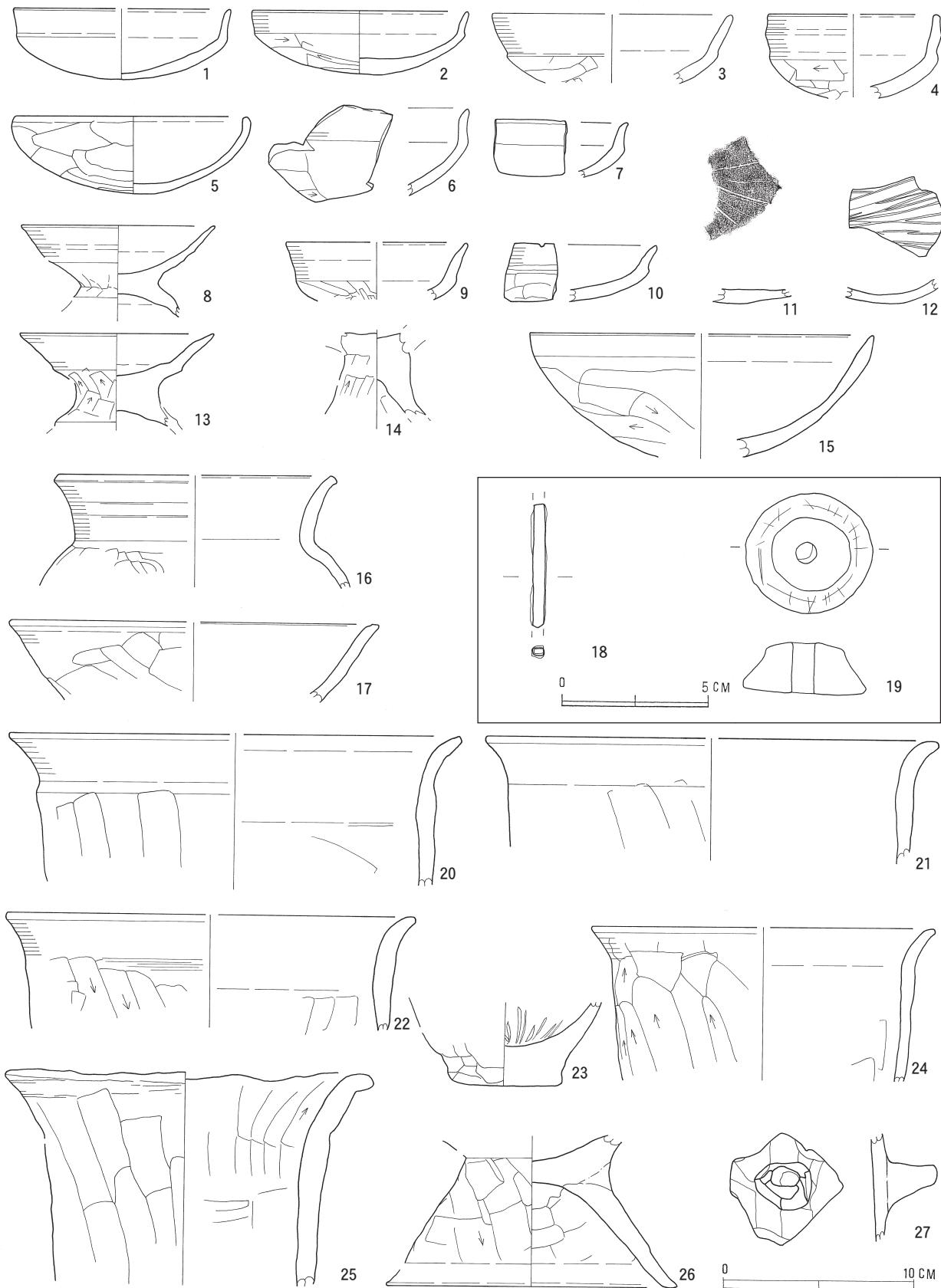
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(11.7)	(3.1)	-	A·B·I·K·N	B	内:にぶい橙 外:明褐	1/5	
2	土師器・杯	-	-	-	A·B·E	B	内:にぶい黄橙 外:にぶい黄橙	口縁・破片	
3	土師器・壺	(16.8)	(5.5)	-	A·B·D·I·J·K·N	B	内:にぶい黄褐 外:明褐	口縁1/2	
4	土師器・甕	(18.0)	(3.2)	-	A·B·D·E·I·J·N	B	内:にぶい黄橙 外:にぶい黄橙	口縁・破片	
5	土師器・壺	(11.4)	(5.4)	-	A·B·D·M	B	内:黄橙 外:橙	口縁1/8	
6	土師器・甕	-	-	-	A·B·E·I·N	B	内:にぶい褐 外:にぶい橙	把手	
7	須恵器・長頸瓶	-	-	-	B	B	内:灰黃 外:灰オリーブ	肩部1/5	自然釉。又は平瓶か。
8	須恵器・甕	-	-	-	I·L	B	内:灰白 外:オリーブ灰	破片	俵型の甕。灰色軟質、管ノ沢?
9	須恵器・甕	-	-	-	A·B·D·E·L	B	内:灰 外:灰	破片	内外面にタール状物質付着。

第7表 元境内遺跡 第27号住居出土遺物観察表(第44図)

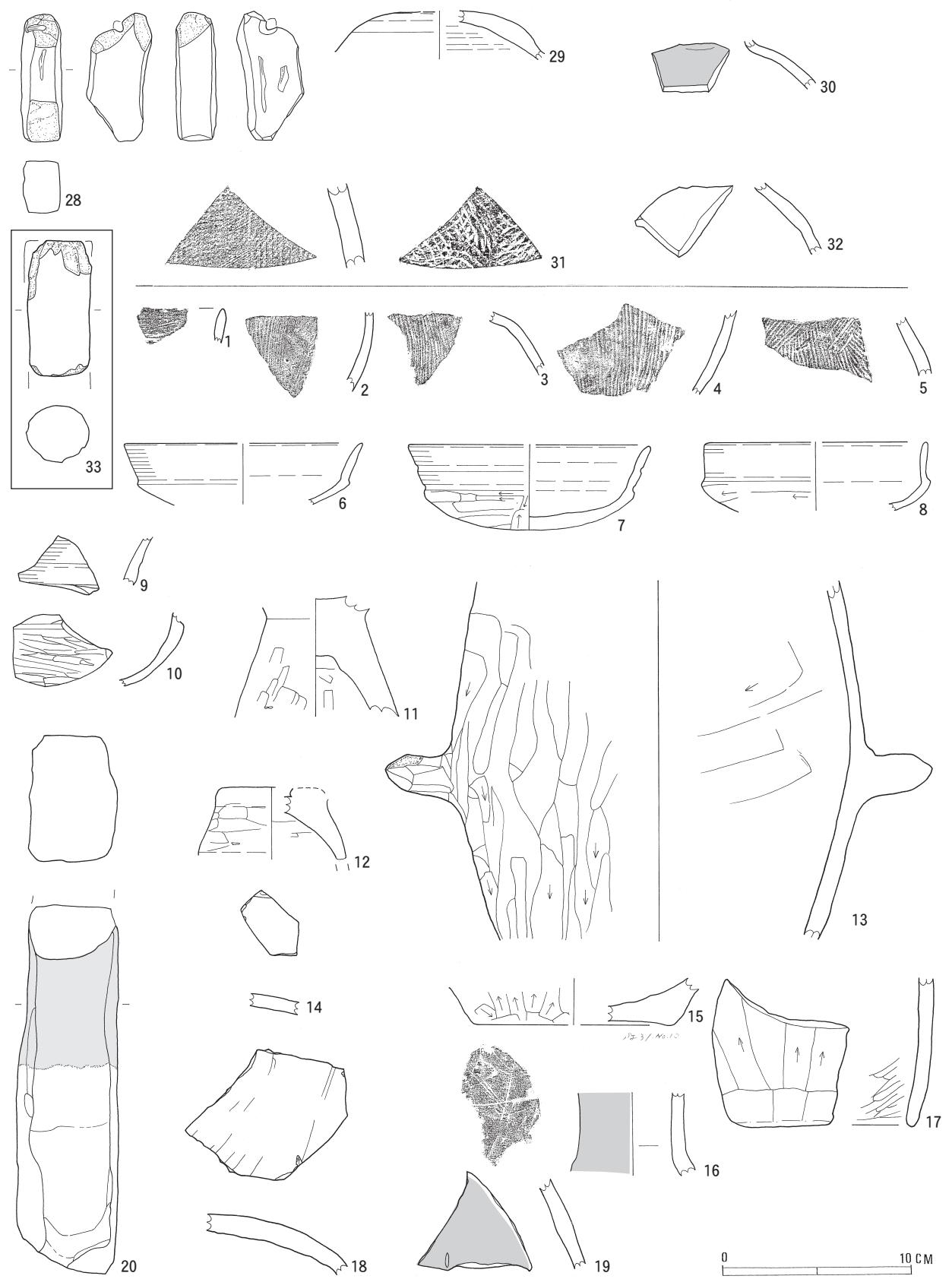
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(10.3)	(3.3)	-	A·E·I	B	内:にぶい黄褐 外:灰黄褐	1/3	
2	土師器・壺	-	(3.8)	(12.2)	A·B·E·I·K·N	B	内:橙 外:にぶい褐	底部1/3	斑状剥落。
3	土師器・壺	(19.4)	(7.9)	-	A·B·D·I·K	B	内:にぶい橙 外:灰黄褐	口縁・破片	

第8表 元境内遺跡 第28号住居出土遺物観察表(第45.46.47図)

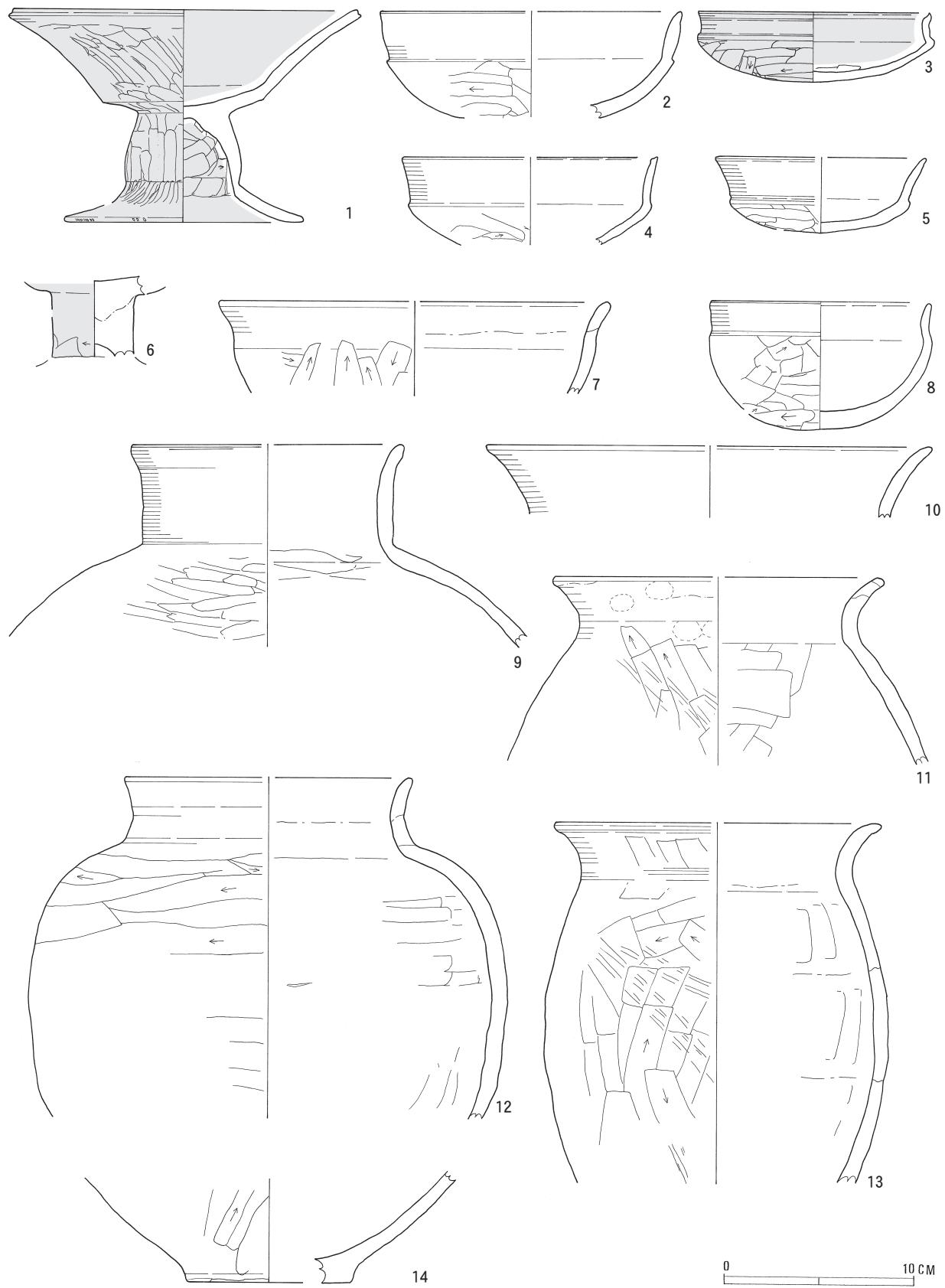
No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(12.5)	(3.7)	-	A·B·E·I·N	B	内:橙 外:橙	口縁・破片	内外面赤彩有。
2	土師器・杯	(13.0)	(3.5)	-	A·B·E·I·N	B	内:赤 外:赤褐	口縁・破片	内外面赤彩有。
3	土師器・杯	(12.7)	(4.6)	-	A·B·I·J·K	B	内:明赤褐 外:明赤褐	1/5	
4	土師器・杯	(13.0)	(4.3)	-	A·B·I·K	B	内:橙 外:橙	口縁・破片	
5	土師器・杯	(13.4)	(3.7)	-	A·B·E·K	B	内:橙 外:橙	口縁1/3	
6	土師器・杯	(12.8)	(4.8)	-	A·B·E·I·K	B	内:橙 外:橙	口縁・破片	
7	土師器・杯	(13.4)	(4.4)	-	A·B·E·K	B	内:橙 外:橙	1/4	
8	土師器・杯	(10.6)	(2.5)	-	A·B·G·I	B	内:橙 外:橙	1/5	黒斑有。
9	土師器・杯	(11.8)	(3.0)	-	A·D·F·I·N	B	内:橙 外:明赤褐	底部	内外面赤彩有。
10	土師器・杯又は小壺	-	(2.5)	3.2	A·D·E·I·N	B	内:明赤褐 外:明赤褐	底部1/2	
11	土師器・杯	(12.8)	4.8	-	A·D·E·N	B	内:明赤褐 外:明赤褐	1/2	
12	土師器・杯	(14.6)	(6.2)	-	A·B·E·I·N	B	内:橙 外:橙	1/3	指圧痕有。
13	土師器・高杯	(15.9)	10.1	11.1	A·E·I·N	B	内:明赤褐 外:明赤褐	4/5	黒色粒子付着。
14	土師器・高杯	(17.2)	(4.2)	-	A·B·E·I·K	B	内:橙 外:橙	杯部1/4	篠竹状の圧痕有。
15	土師器・高杯	(16.4)	(5.4)	-	A·B·E·I·K	B	内:明赤褐 外:明赤褐	杯部1/3	
16	土師器・高杯	(15.8)	(5.7)	-	A·E·I·N	B	内:橙 外:明赤褐	口縁1/8	
17	土師器・高杯	-	-	-	A·E·G·H·I·N	B	内:橙 外:明赤褐	脚部・破片	赤彩有。
18	土師器・椀	12.3	6.1	-	A·B·E·H·I·N	B	内:赤褐 外:明赤褐	4/5	
19	土師器・甕	(22.6)	(6.8)	-	A·B·E·I·K·N	B	内:明赤褐 外:明赤褐	口縁・破片	
20	土師器・高杯又は鉢	(16.5)	(7.0)	-	A·B·I·K·N	B	内:橙 外:橙	杯部1/4	内外面赤彩。
21	土師器・高杯	-	-	-	A·D·I·K·N	B	内:橙 外:明赤褐	口縁・破片	
22	土師器・鉢	(19.2)	(6.1)	-	A·B·E·I·J·N	B	内:明赤褐 外:明赤褐	口縁1/5	
23	土師器・壺	(22.4)	(6.4)	-	A·B·K·N	B	内:橙 外:橙	口縁・破片	須恵器模倣甕。
24	土師器・壺	(13.8)	(15.5)	-	A·B·D·I·N	B	内:にぶい褐 外:明赤褐	1/3	
25	土師器・壺	(18.7)	(14.8)	-	A·B·E·I·N	B	内:にぶい赤褐 外:橙	1/4	



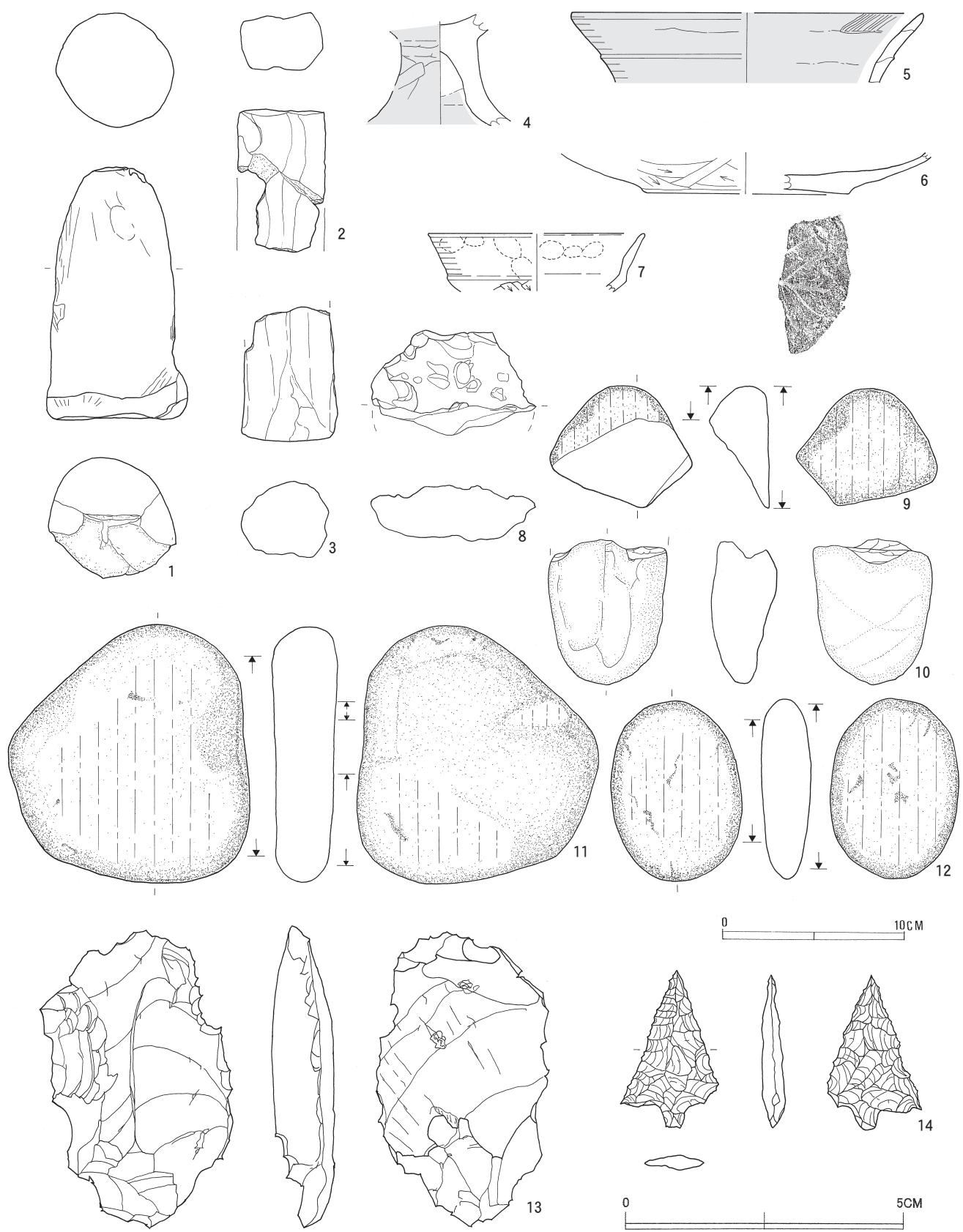
第48図 元境内遺跡第4次第29号住居出土遺物（1）（1/3）



第49図 元境内遺跡第4次第29号住居出土遺物（2）第30・31号住居出土遺物（1/3）



第50図 元境内遺跡第4次第32号住居出土遺物 (1/3)



第51図 元境内遺跡第4次第25・29・31・33号住居・土壤・集石ピット一括出土遺物 (1/3) 13・14 (1/1)

V 宮脇遺跡 2 次の調査

1 発掘調査の概要

調査にいたる経過 宮脇遺跡は、過去において 2 回の発掘調査が旧江南町教育委員会の手で行われた。詳細は下表のとおりであるが、2 次調査について今回報告を行なうものである。

年・次	年報No.	所在	調査通知 年月日・	原因・調査面積	調査主体	主な遺構・出土遺物・数量
S 58 1 次	1 8 5 5	宮脇 79・97	58委保記第2-1351号 昭和58年7月12日	村道路改良 3 0 0 m ²	江南村教育委員会	縄文時代早期住居 1軒 古墳時代 ～平安時代住居跡 11軒
H 13 2 次	8 6 8 0	宮脇 79-1	江南教発第 1811号 平成13年6月6日	個人住宅 2 0 0 m ²	江南町教育委員会	古墳・平安時代住居跡 3軒

発掘調査は、1 次調査の地区は遺跡を南北に通る生活道の拡幅であったため、平均 3 m の線的な調査を延長 100m 行なった。多くの遺構が確認されたが住居跡など一部の遺構の確認にとどまった。しかし、縄文時代早期の住居と稻荷台式の土器が確認されたことは大きな成果であった。また、野原古墳群を取り巻く集落の一部として住居群が確認され、2 次調査では集落が東へ広がることがわかった。

発掘調査・整理報告作業の経過 2 次発掘調査は、個人住宅の建築に先立ち、平成13年7月1日より平成13年8月1日まで旧江南町教育委員会文化財担当者を調査担当者として実施された。現場には作業員を投入し遺構の確認を進め、遺物包含層を掘り進めて行った。遺構としては重なり合った古墳時代竪穴住居跡 3 軒・掘建柱建物 1 棟・土壙 4 基などを検出している。なお、本遺跡では過去の調査実績と無縁に住居番号を付している。発掘調査では、基準点測量及び地形測量を委託業務として発注実施している。

この発掘調査は、江南町が平成13年度の文化財関係国庫補助事業を受けており、国1/2 埼玉県1/4 江南町1/4の費用負担を行っている。

整理報告書作成作業は江南町が平成19年に熊谷市と合併したことから、これを熊谷市教育委員会に引き継ぎ、平成20年度の熊谷市埋蔵文化財保護事業として実施した。事務組織等は次のとおりである。

発掘調査の組織 宮脇遺跡の発掘調査は旧江南町教育委員会が下記の組織で実施し、整理報告書作成は合併後の熊谷市教育委員会でこれを実施した。当該年度の組織・人員配置は次のとおりであった。

宮脇遺跡発掘調査の組織（平成13年度） 発掘調査

主体者	江南町教育委員会
事務局	教 育 長 岡部 弘行 教育次長 岡田 恒雄 主査 新井 端 文化財担当 森田 安彦

宮脇遺跡発掘調査の組織（平成20年度） 整理・報告書作成

主体者	熊谷市教育委員会	※組織 省 略（5 頁の組織と同一）
-----	----------	--------------------



第52図 宮脇遺跡第2次遺構配置図 (1/100)

2 宮脇遺跡の立地と環境

立地と環境（第32図） 宮脇遺跡を取り巻く環境については、今回報告する野原地区の3遺跡をみると互いに隣接し拠点的集落として地域一帯に広がるので、元境内遺跡にて説明したことと基本的に変わらない。ただ、宮脇遺跡については、地名とその位置について少し述べておきたい。元境内遺跡の章で述べたように、野原地区には能満寺という古代末の寺が中世期まであったとされ、その遺構や関連地名が残って現在の小字地名となったと考えている。ランドマークとなる現在の文殊地寺と野原八幡神社を定点として地名の位置を見ると、文殊寺と神社とは東西の台地上に位置しその間は約600mで、文殊寺の位置は①「元境内」 次に西へ向かい②「能満寺」 ③「八軒」 ④「味尊堂」 ⑤「宮脇」 そして、①・②の北側に⑫「鹿島」が、④⑤の北側に⑥「能満寺」が位置する。宮脇には八幡神社があり神社から元境内に至る台地斜面部は東へ向かい「宮脇」 ⑦「郷」 ⑧「道祖神」 ⑨「諫訪脇」で埋まる。これらの小字地名は神仏やその施設にかかわる地名がまとまりを持って分布しているようで、さらに東側には⑩「熊野」 ⑪「荒神脇」地名も残る。それぞれの場所にはその地名の由来となるような建造物・痕跡や遺跡が確認にされる場合もある。これら的小字地名に現れる歴史的背景は、能満寺の存在とその信仰圏を示すものかもしれない。八幡神社の西は「境田」で金銅宝冠阿弥陀像が出土した野原古墳がある。宮は当然八幡神社のことで古代の寺院には神社が勧請されることが神仏混交の中では普通で特に八幡神が好まれた。野原の場合もその歴史的背景と今後の調査に注意することが必要と思われる。

調査の方法 調査地点は標高50～51mの緩斜面で、茶褐色系のローム土混じりの耕作土を除去した後、遺構の掘り下げを行った。確認された遺構は竪穴住居跡（S I 1～3）・溝1条（SD1）・土壙（SK1～4）のほかに柱穴状の小穴（SB1）が認められた。遺構の実測図化はトータルステーションにて行なっている。

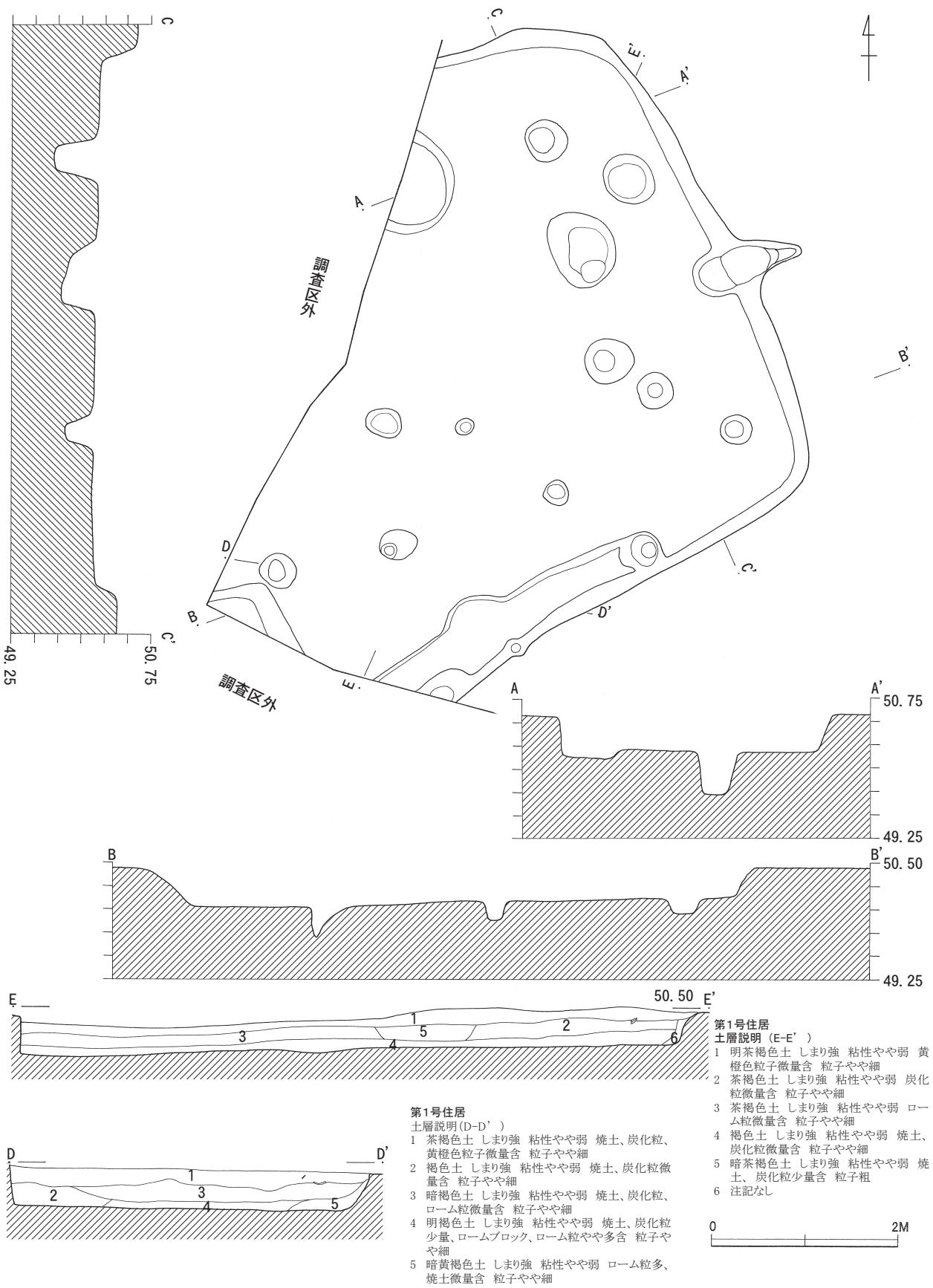
報告書作成作業は、旧町時代に水洗註記を済ませてあったので、実測遺物の選別後図化作業を進め組版報告原稿の執筆・遺物の写真撮影を進めた。

3 検出された遺構と遺物

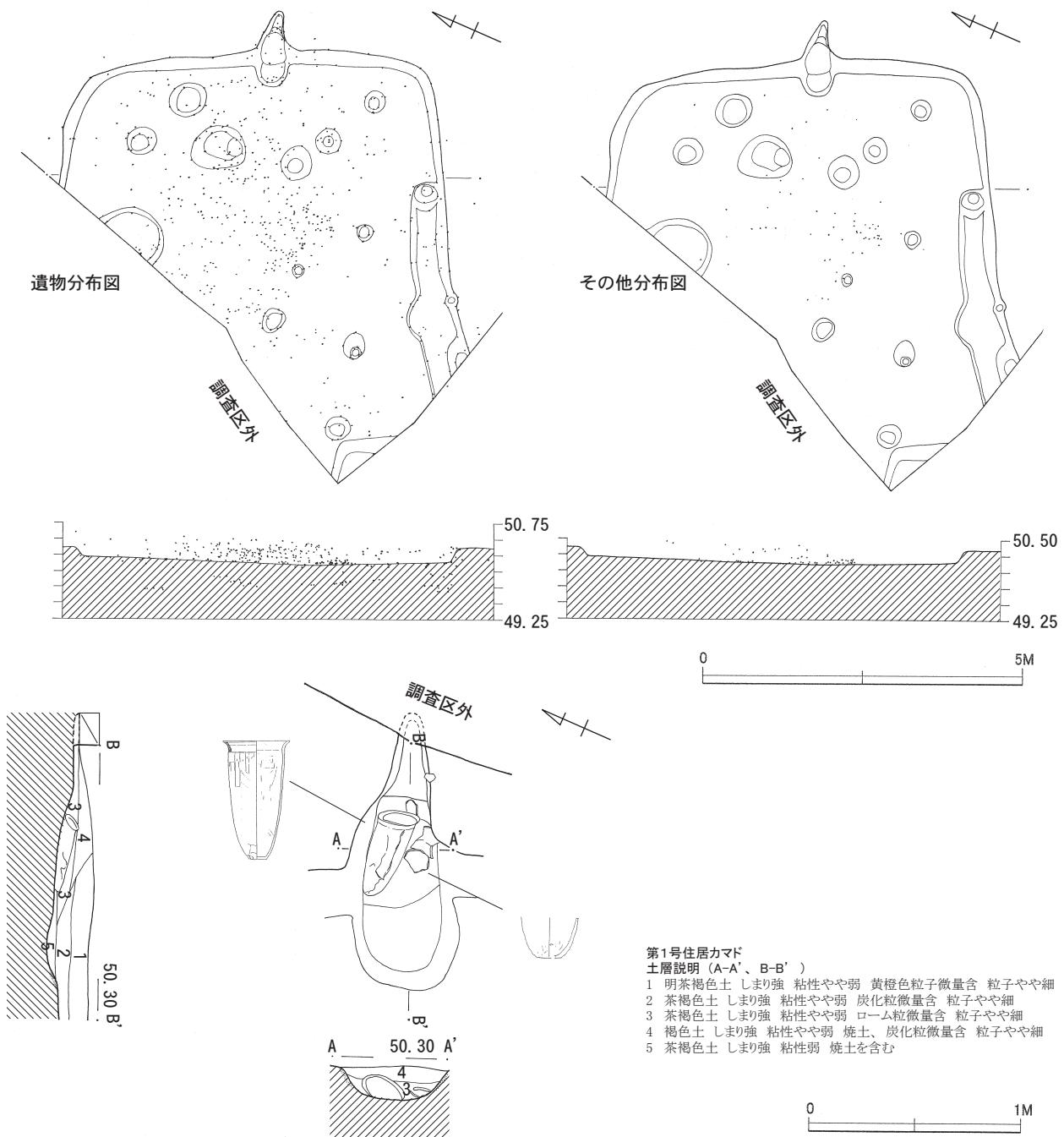
調査地点の概要を第52図 宮脇遺跡第2次発掘調査地点図で整理し説明する。竪穴住居跡はいずれも古墳時代後期のもので他の遺構との切り合いが多く遺存状況はあまり良くなかった。住居跡はほぼ方形を呈すが、全体を確認できていない。1号住居跡は北半を中心に大部分を検出、2号住居跡は北半の一部、3号住居は南側の大部分を検出した。住居の前後関係はS I 2→S I 1・S I 3である。土壙は円形（SK1）と方形（SK2～4）で、1～3は近接していた。調査区の東側に添い、約2.1m間隔の柱穴跡を4箇所検出したが南北棟の建物跡のようである。溝は調査区の東側で直線的に検出された。遺物の主体は住居跡出土品である。

第1号住居跡 S I 1（第52図・第53図・第54図）

南西隅を調査区外に残すほかほぼ全体を調査している。北壁中央付近にカマドを備える。南壁に沿い壁溝が確認される。一辺の規模は6.30×6.2mのほぼ方形となり、主軸はカマドを通るものとしてN-63°-Eの方位をもつ。壁の掘り込みは北壁で38cm残っており、壁の傾きは西壁で82°前後である。床は直床でほぼ平坦となり、柱穴状の小穴が11か所確認されたが主柱穴は特定されていない。遺物は土器が主体



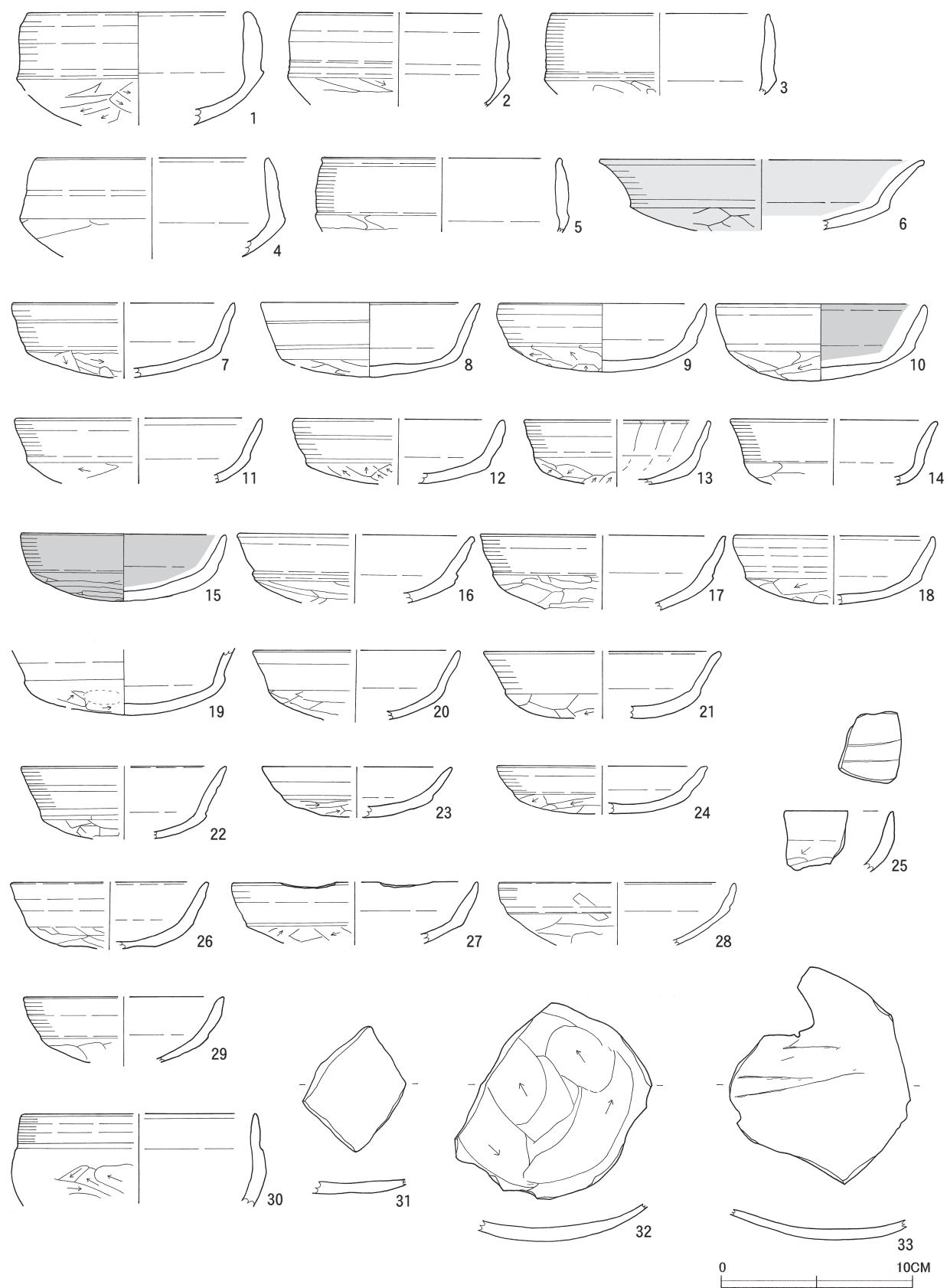
第53図 宮脇遺跡第2次第1号住居実測図 (1/60)



第54図 宮脇遺跡第2次第1号住居遺物分布図(1/100)・カマド実測図(1/30)

で覆土の上層床面まで検出され、杯・甕類の出土が多い。

カマド（第54図）は、煙道先端部が既設の電柱支線の掘削により破壊されていたため規模を特定できないが、住居壁より52cmまで確認される。燃焼部は扁平な卵形で住居壁ライン上に位置する。長さ60×幅36cmを測る。燃焼部は地山への堀込みが浅く、火床面と間層があり取られていない。燃焼部内の底部に長甕が横たわって1固体検出された。燃焼部から煙道へはあまり段差を持たず緩やかに立ち上がっている。袖ははっきり確認されていないが、焚口部が住居内に延びているので造り付けられていたと思われる。



第55図 宮脇遺跡第2次第1号住居出土遺物(1) (1/3)

出土遺物（第55～60図 第16表）

細片が多く、実測可能の遺物は図示した118個体の土師器・須恵器等である。

壺 1～5は杯型土師器で口縁部が高く直立し深いもの、6は高杯である。7～29は口縁部が外反する身の深い杯型土器である。30は鉢形、31～33は底部の破片で33は内部に暗文を持つ。34から38は丸底の口縁部の短い丸底の壺形土器で34・40・41は内面に放射状の暗文を施している。42から52・55は平底気味である。53・54・56～58は口径が大きく全体として大振りのものである。59～63は小型の鉢状の碗で、63～63は平底である。62は底部に糸切り痕を残す。

高壺 64・66は高壺形土師器で64は壺部が大きく外反する。

長甕 65・67～73・88は長甕型土師器で、65はカマド内から出土した完存品である。胴部には加熱による損傷がみられることから、カマドに架けられていたと考えられる。口径22cm、器高38cmを測る。68は底部を焼成後に穿孔しており、甕に転用された例だろう。70～72の長甕の口縁部は短く大きく外方に開く。器面の整形は縦方向のケズリが顕著に見られる。

甕 74～77・79～80は深めの鉢形を呈する土師器で、口縁部があまり外反せず立ち上がる。80が底部に単孔が開けられ甕と判断される以外はつきりしないが、81・82の把手の付けられた甕型土師器と思われる。

壺 83～87・89・92・100は壺型の土師器で、84は口縁部がほぼ垂直に立ち上がる小型の壺である。85・87は大形で、83のように長めの球胴をするものがある。85はなで肩、87は肩が張る。86・100は口縁部が外反する。100は球胴形で、92の丸底か93・94のように平底をとると思われる。90・95～97は、いずれもやや上げ底気味であり、壺・甕・鉢などの底部であったろう。

鉢 78・98・99・101は鉢型の土師器で口径21cmほどである。

支脚 114は土製の支脚 断面の直径4cmである。

羽口 115・116は羽口の先端部である。口径は115が2.1cm、116は2.2cmを測る。

須恵器破片 116～119は甕の破片で、107は頸部に波状文が施される。六世紀後半から末のものであろう。102～105は住居の時期以降のもの八世紀代の須恵器で、102は壺、103・105は蓋、位置04は長頸瓶の又は平瓶の口縁部であろう。

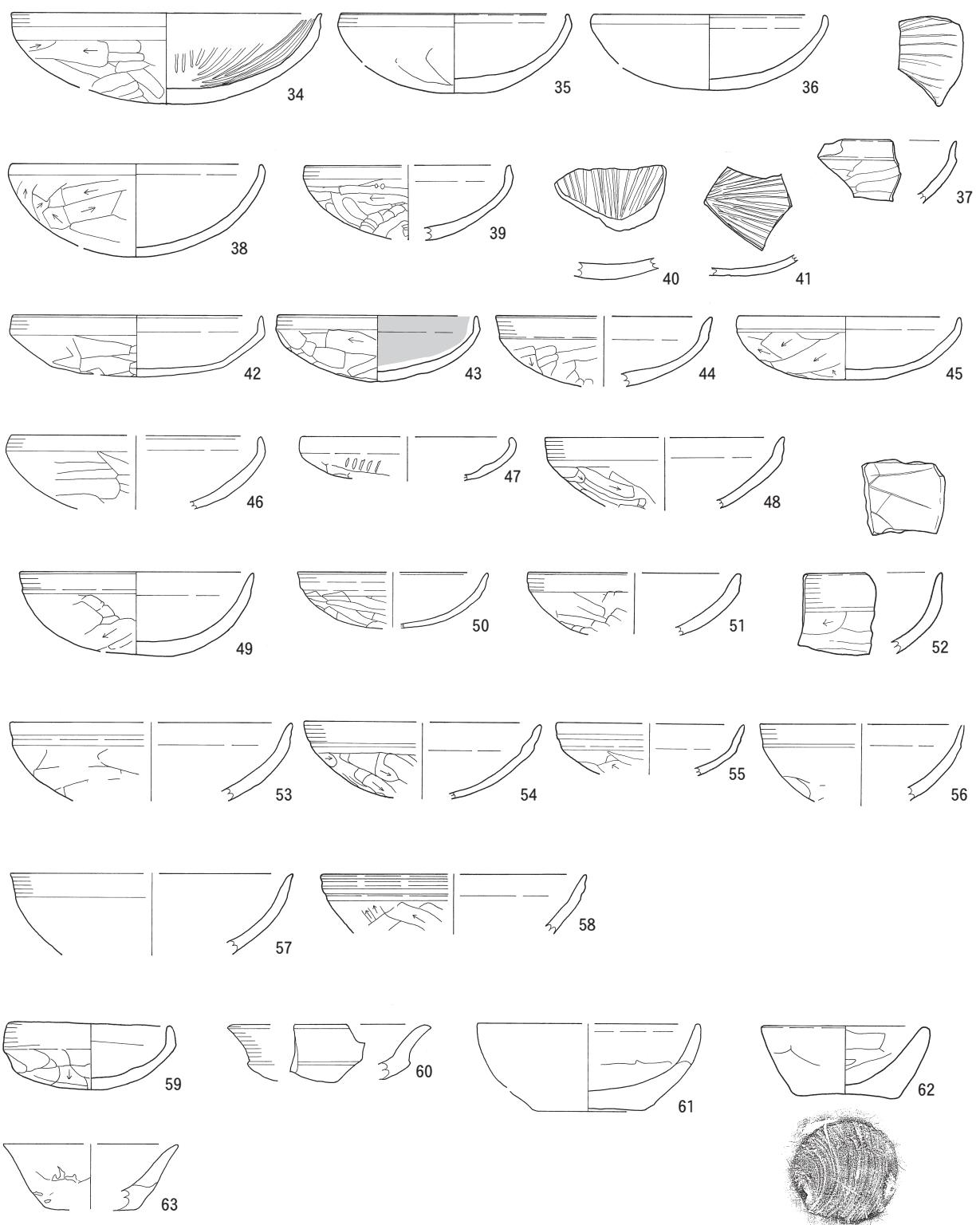
その他 117は貝巣穴泥岩で、赤紫色・灰白色を呈している。被熱赤変している。

滑石破片 118は緑灰色をする滑石である。大きさ8～11cm、厚み2.4cm大であるが、上面に円弧状の刻みが残ることから、円盤状の製品を意図して作出しようとしている。その場合製品の直径は6～8cm以内の円盤状と想定されるので、滑石で造られることが多い紡錘車を造ろうとした可能性が高い。円弧は図上の左側と下部に見られず、折損していることから製作途中の破損により完成に至らなかつたものであろう。

桃核（第21表 図版11）炭化種子の状態で26点のスモモと推定される種子が覆土及び床から出土した。その状態から、蓄えられてものではなく散布されたかのようである。

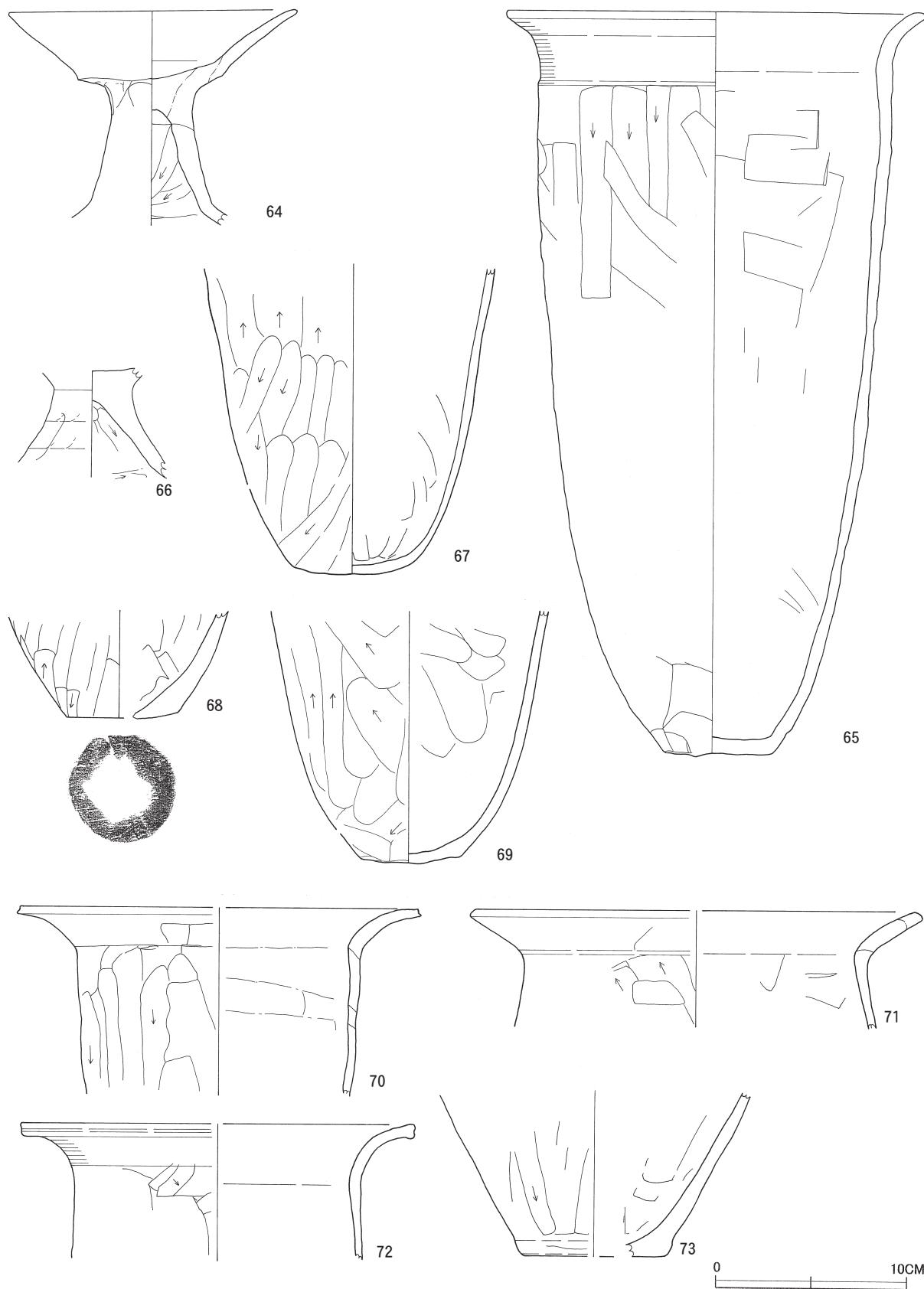
1号住居跡の遺物は、土師器を壺・甕・壺などの什器、貯蔵器が主体で、須恵器は貯蔵用の甕以外あまり入っていないようである。須恵器模倣の壺は口径が10～12cm代と小型になってきており、また、丸底型の壺も多く見られ、古墳時代後期後半にかかる時期のものである。

鉄製品等の遺物は見られないが、羽口が出土していることから近辺での鉄器生産は確かなことである



0 10CM

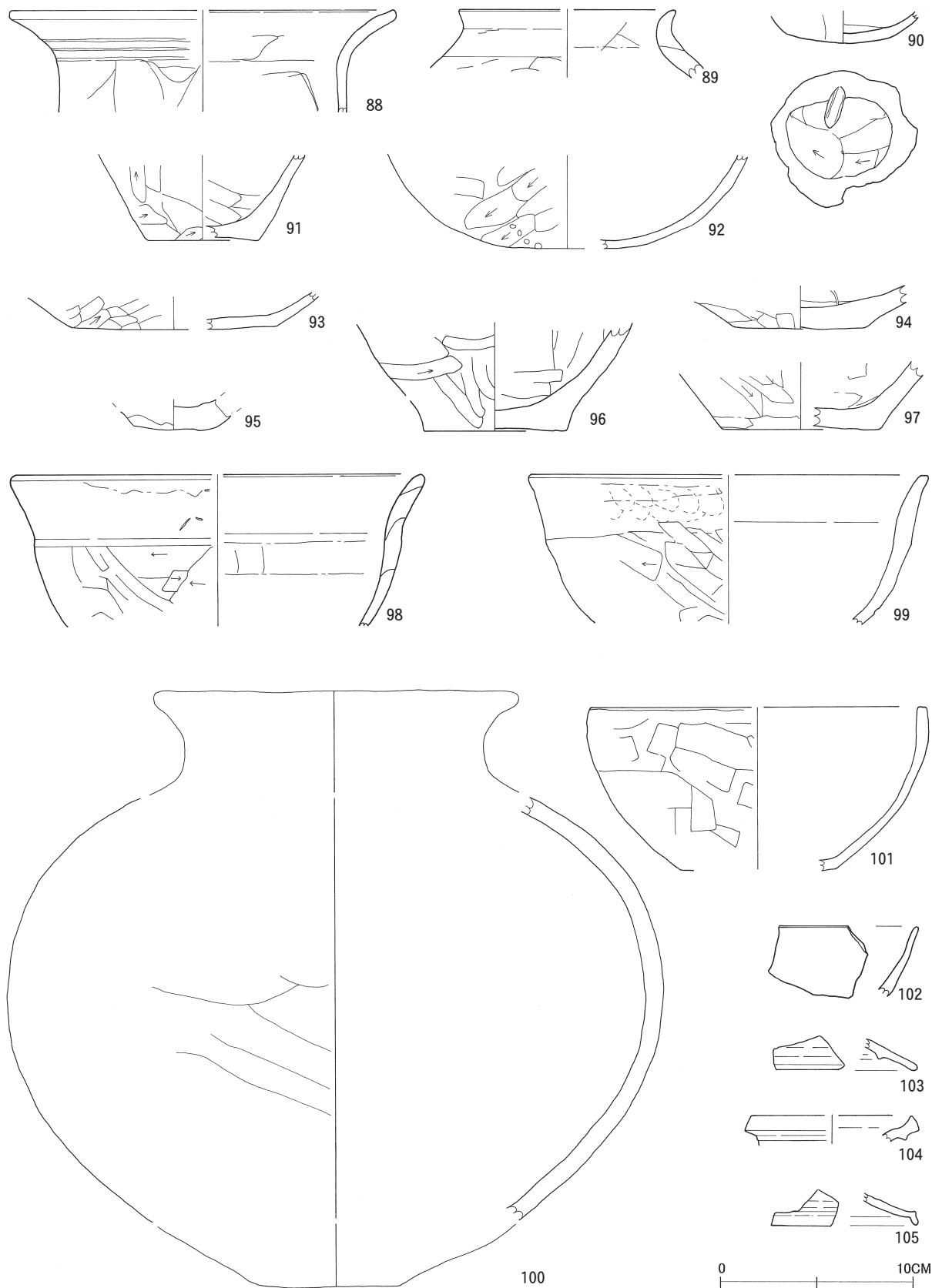
第56図 宮脇遺跡第2次第1号住居出土遺物(2) (1/3)



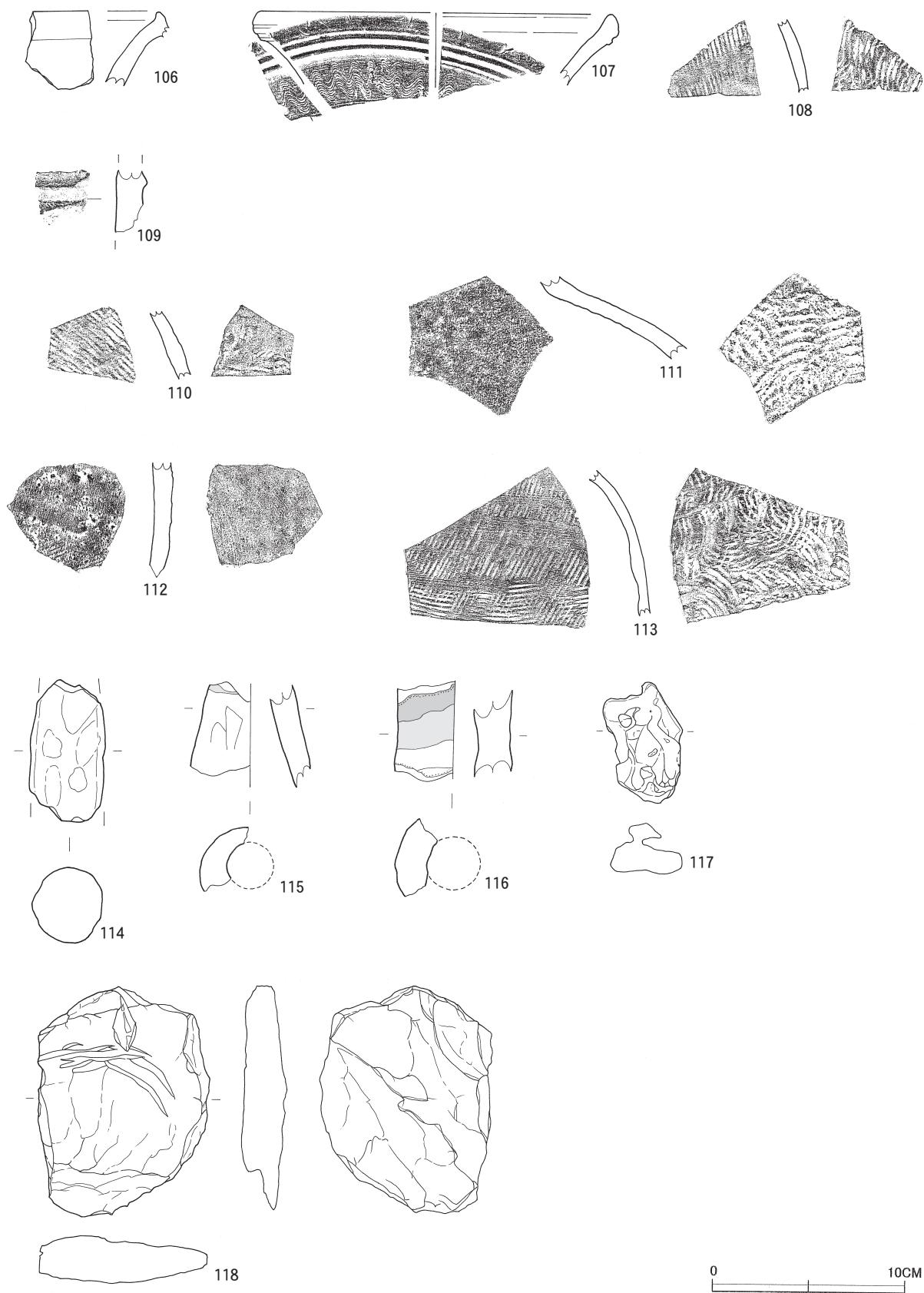
第57図 宮脇遺跡第2次第1号住居出土遺物 (3) (1/3)



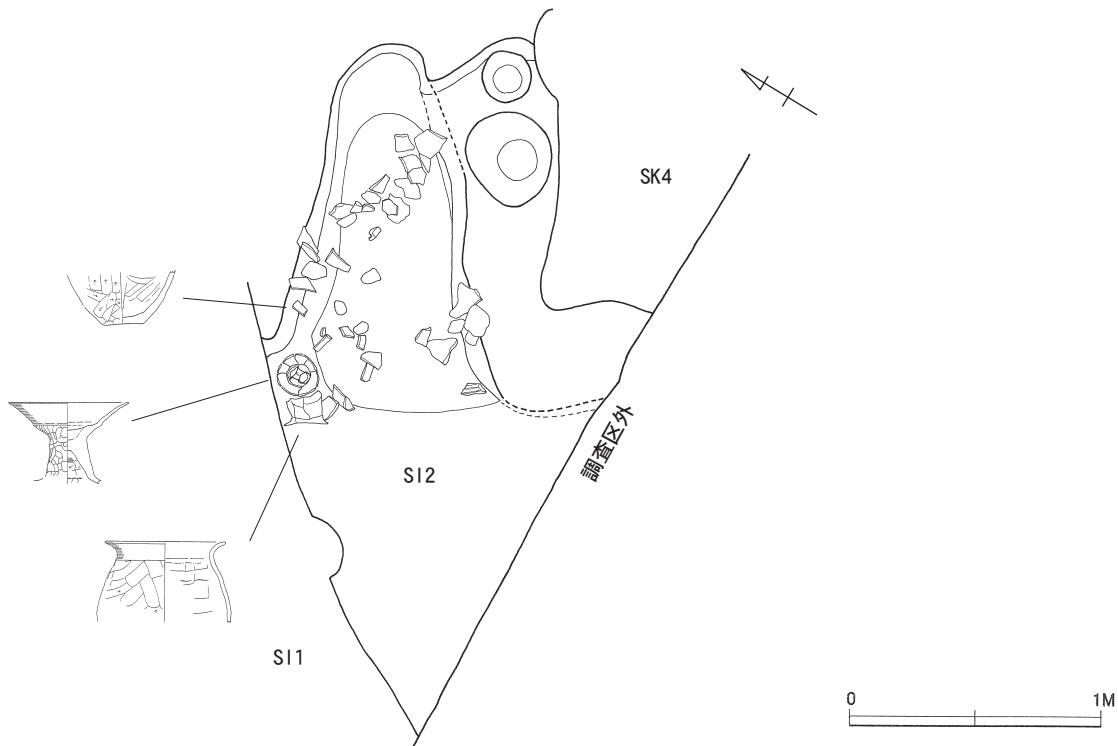
第58図 宮脇遺跡第2次第1号住居出土遺物(4) (1/3)



第59図 宮脇遺跡第2次第1号住居出土遺物（5）(1/3)



第60図 宮脇遺跡第2次第1号住居出土遺物（6）（1/3）



第61図 宮脇遺跡第2次第2号住居カマド実測図 (1/30)

が、製品の出土は無かった。本田東台遺跡などでは羽口などとともに鍛冶炉跡が確認されており、合わせて鉄鎌・刀子などが出土している。小規模な鉄器加工や生産が主体であったと思われる。

第2号住居跡 S-2 (第52図・第61図)

調査区南側に一部が検出された。1号住居跡に西北半を切られ、南側は調査区外に延びることから、住居の規模は不明である。カマドは長さ1.4m確認され、住居主軸がカマドを通るとすると、N-85°-Eの方位をもつ。カマドは住居の北壁に位置する。カマド周辺の平面図が作成されているが、その遺存状況はあまりよくないため堆積土層図は作られていない。

カマド主軸と直交する住居壁が見えることから、燃焼部が壁外に位置する構造で規模は100×0.5mと大きい。焚口部の左側には逆位に置かれた高壙が置かれており、カマド内には長甕の破片が散らばる状況であった。

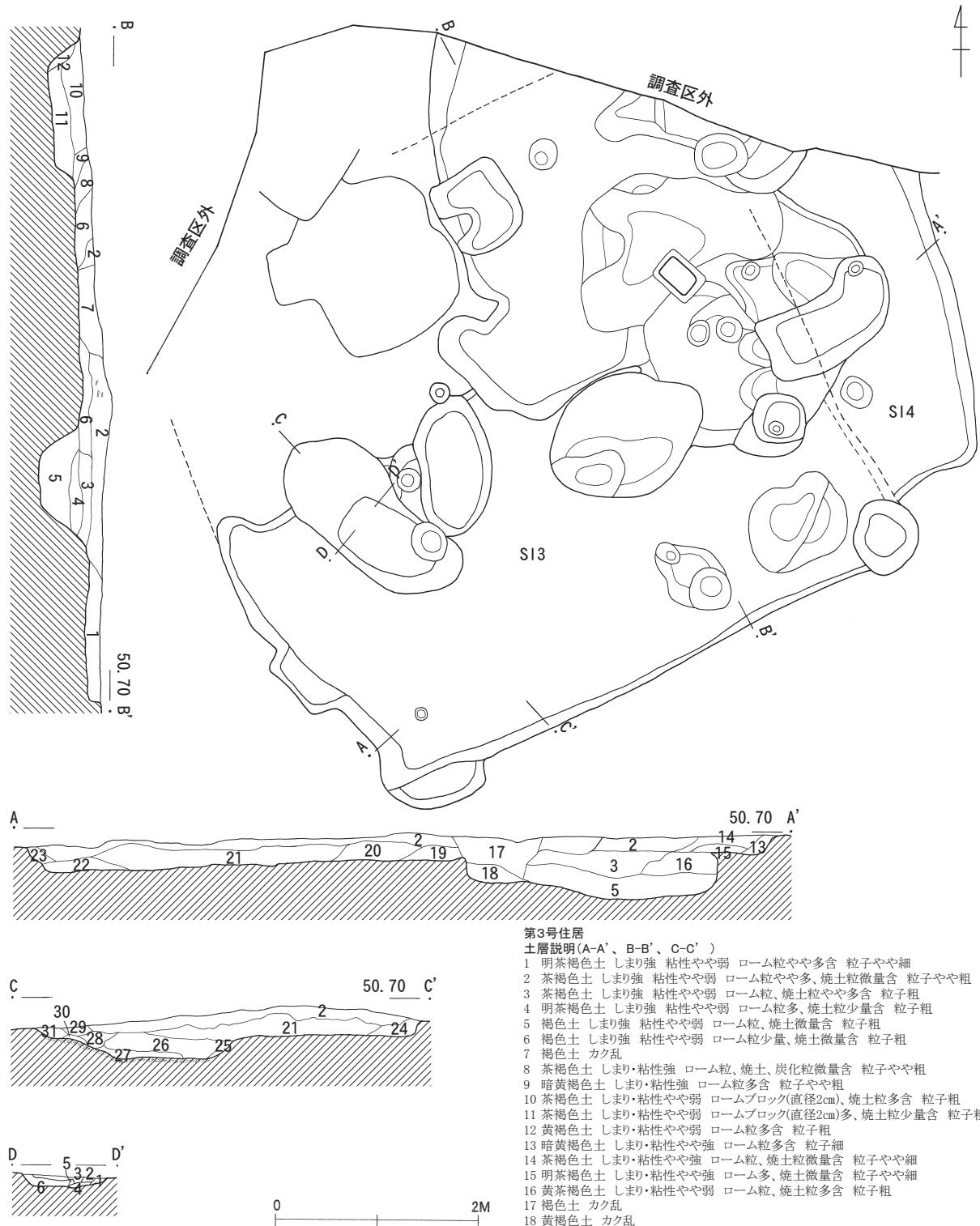
出土遺物 (第65図 第17表)

遺物は図示した4個体の土師器である。他は碎片となっている。

1は高壙型土師器で壙部が大きく外反し、口径15.7cmを測る。脚部は短く太い。脚裾は逆位で出土したため失われている。2はやや胴の張る甕で口径は19cmを測る。3は長甕である。4は木葉痕の残る甕底部である。これらの土器は古墳時代後期後半段階の様相を示している。

第3号住居跡 S-3 (第52図・第62図)

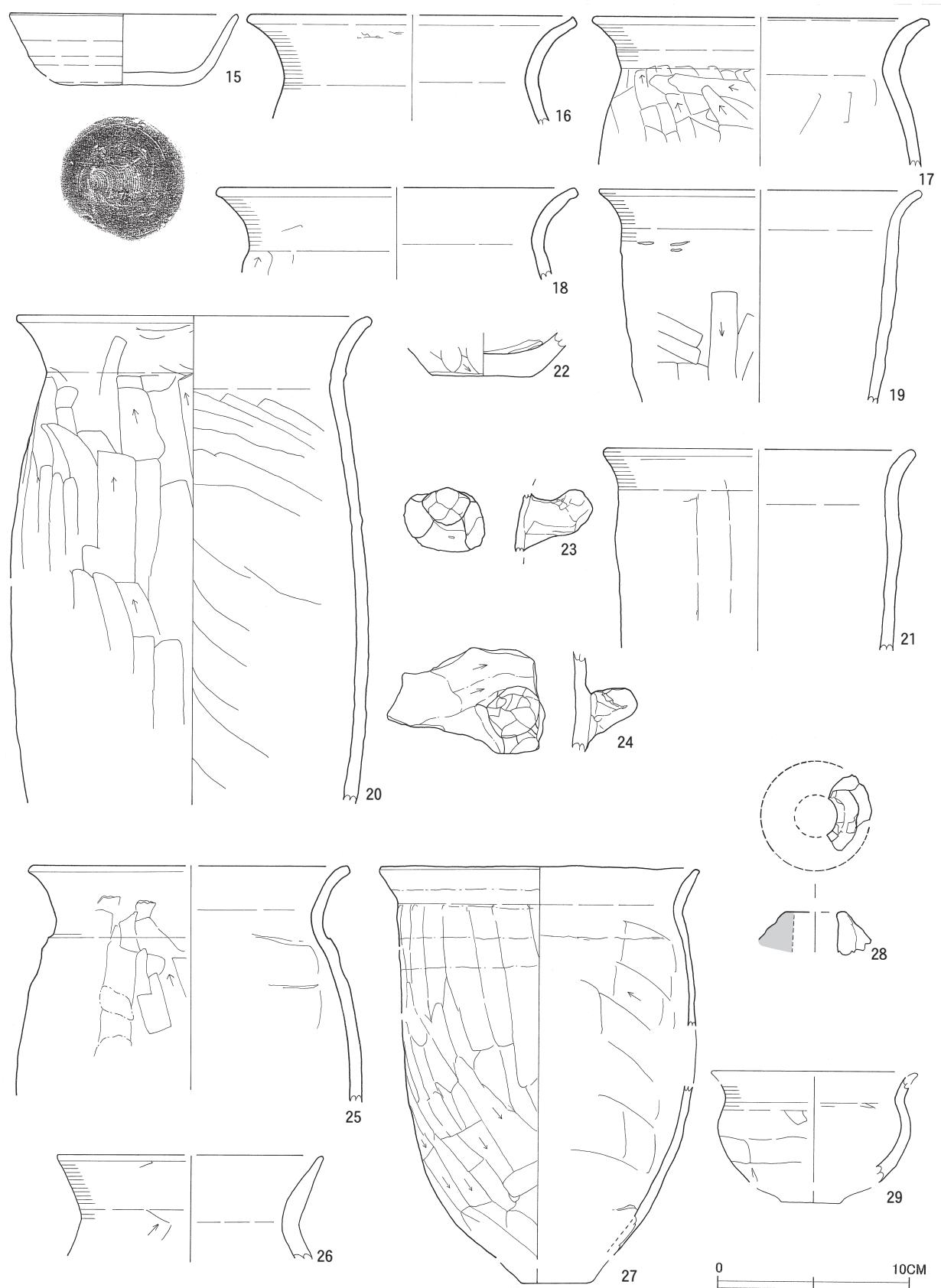
調査区北側に検出された。南壁と西壁の一部を検出するが、東壁と北壁側は攪乱と住居の重複のためはつきりしない。また、住居と重なる土壙と不定形の住居床下土壙が絡み合うため、床面の状況も良くな



第62図 宮脇遺跡第2次第3号住居実測図 (1/60)

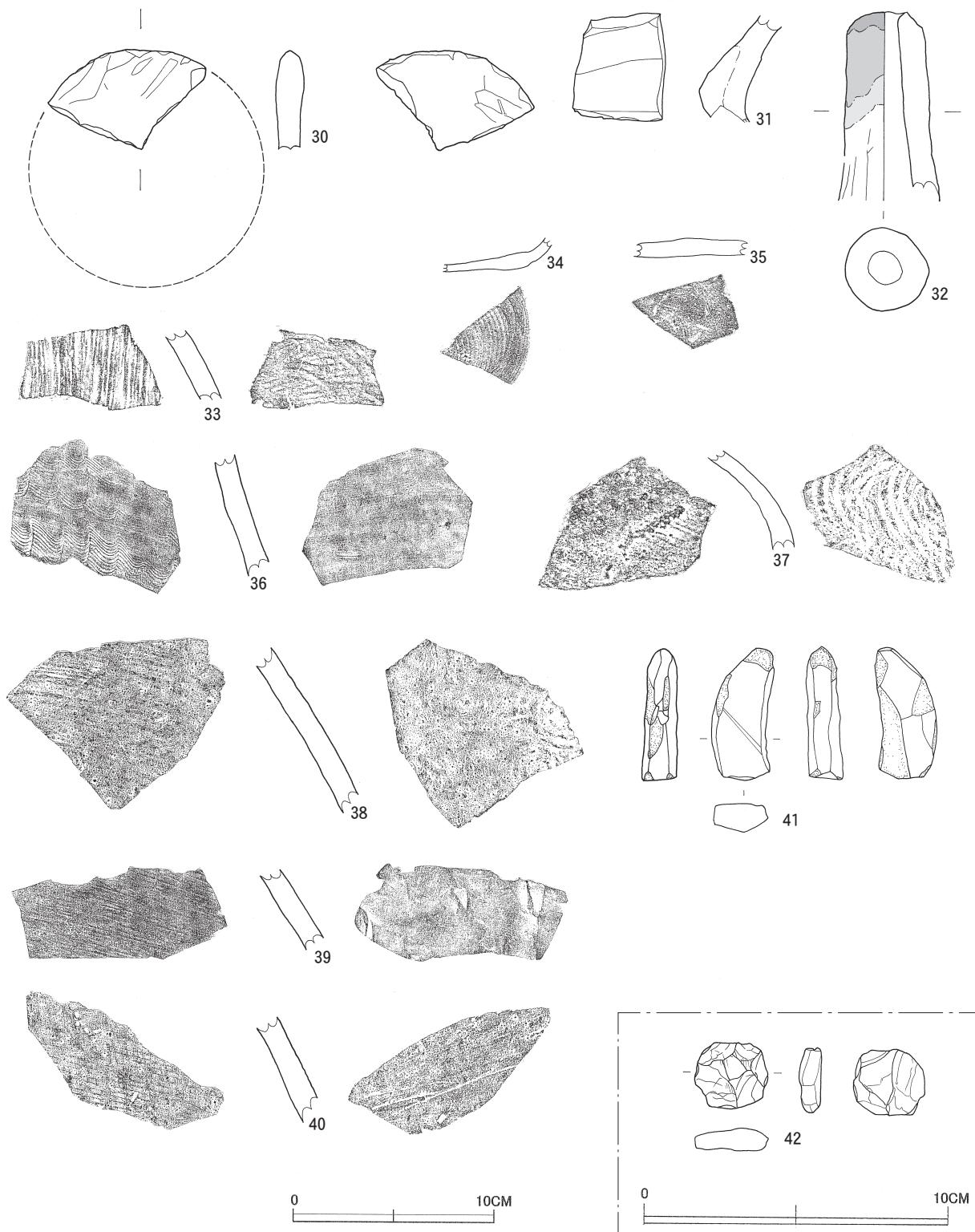


第63図 宮脇遺跡第2次第2号住居出土遺物・第3号住居出土遺物(1) (1/3)



第64図 宮脇遺跡第2次第3号住居出土遺物(2) (1/3)

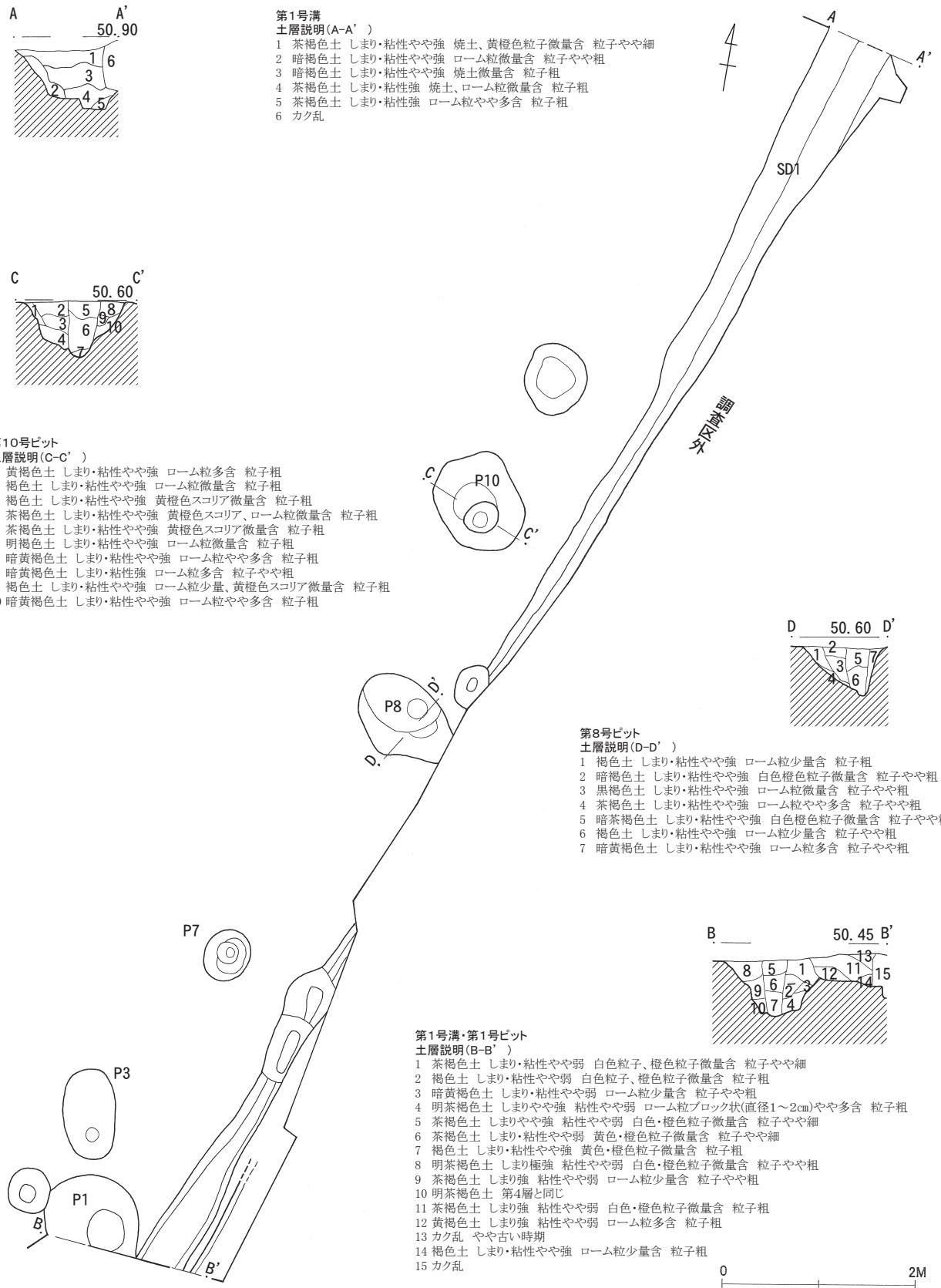
いようである。おそらく東側に1軒と北側に1軒住居が重なると考えられる。ただ、3号のカマドとされる堀込みがDD'にあるが、住居との関係が良く説明されていない。一見すると東西に細長い住居形態が想定



第65図 宮脇遺跡第2次第3号住居出土遺物 (3) (1/3) (1/2) 42

されるがその規模が $5.5 \times 3.1m$ となり、カマドは北壁の西端に位置することになる。カマドに切り込む小穴を柱穴とすると、CC'の土層図で住居床がカマド上に載っているので、住居拡張前のカマド跡とも考えられる。よって、このカマドは、拡張前の3号住居に伴い、その主軸はN-37°-Wの方位をもつとした。

拡張後の住居規模は点線で示された部分とすると主軸があまり変わらない一辺5m程度の方形を呈する



第66図 宮脇遺跡第2次第1号溝、第1・8・10号ピット実測図 (1/60)

と想定される。たが、調査区ではカマドの痕跡は認められなかつたようだ。壁の傾きは南壁でほぼ 90° 前後である。床は直床で攪乱があるが平坦である。

3号住居の東側に重なる住居を4号住居とし、AA'に見られる2層中の立ち上がりが3号住居と4号住居の切り合いになるだろう。4号住居跡は東壁部分の $0.6 \times 1.1\text{m}$ の範囲を確認している。

出土遺物（第63～65図 第18表）

第3号住居跡出土遺物は、実測掲載遺物は図示した42個体の土師器・須恵器等である。

壺 1～14は壺型土師器でいずれも破片であるが、15は口径16cmと大形であるほか、小振りのようである。

長甕 16～27は長甕形土師器で胴が張らず、口縁も外反が弱い。20は口縁部が完存しており、口径は18.4cmを測る。

甌 27は底部付近を欠失するが甌としてよいであろう。

羽口 28・32は羽口破片で32は先端部がよく残り被熱の差により色調の違いが見られる。孔径は1.3cm、遺存長は9.3cmであった。

鉢 29は小型の鉢形土器。**蓋** 30は円盤状の土製品、復元される直径は約12cmである。つまみ部分を欠失するが蓋の一部であろう。

須恵器 15・31・33～40は須恵器である。15は須恵器壺で、底部糸切の後、回転ヘラにより周囲を削り調整する。底部は平底で体部から口縁部は直線的に外反する。口径は約12cmを測る。34・35も同一手法である。31・33・36～40は甕の口縁部・頸部・胴部等の小破片である。

砥石 41は砥石の破片。かなり使い込まれ、小さくなっている。

石器未製品 42は小円板形に途中加工された滑石である。この段階で直径2cm厚さ7mmである。前面は側面から求心的な剥離調整がなされ、側縁の研磨が行なわれている。円板状製品の製作を意図していたことが窺えることから、有孔円板等の未製品と考えられる。

第1号溝跡 S D 1 （第52図・第66図）

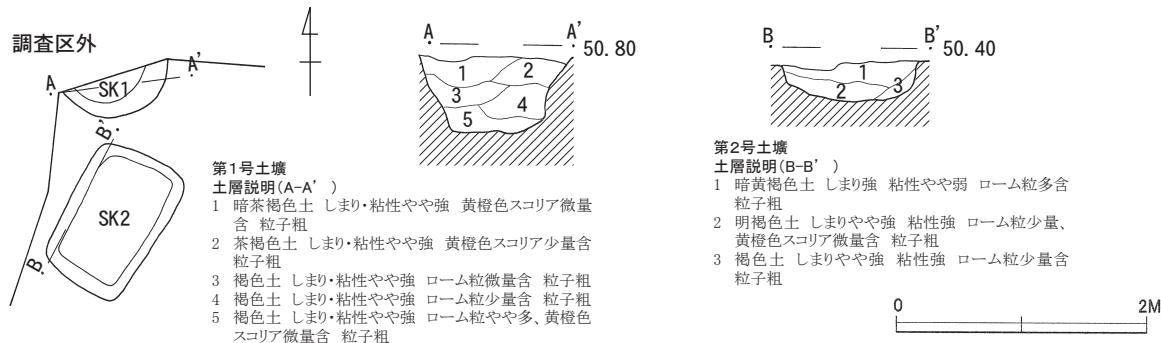
調査区の東側に南北方向に検出された。途中区域外になるものの連続した直線的な溝と思われる。長さ14.5m×幅1.2m以上を測る。主軸はN-21°-Eの方位をもつ。出土遺物は土師器等の細片が少量出土している。掘鑿時期は不明である。

柱穴跡 P 1・P 7・P 8・P 10 （第52図・第66図）

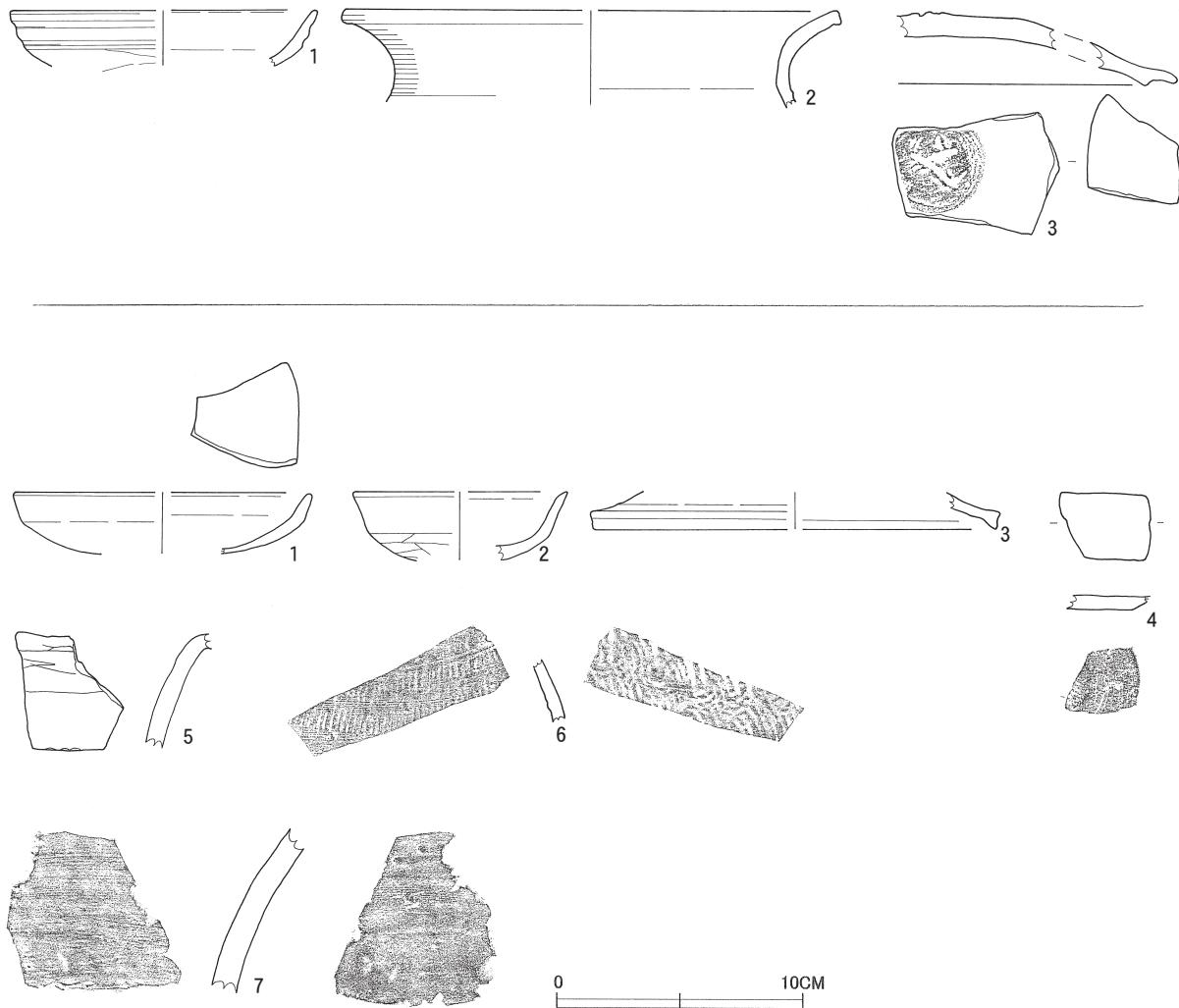
第1号溝の西側に沿うように柱穴跡が確認された。P 1・P 7・P 8・P 10などである。これらの柱穴跡は土層観察の結果柱跡が確認されたことや堀方等の類似から建物跡を構成する柱跡の可能性が高い。柱穴間の距離は、柱穴の芯芯でP 1-P 7間3.2m、P 7-P 8間3.2m、P 8-P 10間2.1mである。

第1号土壙 S K 1 （第52図・第67図・第68図 表19）

第1号土壙は調査区北側で半分を調査しているが、平面形は1mの円形をしている。深さ0.7mであった。覆土は5層に分けられ、土師器甕2　須恵器蓋3などが出土している。須恵器蓋はつまみが剥離しており、剥離面に接着を増すためのヘラ先痕が残っている。



第67図 宮脇遺跡第2次第1、2号土壤実測図 (1/60)



第68図 宮脇遺跡第2次土壤・ピット包含層出土遺物 (1/3)

第2号土壤 SK2 (第52図・第67図・第68図 表19)

第2号土壤は調査区北側、第1号土壤に接して検出された。平面形は $1.1 \times 0.8\text{m}$ の長方形をしている。深さ0.17mであった。覆土は3層に分けられ、遺物は出土していないようである。

第3号土壙 SK 3 (第52図)

第3号土壙は調査区北側で第2号土壙に接して検出された。平面形は長軸×単軸が1.7×1.3mの方形をしている。深さ、覆土の情報はない。検出された位置から、1～3号土壙は3号住居跡の床下土壙である可能性もあると思われるがはつきりしない。

第4号土壙 SK 4 (第52図)

第4号土壙は調査区南側で一部分を調査された。平面形は長軸×単軸が1.2×0.7mの不整形をしている。深さ、覆土の情報はない。2号住居跡を切って造られている。この遺構からの出土遺物はない。

一括の遺物(第68図 表20)

古墳時代以降、奈良時代の須恵器破片などが出土しており、周辺部に住居跡等の遺構が広がるものと予想される。

第15表 西浦遺跡 第6号溝、ピット6・25・28・29、一括出土遺物観察表 (第31図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	かわらけ	(10.0)	-	-	A・B・E・I・N	B	にぶい褐	上位1/6	内外面煤付着(特に内面) 一括
2	かわらけ	-	-	-	E・I	C	にぶい黄澄	口縁の一部	一括
3	かわらけ底部	-	-	-	E・I	C	にぶい黄澄	底部の一部	Pit29
4	瓦器の鉢	30.5	12.3	12.7	A・B・D・G・N	B	暗灰黄	1/2	内外面共吸炭。一部須恵器化。Pit29
5	鉢(片口)	(17.6)	-	-	A・D	B	オリーブ	口縁の一部	内外面釉。第26D
6	鉢	(33.2)	(5.5)	-	A・B・E・I・N	B	暗灰	口縁の一部	一括
7	鉢	(30.0)	(3.4)	-	A・B・D・I・N	B	灰	口縁の一部	一括
8	鉢	(34.4)	-	-	E・I・J・M・N	B	にぶい橙	口縁1/14	一括
9	須恵質・甕	-	-	(20.4)	A・B・D・I・N	B	オリーブ褐	底部1/5	Pit28
10	須恵質・甕	-	-	(17.0)	A・B・D・I・N	B	暗灰黄	底部1/5	一括
11	大甕	-	-	-	A・B・D・E・I・N	B	にぶい赤褐	胴部の一部	一括
12	湯のみ茶碗	(7.6)	4.0	-	-	B	-	1/5	第26D
13	陶器高台椀	(13.0)	5.0	(3.2)	A・B・I・N	B	浅黄	1/5	内外面釉。第26D
14	鉢	-	-	(10.0)	B	A	明緑灰	底部1/13	内外面釉。第26D
15	鉢	(15.2)	(3.4)	-	A・B・D・N	B	暗赤褐	口縁の一部	内外全面釉。第26D
16	鉢	(26.4)	-	-	A・B	B	灰白	口縁部1/10	内外面釉。
17	瓦器の鉢	(29.8)	3.7	-	A・B・E・I・G・N	B	灰褐	口縁の一部	Pit6
18	火鉢	-	-	-	A・B・C・D・I・N	B	橙	胴部の一部	Pit25
19	灯明皿	(10.4)	-	(4.2)	A・B・E	B	赤褐	1/4	内外面釉。第26D
20	瓶子	-	-	5.0	I・N	A	にぶい黄澄	下半のみ	外面釉。一括

25	土師器・甕	(16.3)	-	-	A・B・D・E・G・H・I・N	B	内:にぶい黃橙 外:にぶい橙	口縁・1/8	
26	土師器・小壺か	(13.8)	(5.2)	-	A・B・E・H・I・N	B	内:黒褐 外:黒褐	口縁	
27	土師器・甕	16.5	(20.3)	-	A・B・E・H・I・N	B	内:橙 外:橙	3/5	
28	土師器・羽口	(2.1)	-	-	A	B	内:赤褐 外:赤褐	先端・1/3	
29	土師器・壺	-	(5.5)	-	A・B・I・N	B	内:明赤褐 外:明赤褐	口縁・1/5	
30	円盤状土製品	-	-	-	A・B・E・G・I・K・N	B	内:にぶい赤褐 外:橙	1/4	半径(5.9)、厚さ1.4
31	須恵器・甕	-	-	-	A・B・D・E・F・H・I・N	B	内:灰 外:灰	破片	口頸部接合痕。
32	土師器・羽口	-	-	-	A・B・E・N	B	内:黒褐 外:明赤褐		長さ(9.5)、幅(5.1)
33	須恵器・甕	-	-	-	A・B・F・I・N	B	内:灰 外:灰	破片	
34	須恵器・杯	-	(1.7)	-	A・D・E・F	B	内:灰オリーブ 外:暗灰黃	底部	骨針。南比企産。
35	須恵器・杯	-	-	-	A・E・F・H・I・N	C	内:灰白 外:灰白	底部	回転糸切+回転ヘラ。骨針。南比企産。
36	須恵器・甕	-	-	-	A・F・H・I・N	B	内:灰 外:にぶい褐	破片	
37	須恵器・甕	-	-	-	A・B・E・I	B	内:青灰 外:青黒	破片	内側:タール状物質付着。外側:灰釉有。
38	須恵器・甕	-	-	-	A・B・D・E・F・I・N	B	内:青灰 外:青黒	破片	内側:タール状物質付着。
39	須恵器・甕	-	-	-	A・B・E・F・I・N	B	内:にぶい褐 外:にぶい褐	破片	
40	須恵器・甕	-	-	-	A・B・D・E・N	B	内:青灰 外:青黒	破片	

No.	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	残存率	形状	研磨	敲打	凹	備考
41	砥石	泥岩	6.6	3.2	1.5	39.3	a	Ⅲ類a				
42	有孔円盤の未製品か	滑石	2.2	2.4	0.7	6.0	a	I類b				石製円盤の未製品。一部研磨有。

第19表 宮脇遺跡2次 SP1、SK1出土遺物観察表（第68図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(12.6)	-	-	A・B・I・K	B	内:橙 外:橙	口縁・1/8	SP1
2	土師器・長甕	(19.9)	(3.8)	-	A・B・E・I・K・N	B	内:にぶい褐 外:にぶい橙	口縁・1/4	SK1
3	須恵器・蓋	-	-	-	A・B・E・K・N	B	内:浅黄 外:浅黄	破片	土師質須恵器。 SK1

第20表 宮脇遺跡2次 包含層出土遺物観察表（第68図）

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1	土師器・杯	(12.2)	(2.5)	-	B・D・I・K	B	内:にぶい橙 外:にぶい橙	口縁・1/9	
2	須恵器・杯	(8.8)	-	-	A・D・N	B	内:黄灰 外:黄灰	口縁・1/6	表面に自然釉有。
3	須恵器・蓋	(16.3)	(1.5)	-	A・I・L	A	内:黄灰 外:黄灰	口縁・破片	
4	須恵器・椀	-	-	-	A・B・F・I	A	内:綠灰 外:綠灰	破片	
5	須恵器・甕	-	-	-	A・F・H・L	C	内:灰 外:灰	破片	
6	須恵器・甕	-	-	-	A・D	B	内:褐灰 外:灰	破片	
7	須恵器・甕	-	-	-	A・D・N	B	内:灰 外:灰	破片	

第21表 宮脇遺跡2次 第1号住居桃観察表

No.	完形品								平均	
	6	27	8	13	16	26	31	40	51	
長さ	1.86	2.08	1.83	1.76	2.32	2.01	2.30	1.92	1.95	2.00
幅	1.45	1.67	1.47	1.50	1.96	1.53	1.54	1.42	1.44	1.55
厚さ	1.20	1.32	1.18	1.22	1.66	1.39	1.31	1.12	1.13	1.28

VI 諏訪脇遺跡の調査

1 発掘調査の概要

調査にいたる経過 諏訪脇遺跡は、今回の発掘調査が最初の機会であり、旧江南町教育委員会の手で行われた。調査地点は岡田氏の住宅新築に先立ち行なわれたもので、新築場所での試掘調査により遺構が確認されたが、現状での保存が困難なことから岡田氏から埋蔵文化財発掘届の提出を受け、平成11年9月7日付 江南教発第2245号で発掘調査通知を提出した。発掘調査は平成11年9月16日より同年9月30日まで、旧江南町教育委員会文化財担当者を調査担当者として実施された。現場には作業員を投入し遺構の確認を進め、遺物包含層を掘り進めて行った。調査終了後は住宅の建設がされている。

発掘調査地区は遺跡の南限に当たる台地斜面の下位で、通常このような斜面下位では、上位からの堆積で現在は傾斜が緩くなっているが、当時は傾斜があり、古代住居は斜面部を段切し斜面下位に排土することで平坦地を作り出している。そのため、斜面下位で発見される住居は斜面上位の掘り込みを残し、下位側が流失している片流れの遺構が多く、保存状態が良くない場合が多い。そのため現況での保存は難しく、調査自体も注意が必要になる。

発掘調査・整理報告作業の経過 今回の発掘調査は面積296m²の区域に、堅穴住居跡2軒、土壙2基、柱穴状の小穴多数を検出した。なお、現地形と斜面の傾斜は、上位と下位の落差とすると12mの距離で0.7m程であった。

諏訪脇遺跡は元境内遺跡と宮脇遺跡の間を埋める遺跡で、両遺跡の所在する江南台地の南縁部野原地域は、野原古墳群の西側に本田・東台遺跡が東側には宮脇・山神・諏訪脇・元境内・熊野・荒神脇・丸山遺跡と遺構の集中、疎放の差はあるが、古墳時代以降古代集落として、広く開墾されていたと考えができる。基準点測量及び地形測量を委託業務として発注実施している。この発掘調査は、江南町が平成13年度の文化財関係国庫補助事業を受けており、国1/2 埼玉県1/4 江南町1/4の費用負担を行っている。

整理報告書作成作業は江南町が平成19年に熊谷市と合併したことから、これを熊谷市教育委員会に引き継ぎ、平成20年度の熊谷市埋蔵文化財保護事業として実施した。事務組織等は次のとおりである。

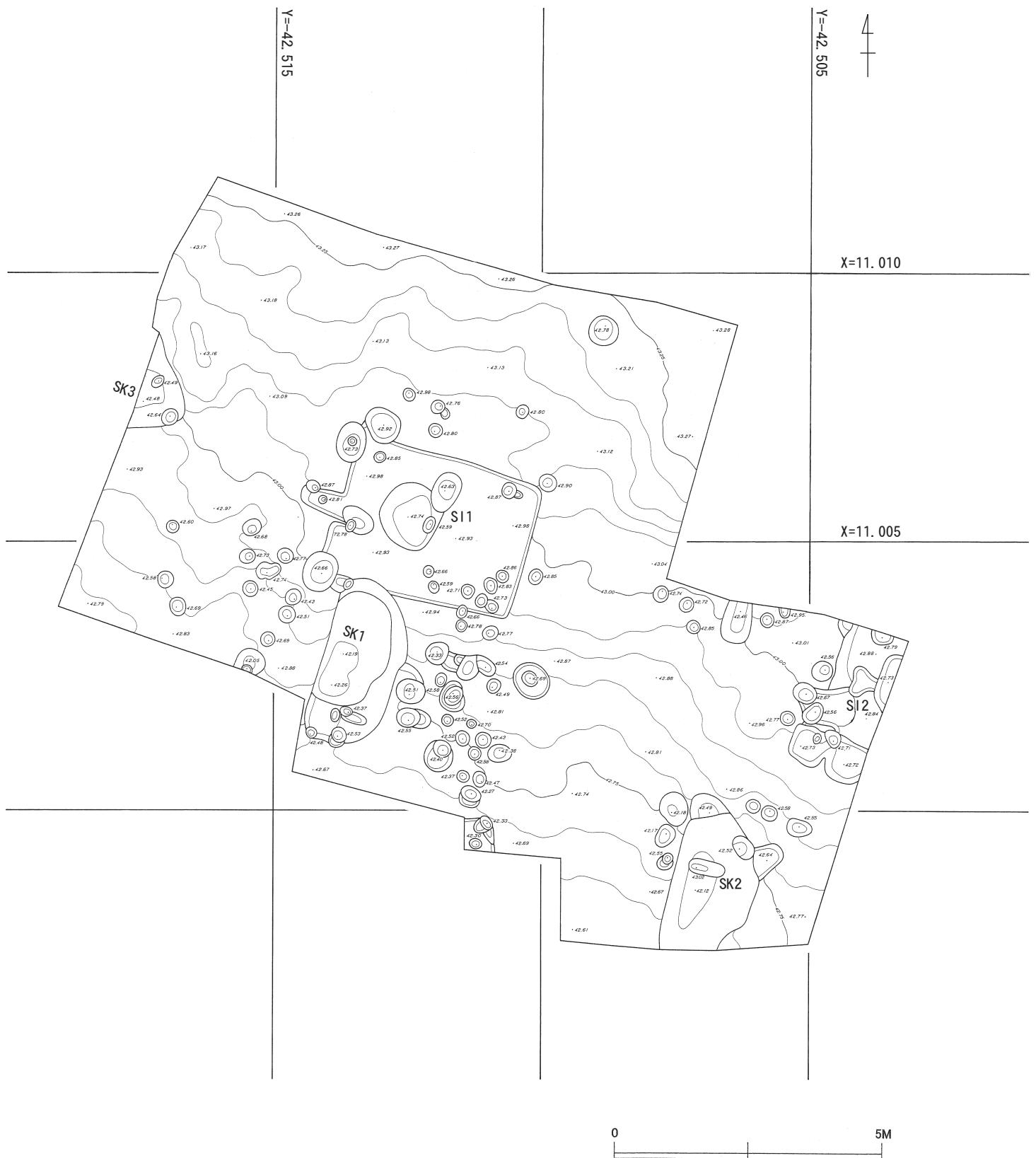
発掘調査の組織 諏訪脇遺跡の発掘調査は旧江南町教育委員会が下記の組織で実施し、整理報告書作成は合併後の熊谷市教育委員会でこれを実施した。当該年度の組織・人員配置は次のとおりであった。

諏訪脇遺跡発掘調査の組織（平成11年度） 発掘調査

主体者	江南町教育委員会	
事務局	教育長	岡部 弘行
	教育次長	大久保光司
	文化財担当	森田 安彦

諏訪脇遺跡発掘調査の組織（平成20年度） 整理・報告書作成

主体者	熊谷市教育委員会	※ 省 略（5頁の組織と同一）
-----	----------	-----------------



第69図 諏訪脇遺跡 遺構配置図 (1/100)

2 諏訪脇遺跡の立地と環境

立地と環境（第32図） 諏訪脇遺跡を取り巻く環境については、今回報告する野原地区の3遺跡をみると互いに隣接し地域一帯に広がるので、元境内遺跡・諏訪脇遺跡にて説明したことと基本的に変わらない。ただ、諏訪脇遺跡については、地名とその位置についての視点から少し記しておきたい。元境内遺跡・諏訪脇の章に触れたように、野原地区には古代末から中世期まで能満寺という寺院があったとされ、その記憶や遺構から後世に関連地名が派生したと考えている。

諏訪脇とは諏訪神社の脇、隣接（北側）という由来の地名だが、これは宮脇が八幡神社の隣接地に所在するのと同一の認識によると考えられる。ただ、諏訪神社自体は周辺には無くその伝承も明らかではない。また、後世の合祀の可能性もあるが、通例諏訪神社の祭神とされるタケミナカタ命は野原八幡神社と摂社にも見られないで由来が不詳である。ただ、八幡神社は江戸時代初期に当地を宰地とした旗本稻垣氏が整備したと伝えられており、同じ領地であった隣村の須賀広八幡神社も同様である。諏訪脇地名の北は山神、南は道祖神、西は宮脇、東は寺裏・元境内であることを考えると神仏のかかわりが強く感じられる。野原地区の小字地名の特徴といえる神仏やその施設にかかる地名がまとまりを持って分布していることの背景を知ることは、地域の考古学的調査を重ね少なくとも能満寺の伝承を確かめることから始まるだろう。また、未報告となっている野原経塚（野原古墳）などもあわせて進めたい。

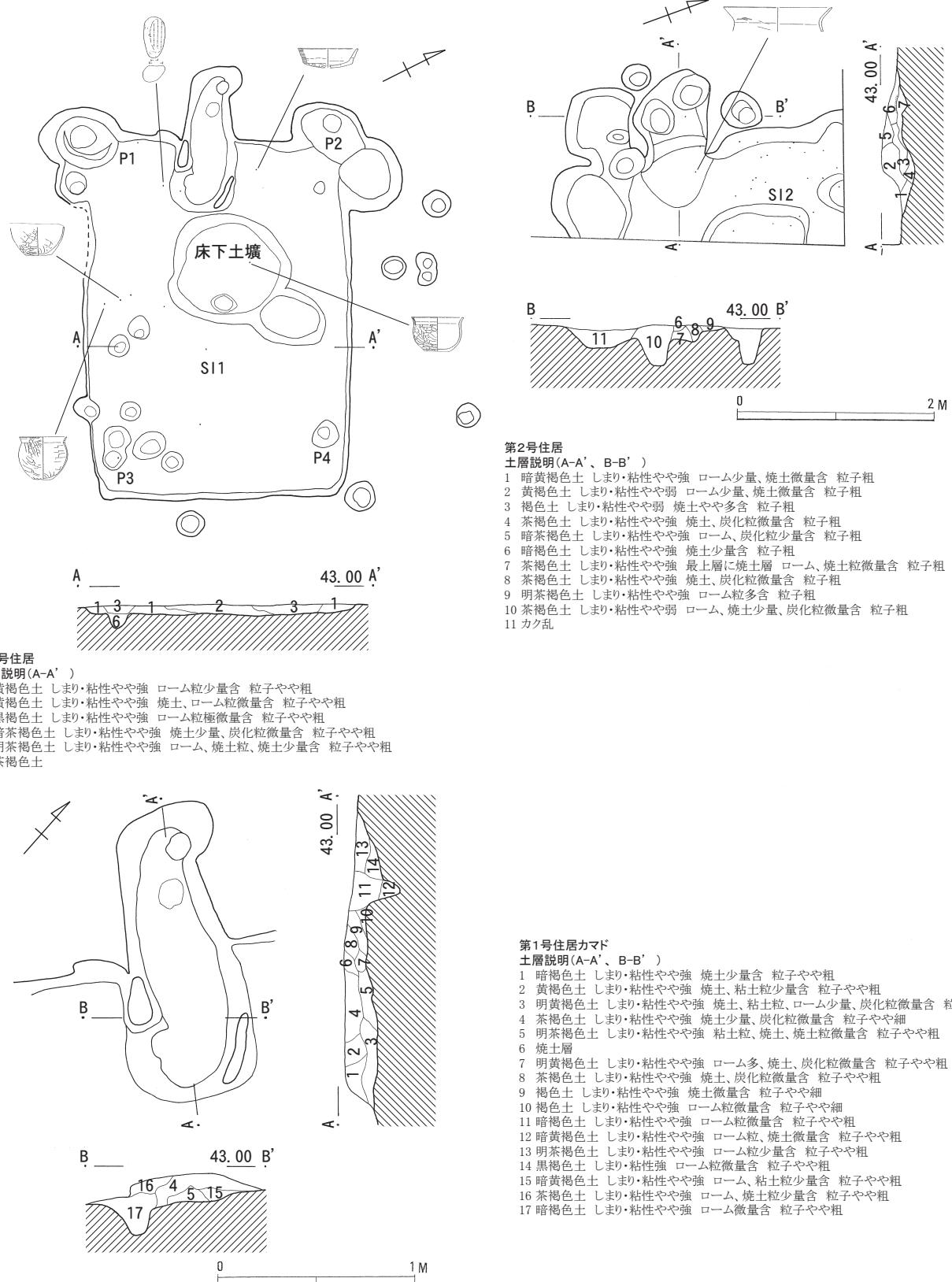
調査の方法 調査地点は標高42～43mの緩斜面で、茶褐色系のローム土混じりの耕作土を除去した後、遺構の掘り下げを行った。確認された遺構は竪穴住居跡（S I 1～2）・溝1条（S D1）・土壙（S K1～3）のほかに柱穴状の小穴が認められた。遺構の実測図化はトータルステーションにて行なっている。報告書作成作業は、旧江南町時代に水洗註記を済ませてあったので、実測遺物の選別後、図化作業を進め組版報告原稿の執筆・遺物の写真撮影を行った。

3 検出された遺構と遺物

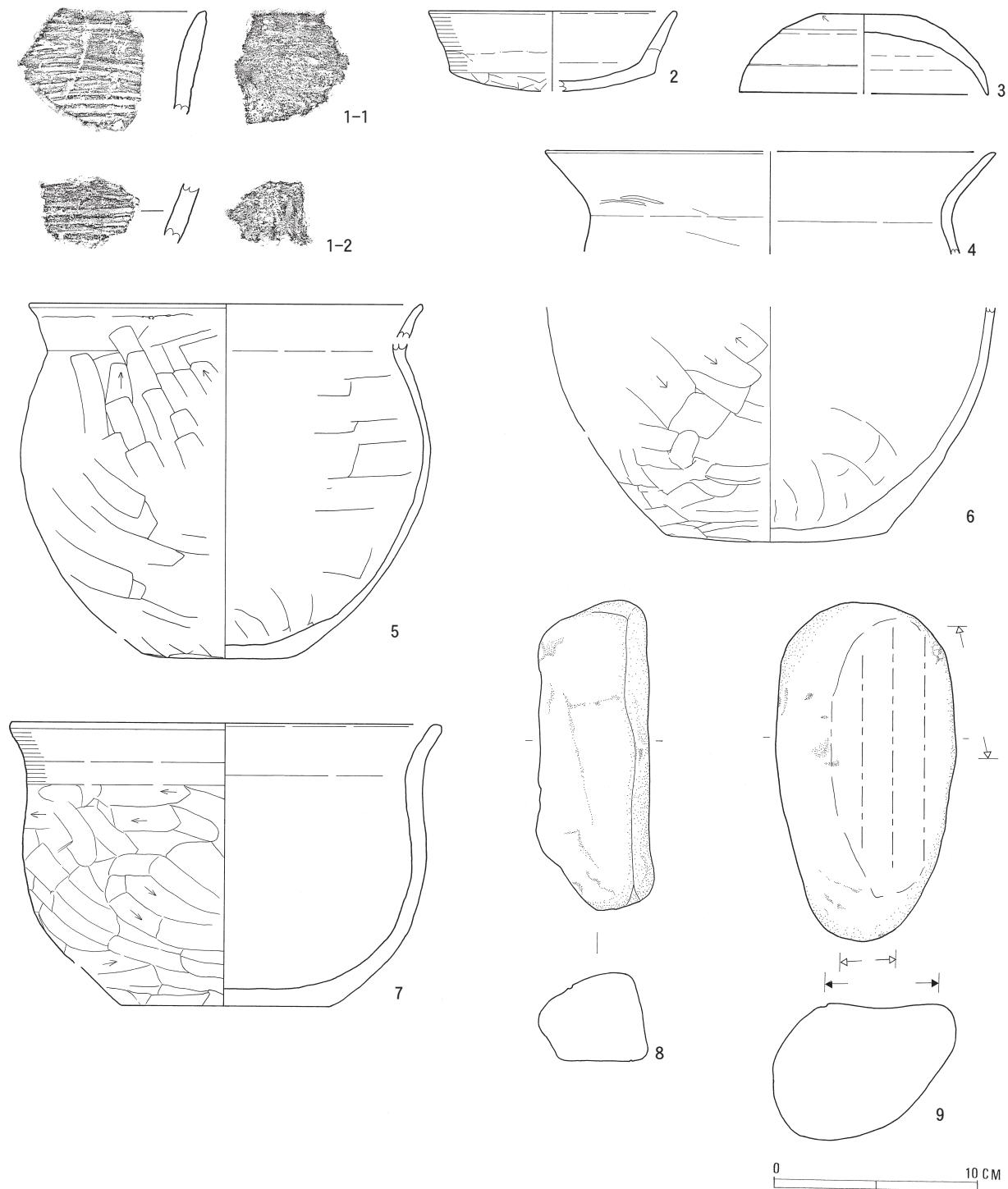
調査地点の概要を第32図 諏訪脇遺跡の地形と調査地点図及び第69図遺構配置図で整理し説明する。調査地点は台地部縁辺が和田川に沿い張り出す部分に位置し、背後の台地斜面がやや急斜面となる場所の下位斜面に2軒の住居跡が検出されたものである。竪穴住居跡はいずれも古墳時代後期で他の遺構との切り合いが多く、確認面からの覆土が薄いため遺存状況はあまり良くなかった。住居跡はほぼ方形を呈すが、1号住居跡S I 1は全体を確認できたが、2号住居跡S I 2は西側の一部しか検出していない。2基の不定形土壙S K 1・2は、ほぼ楕円形をしている。また、性格不明の柱穴状の小穴が数多く見つかっているが、同所は畠地であったことから、耕作に伴う掘削痕も混じえているようである。

第1号住居跡 S I 1（第69図・第70図・第72図）

調査区の中央付近に検出され、住居跡の全体を調査している。ほぼ方位に沿って造られている。搅乱が多いが住居の規模は、3.6×2.8mで斜面に沿い東西に長い長方形をしている。カマドは西壁の中央付近に造られている。主軸はカマドを通るものとしてN-74°-Wの方位をもつ。壁の掘り込みは北壁で8cm残っている。床は直床でほぼ平坦となっており柱穴状の小穴が11か所確認された。主柱穴は特定されてい



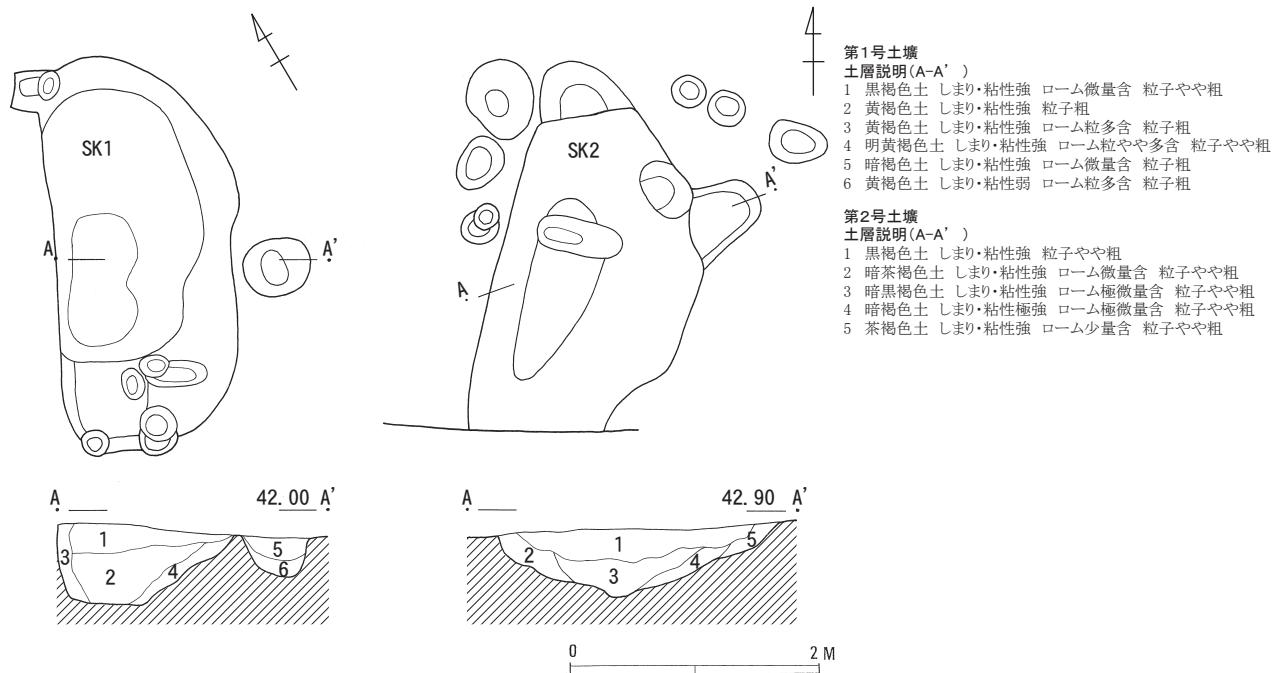
第70図 諏訪脇遺跡第1、2号住居実測図(1/60)、カマド実測図(1/30)



第71図 諏訪脇遺跡第1、2号住居一括出土遺物 (1/3)

ないが、西壁隅にカマドを挟んで対置するP1とP2、及び東壁隅の床に検出されたP3とP4が主柱穴に当たると推定される。P1-P2間の距離は2.6m、P3-P4間の距離は2.2m、P1とP3間は3.3mを測る。カマド前面の床に位置する2個の掘り込みは床下土壙である。1号土壙は直径1.1m、深さ0.3mを測る。2号土壙は60×50cm楕円形を呈する。遺物は床面上から土師器杯・甕が、床下土壙からは土師器甕が出土している。

カマド跡（第70図）は、長さ1.5m×幅0.6mを測る。壁より0.8m伸びている。燃焼部が壁にラインに位置するカマドで燃焼部から煙道には緩やかに移行する。ただし、煙道部との境は明確ではない。左袖部



第72図 諏訪脇遺跡第1、2号土壌実測図 (1/60)

分に小穴があるが、石材などの袖部材を埋め込んだ跡であろう。右袖は残らないが、作り付けのカマドとされる。焚口部前面の幅は0.6m、長さ0.56mで、浅い皿型をしている。

出土遺物（第72図 第22表）

遺物が少ないうえに細片が多く、実測可能の遺物は図示した7個体の土器・石器である。

縄文土器 1-1・2-2は縄文時代早期条痕文系土器で茅山上層式である。同時代の遺構は調査区からは発見されていないが、斜面上位に同時代の遺跡が存在することが予想される。

2は杯型土師器で口縁部が高く外反する。口径は12cm。5～7は広口の甕で器高より口径が上回る。8.9は砥石利用の川原石である。

第2号住居跡 S I 2 (第69図・第70図・第72図)

調査区の東隅に検出され、住居南西隅部を確認している。土壌などの搅乱が入るため遺存状態は良くない。住居とされるが、壁ライン不明瞭で住居形態が捉えきれず、主軸は不明である。確認された規模は約2.1×1.0mである。隅部の乱れのため、壁のたちあがりは不明であるが、覆土は10～8cm確認された。床面は搅乱のため保存状態が悪く、柱穴など不明。床面には床下土壌が検出されている。

出土遺物（第72図 第22表）

3は須恵器蓋で半球形を呈する。TK10段階であろう。4は長甕の口縁部である。

第1号土壌 SK1 (第69図・第71図)

第1号土壌は、1号住居跡の南側に同住居を切って造られている。南北軸を長軸とするほぼ隅丸方形の形態をとるが東側から北側がかなり歪んでいる。南側で一段テラスを設けるためすり鉢状の掘り込みとなっている。規模は3.2×1.4m、深さ0.7mを測る。覆土は大まかに2層で、遺物は出土していない。

第22表 諏訪脇遺跡 第1・2号住居出土遺物観察表 (第72図)

No.	器種	口径	器高	底径	胎土	焼成	色調	残存率	備考
1-1	縄文・甕	-	-	-	A・B・K	B	内:橙 外:橙	破片	条痕文土器2片。茅山式。
1-2	縄文・甕	-	-	-	A・B・K	B	内:橙 外:橙	破片	条痕文土器2片。茅山式。
2	土師器・杯	(12.2)	(3.9)	-	A・D・E・G・I・K・N	B	内:橙 外:にぶい黄橙	1/3	SI1
3	須恵器・蓋	(12.2)	(3.9)	(4.8)	A・E・N	B	内:にぶい黄 外:にぶい黄橙	1/2	SI2
4	土師器・甕	(21.8)	(4.9)	-	A・B・K	B	内:橙 外:橙	口縁	風化マメツ。 SI2
5	土師器・壺	(19.2)	(17.3)	7.5	A・B・I・K・N	B	内:灰黄褐 外:にぶい黄橙	1/2	SI1
6	土師器・壺	-	(11.5)	(10.6)	A・B・D・E・F・G・I・N	B	内:灰黄褐 外:にぶい黄橙	底部	SI1
7	土師器・壺	(21.0)	13.8	10.2	A・B・D・E・G・H・I・N	B	内:黄褐 外:灰黄褐	1/2	煤付着。 SI1

No.	器種	石材	最大長	最大幅	最大厚	重量	残存率	形状	研磨	敲打	凹	備考
8	編物石か砥石?	泥岩	15.1	5.9	4.5	630.0	a(無欠損)	VII-a	無	無	無	棒状の盤状。 SI1
9	砥石?	(中~細粒)砂岩	16.6	8.8	6.9	1410.0	a(無欠損)	II-b	②片面	有	無	橢円形の橢円形。 SI1

第2号土壙 SK2 (第69図・第71図)

第2号土壙は、2号住居跡の南側に検出された。重複関係はなく、南側の一部は調査区域外に延びている。周囲に柱穴状の小穴が配置するが、本土壙に伴うものかは判断しがたい。平面形は不正隅丸方形をしている。規模は2.9×1.65m、深さ0.5mを測る。覆土は5層に分けられが、大略2層で、遺物は出土していない。1. 2号土壙は規模形態に類似性が認められるものの、その性格を示す遺物が無い状況であるが、共通した目的により作られたものと思われる。

第3号土壙 SK3 (第69図)

第3号土壙は、調査区の西側で検出された。重複関係はなく、西側の一部は調査区域外に延びている。平面形は不正隅丸方形をしている。規模は1.6×1.1m、深さ0.6mを測る。遺物は出土していない。1. 2号土壙に規模形態の類似性が認められるものの、その性格を示す遺物が無い状況である。

柱穴群 (第69図)

調査区の一部に柱穴状の小穴が集中して検出されている。直径は20から30cm代のものが主であり、互いに重複近接しあう。建物跡とすることは調査者もしていないが、同一地点で繰り返しおこなわれる土地利用による掘削としたら、農作業などで使われた簡易な建物であったかもしれない。

VII 小 結

江南台地から旧大里条里帯を走る主要な河川あった和田川の流域には、源流付近に位置する「塩古墳群」から、台地東端部に位置する「とうかん山古墳」まで多くの古墳群や、地域首長の古墳が造られている。この地域では、弥生時代中期後半以降から谷津田を対象とした小規模な開発が進む一方、もう少し早くから低地では開発が進み集落が自然堤防上に形成されている。古墳時代は、低地とともに台地上の開発も一気に進むものと思われ、和田川流域の台地縁部には、上流から塩古墳群 野原古墳群 瀬戸山古墳群 三千塚古墳群 箕輪古墳群 東山古墳群などの主要古墳群が形成され、小規模ながら前方後方墳、前方後円墳が主墳として築造される。特に「雷電山古墳」「とうかん山古墳」は、5世紀前半代、6世紀後半と時期は異なるが、本地域最大の規模を持ち、同時期の埼玉古墳群の首長墓に匹敵することから、当地域に出現した勢力の基盤となる生産活動や領域の実態に興味が湧く。ここで言う領域とは、小首長を戴く集団の生産活動のまとまりとしての水域・耕地の広がる範囲、及び彼らの直接支配の及ぶ範囲を想定するものだが、律令制施行後の郷里～郡程度の範囲に重なるものと推定する。

野原古墳群は現存24基の古墳群であるが、片袖型横穴式石室2基を持つ前方後円墳が調査され、当地域での本格的埴輪祭祀のおこなわれている古墳である。出土埴輪は円筒埴輪をはじめ・武人・馬・巫女・踊る埴輪などの形象埴輪が多数確認されている。おそらく当地方で同時期に確認されている姥ヶ沢埴輪窯や権現坂埴輪窯跡の生産品であろうが、野原古墳の被葬者はこの埴輪生産に深く係わっていたのではないかと考えたい。また、野原古墳群の足下の集落である本田東台遺跡では同時期の小鍛冶遺構や鉄製品の発見や出土例が4件あり、今回調査の元境内遺跡でも検出されており、集落内での鉄器加工生産は開発の伸展とともに必要とされたものであろう。地域全体で見ても既に五世紀初頭の鍛冶遺構が検出された行人塚遺跡のように、かなり早い段階で開始されていることは注目される。古墳時代中～後期には鉄器の一部は埴輪とともに貢納や交易のルートを通り、他集落へと運ばれたものがあつただろう。貝巣穴泥岩・須恵器・滑石石材などは当地へもたらされた物品の一部である。また、宮脇遺跡第1号住居跡からは同時期の比較的まとまった土師器が出土しており、中にはいわゆる小針型杯といわれる口縁部が大きく外反し、身の浅い大型の杯が1点混じっているが、埼玉古墳群の足下の集落からもたらされたものであろう。また、宮脇遺跡1号住居跡からは、桃類と推定される炭化種子が多量に出土しており、単なる廃棄というより住居跡の廃絶に伴う祭祀などに使用されたものとの推定されよう。集落の周りには桃の木類の林が広がっていたのかもしれない。

大里条里帯を眼前にする箕輪遺跡からは、おそらく条里施行以前から耕地が開かれ、同時期の集落の一部が自然堤防上に形成された下田町遺跡から発掘されている。箕輪地区には箕輪遺跡・中廓遺跡・北廓遺跡・とうかん山古墳などの弥生時代以来の重要な遺跡があり、当領域の拠点的な集落のひとつであったろう。大里南部遺跡群として発掘された船木遺跡・円山遺跡・大境南遺跡など成果と考え合わせることで甲塚古墳・とうかん山古墳の首長墓出現に迫れるものと考えている。

古代～中世期には、先に触れた大里条里帯が施行されていたが、記録に残る「武藏国大里郡条里坪付」により、現地批定への試みとしていくつかの復元図が案出されているが、いまだ確定できるものではない。おそらく当地を通過していると推定される「東山道武藏支路」が一つのキーポイントになるとを考えているが、本古道や関係する「厩」や「牧」遺跡もまだ発見されていない。この道路は、奈良時代末に公道としては廃止されたが、地域の主要道路として中世期まで存続し、熊谷直実譲り状にみえる所領「熊谷郷」西

側を画する「大道の古道」ではないかと考えられる。このことから、中世期に地域の経済圏の中心として発達した村岡宿に市が開かれ、人馬・物資が集散した。西浦遺跡の位置は当時の春野原荘「平塚郷」あるいは「恩田御厨」に相当すると推定されるが、春野原荘の重要性は荒川を渡る要衝としての軍事拠点であったこともやや時期が下るが、南北朝期から戦国時代の戦時にたびたび軍陣が通過し駐留していることからも窺える。西浦遺跡では渥美産の甕や瀬戸産の擂鉢や碗などの交易陶磁器が出土しており、柱穴跡のあるものは建物跡であった可能性もあり、古街道ルートに位置する遺跡として注意される。

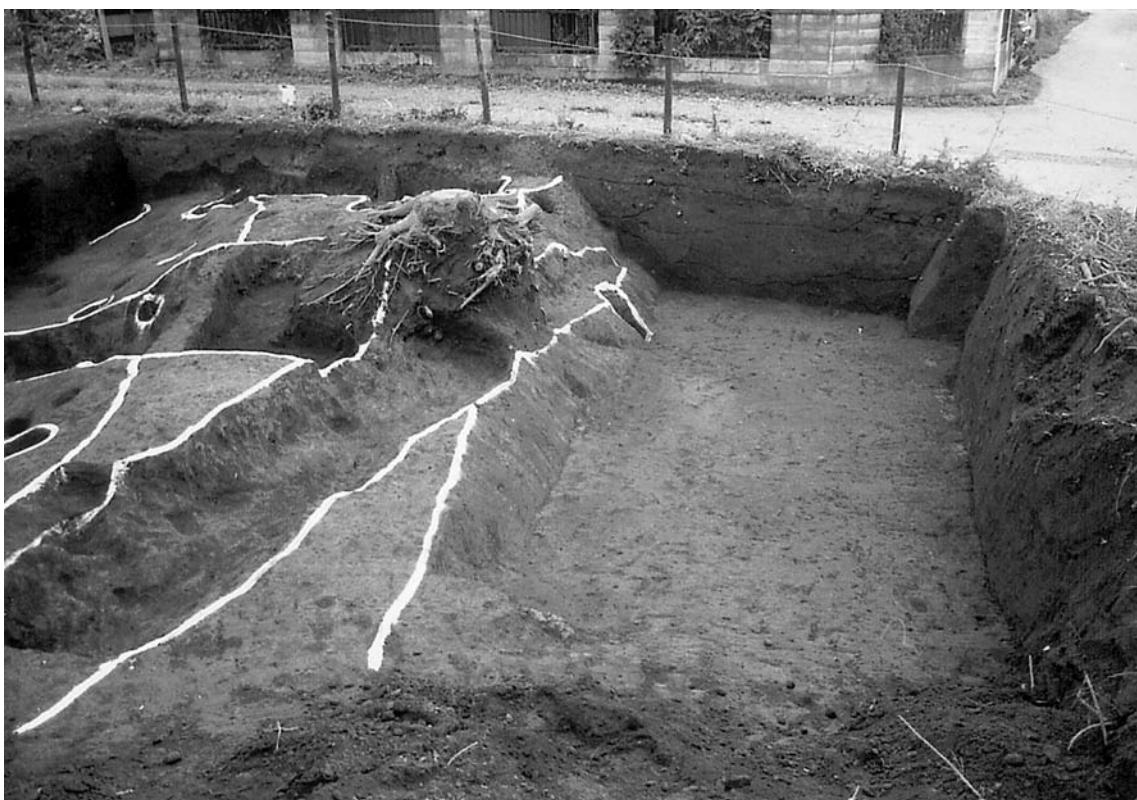
箕輪遺跡からも中世期の遺物や、居館跡と推定される堀・溝が確認されるが、現状ではその規模・構造を把握することは難しい。おそらく、とうかん山古墳などは居館の縄張に取り込まれ、土壘や物見台に利用されただろう。甲山古墳は豊臣秀吉の後北条氏制圧にかかる武州松山城攻略の際に、上杉勢の本陣が置かれたとされる。甲山が陣所とされたのは天正十八年以前も、永禄五年と天正十年に北条氏直の軍陣がおかれていた。甲山地域を通る鎌倉街道は上州へ通ずる往路で村岡付近から荒川を渡河したのである。居館の主に関する伝承などは特に伝わらないが、箕輪遺跡の数次にわたる堀・溝の掘削時期は出土遺物の示す16世紀後半と考えられ前記の事情を反映するものであろう。

参考文献

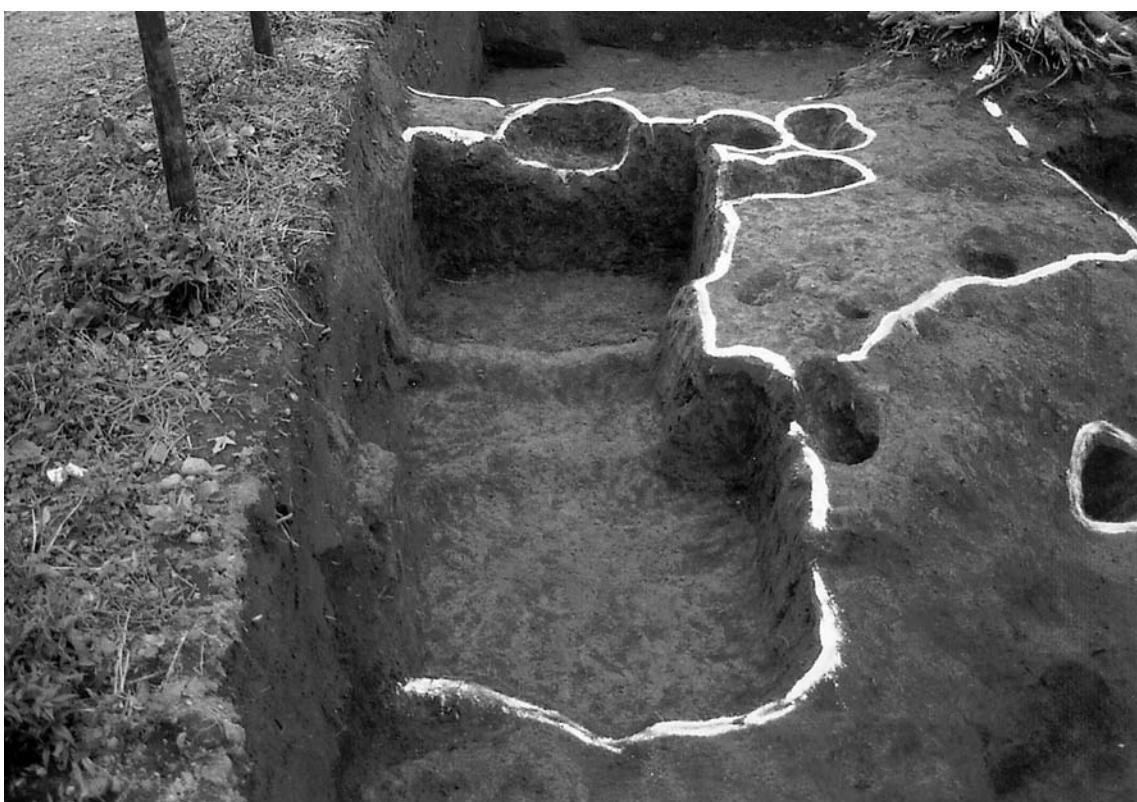
- 1974 野部秋徳 他 「熊野・荒神脇・下新田」 埼玉県遺跡調査会
- 1983 新井 端 「本田・東台遺跡Ⅱ 上前原遺跡」 江南町教育委員会
- 1988 出縄 康行 「北廓遺跡」 大里村教育委員会
- 1988 埼玉県教育委員会 「埼玉の中世城館跡」
- 1990 大里村 『大里村史』
- 1991 菅谷 浩之 他 「万吉下原」 埼玉県教育委員会
- 1995 江南町 『江南町史 資料編1 考古』
- 1997 出縄 康行 「大里南部遺跡群 I」 大里町教育委員会
- 1998 新井 端 「丸山遺跡」 江南町文化財調査報告書第11集 江南町教育委員会
- 2001 松田 哲 「瀬戸山遺跡・瀬戸山古墳群」 熊谷市教育委員会
- 2008 新井 端・寺社下博 「箕輪遺跡 上前原遺跡3次・4次」 熊谷市教育委員会
- 2009 新井 端 「文殊寺」 さきたま文庫

写 真 図 版

図版 1 箕輪遺跡



箕輪遺跡 4 次調査区、堀・溝跡



箕輪遺跡 4 次調査区、土壙跡

図版2 箕輪遺跡



箕輪遺跡 5次調査区、10号住居・1号溝跡



箕輪遺跡 5次調査区、1号井戸跡

図版3 箕輪遺跡



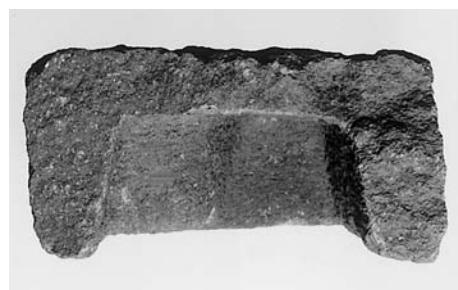
第6図21、20、24、27、19



第6図22



第7図30



第13図3、4



第12図49

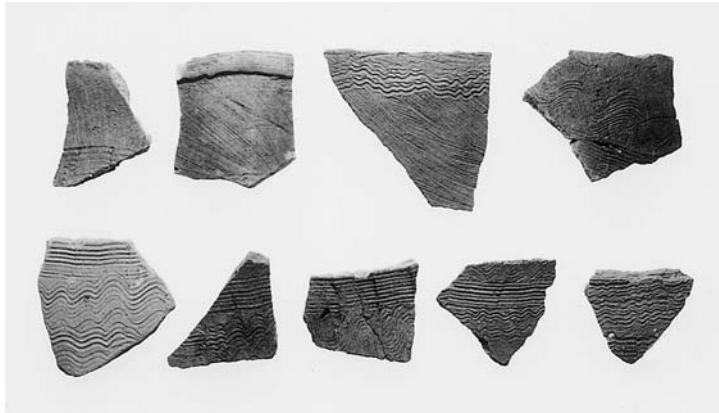


第12図38

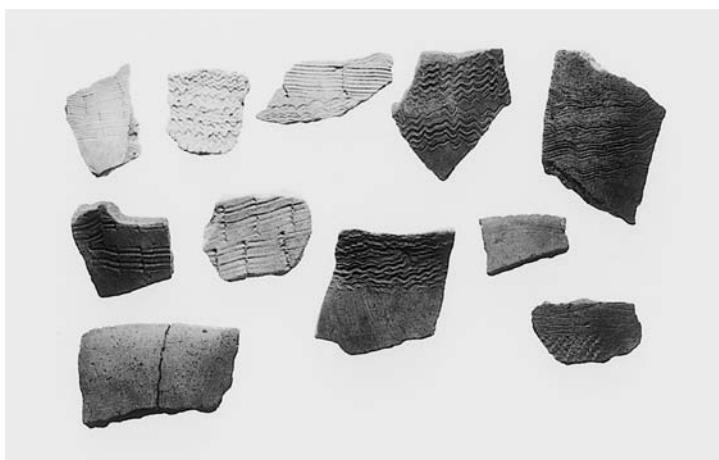


第12図50

図版4 箕輪遺跡



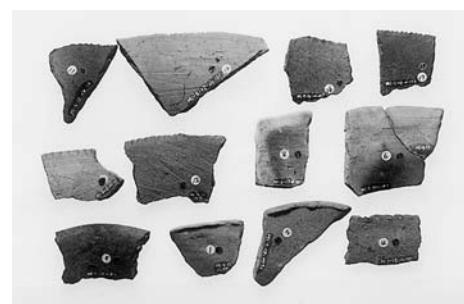
第11図 6～14



第11図 15～25



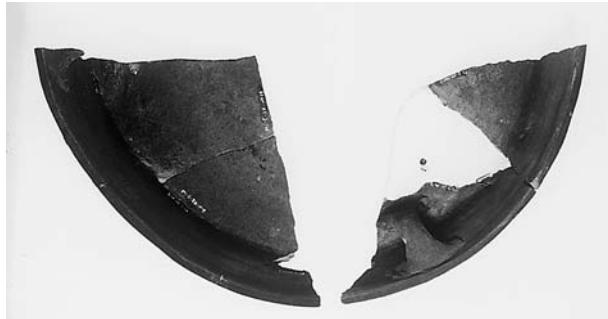
第11図 26～37



第12図 46～48



図版5 箕輪・中廓・西浦遺跡



第13図17



第16図 8



第16図 1、 2、 11



西浦遺跡調査区



西浦遺跡 9号土壤



西浦遺跡調査区西半部



西浦遺跡 4号溝跡



第31図 4

図版 6 西浦遺跡



第31図 5～8、11、12



第31図 13、15、16、
18、19、20



図版 7 元境内遺跡



元境内遺跡 4 次調査区



25号住居カマド跡



26号住居跡

図版8 元境内遺跡



29、30号住居跡



29号住居カマド跡



1号集石



1号土壤



地震痕跡

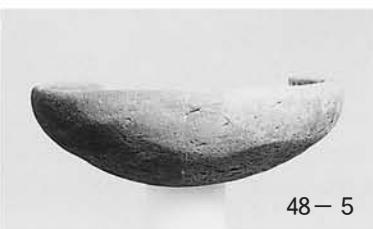


地震痕跡、土層

図版9 元境内遺跡



一括



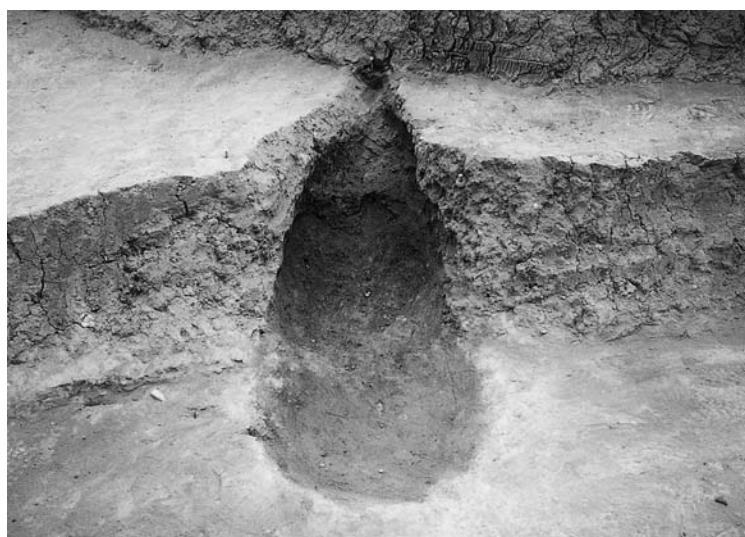
図版10 宮脇遺跡



2号住居カマド
遺物（高坏、支脚転用）
出土状態

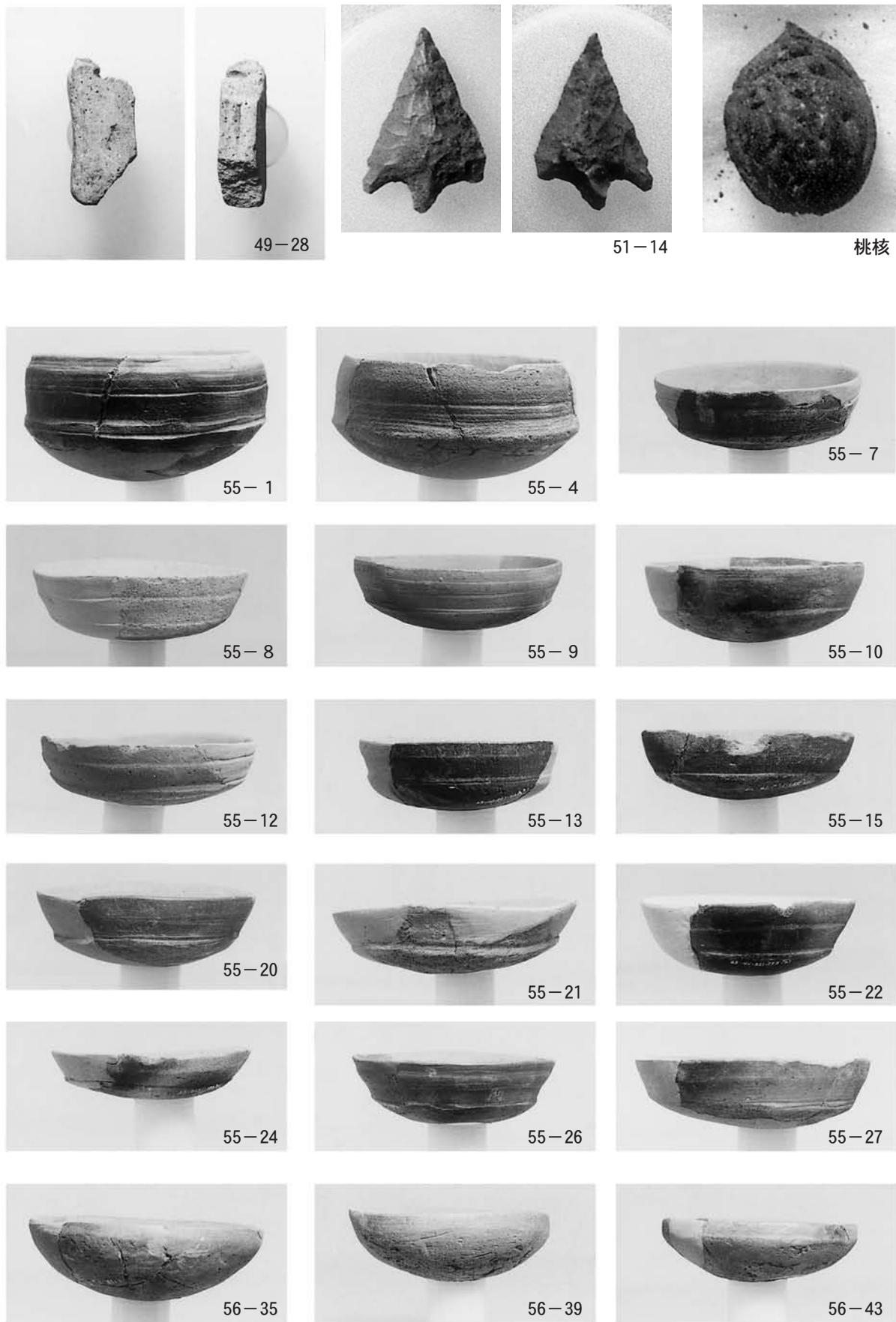


1号住居カマド土器出土状態



1号住居カマド跡

図版11 元境内・宮脇遺跡



図版12 宮脇遺跡



図版13 諏訪脇遺跡



1号住居跡



1号土壙 柱穴群



2号住居跡



第71図 5

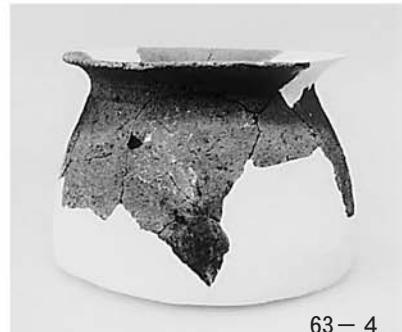


第71図 6



第71図 7

図版14 諏訪脇遺跡



報告書抄録

ふりがな	みのわ なかくるわ にしら もとけいだい みやわき すわわき							
書名	箕輪 遺跡 4次 5次 中廓 3次遺跡 西浦 遺跡 元境内 遺跡 4次 宮脇 遺跡 2次 諏訪脇 遺跡							
副書名	市内遺跡（旧大里町）Ⅱ・市内遺跡（旧江南町）Ⅲ							
卷次								
シリーズ名	埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
シリーズ番号	第4集							
編集者名	寺社下 博 新井 端							
編集機関	埼玉県熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-0107 熊谷市千代329番地 熊谷市立江南文化財センター TEL048-536-5062							
発行年月日	西暦2009（平成21）年3月21日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		世界測地系		調査期間 調査担当者	調査面積 (m ²)	調査原因
		市町村	遺跡番号	北緯	東緯			
みのわ いせき 箕輪遺跡 4次	くまがや し みのわ 熊谷市箕輪 ばんち 85番地3、 85番地8	0064	040	36° 5' 11"	136° 24' 52"	19981029 ～ 19981113 出繩康行	300.61	個人住宅 建設
みのわ いせき 箕輪遺跡 5次	くまがや し みのわ 熊谷市箕輪 ばんち 85番地11	0064	040	36° 5' 11"	139° 24' 52"	20000228 ～ 20000303 出繩康行	232.00	個人住宅 建設
なかくるわ いせき 中廓遺跡 3次	くまがや し みのわ あざなかくるわ 熊谷市箕輪字中廓 ばんち 192番地1	0064	041	36° 5' 4"	139° 25' 2"	20010316 ～ 20010326 出繩康行	80.00	個人住宅 建設
にしら いせき 西浦遺跡	くまがや し かみおん だ あざにしうら 熊谷市上恩田字西浦 ばんち 481番地5	0064	020	36° 7' 8"	139° 22' 41"	19980716 ～ 19980802 出繩康行	396.00	個人住宅 建設
もとけいだい いせき 元境内遺跡 4次	くまがや し のはらあざ くぼ 熊谷市野原字久保 ばんち 466番地1	0065	039	36° 6' 4"	139° 21' 38"	199991001 ～ 19991029 森田安彦	408.00	個人住宅 建設
みやわき いせき 宮脇遺跡 2次	くまがや し のはらあざみやわき 熊谷市野原字宮脇 79番地1	0065	041	36° 6' 16"	139° 21' 26"	20010701 ～ 20010801 森田安彦	200.00	個人住宅 建設

諏訪脇遺跡 す わ わき い せき	くまがやし の はらあざなかごう 熊谷市野原字中郷 ばんち 432番地13	0065	040	36° 6' 6"	139° 21' 24"	19990916 ～ 19990930 森田安彦	296.00	個人住宅 建設
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項			
箕輪遺跡 4次	集落跡	古墳・中世	古墳周溝 堀 1基 1条	土師器・須恵器				
箕輪遺跡 5次	集落跡	古墳・中世	古墳周溝 溝 1基 3条	土師器・須恵器				
中廓遺跡 3次	集落跡	古墳・中世	住居跡 溝 1基 1条	土師器・須恵器				
西浦遺跡	集落跡	中世	掘建建物跡 複数棟 井戸跡 1基	陶磁器片ほか				
元境内遺跡 4次	集落跡	古墳	住居跡 8軒	土師器・須恵器	地震痕跡（噴礫）確認			
宮脇遺跡 2次	集落跡	古墳	住居跡 2軒	土師器・須恵器				
諏訪脇遺跡	集落跡	古墳	住居跡 2軒	土師器・須恵器				

埼玉県熊谷市埋蔵文化財調査報告書 第4集

市内遺跡(旧大里町)Ⅱ

箕輪遺跡 4次、5次
中廓遺跡 3次、西浦遺跡

市内遺跡(旧江南町)Ⅲ

元境内遺跡 4次
宮脇遺跡 2次、諏訪脇遺跡

平成21年3月21日発行
発行／埼玉県熊谷市教育委員会
印刷／大屋印刷株式会社